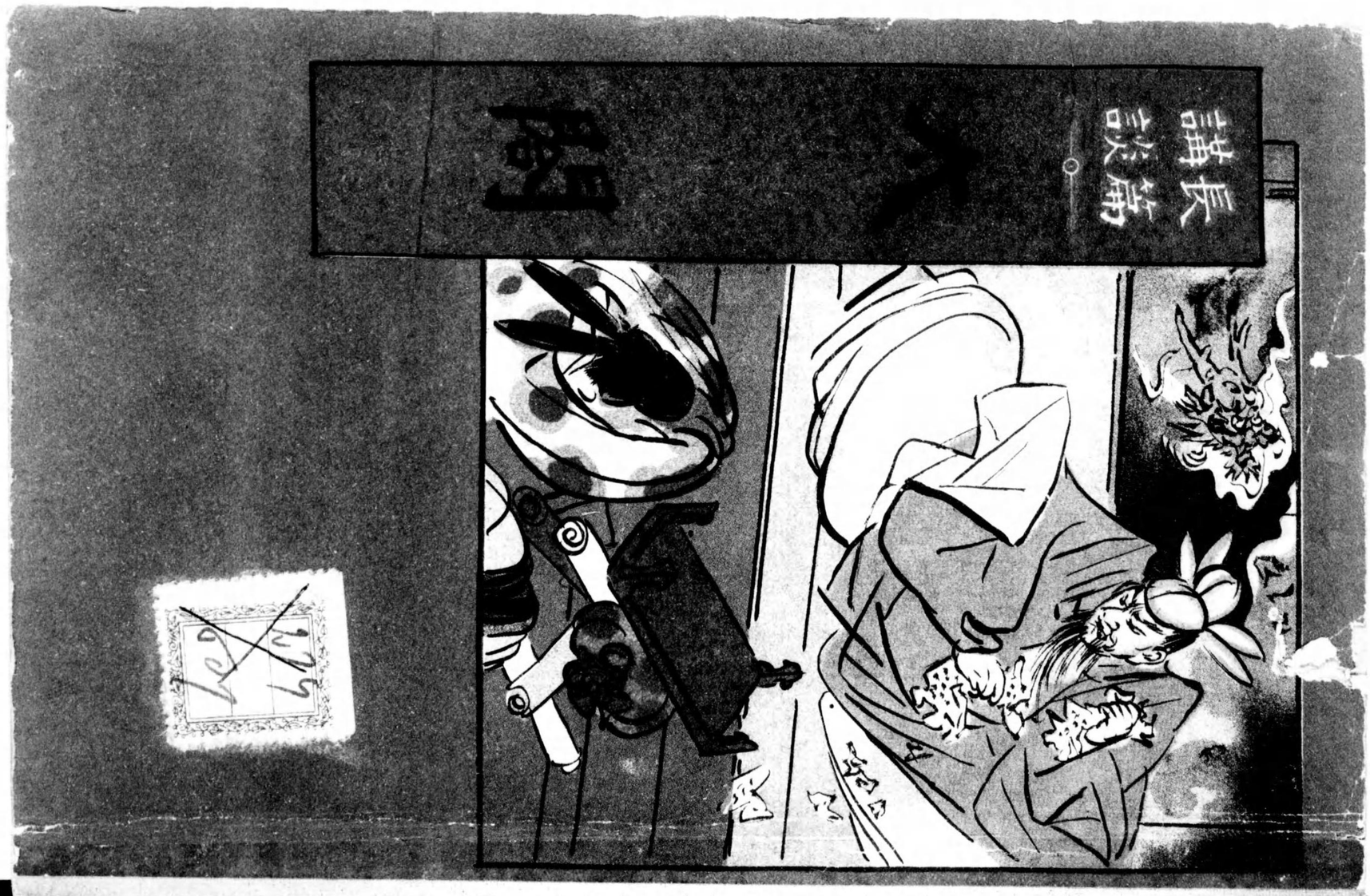
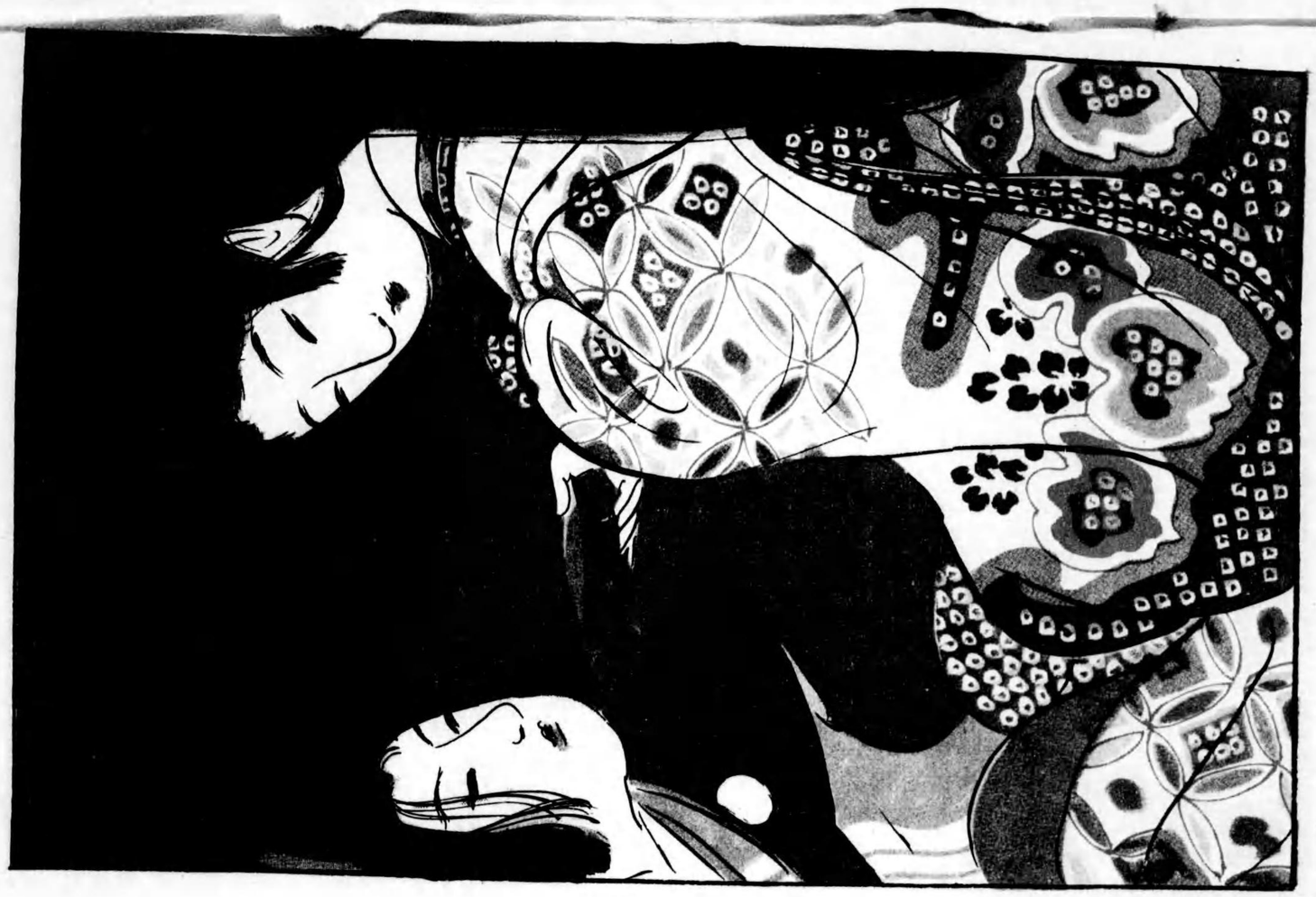
長崎談話會


鏡
韓東晴遠著

納本

106
801



長篇講談　太閤

次

明治文庫

大正 7.9.9 内交

目次

第一席　徳川勢尾州犬山の城を攻むる事、並に松平又七郎戰場へ赴く事……（一）

第二席　羽柴秀吉小牧山の合戰を淺野長政より聞取る事、並に秀吉出陣の事……（三）

第三席　後藤五郎作平松金次郎を罵る事、並に金次郎巨蛇退治の事……（一三）

第四席　小牧山の激戰敵味方亂軍の事、並に池田勝入齋討死の事……（一三）

第五席　德川家康勝入齋の首實驗の事、並に德川勢引上げの事……（四三）

第六席　本多平八郎忠勝秀吉の旗本へ切入る事、並に忠勝加藤清正と鬻戰の事……（五三）

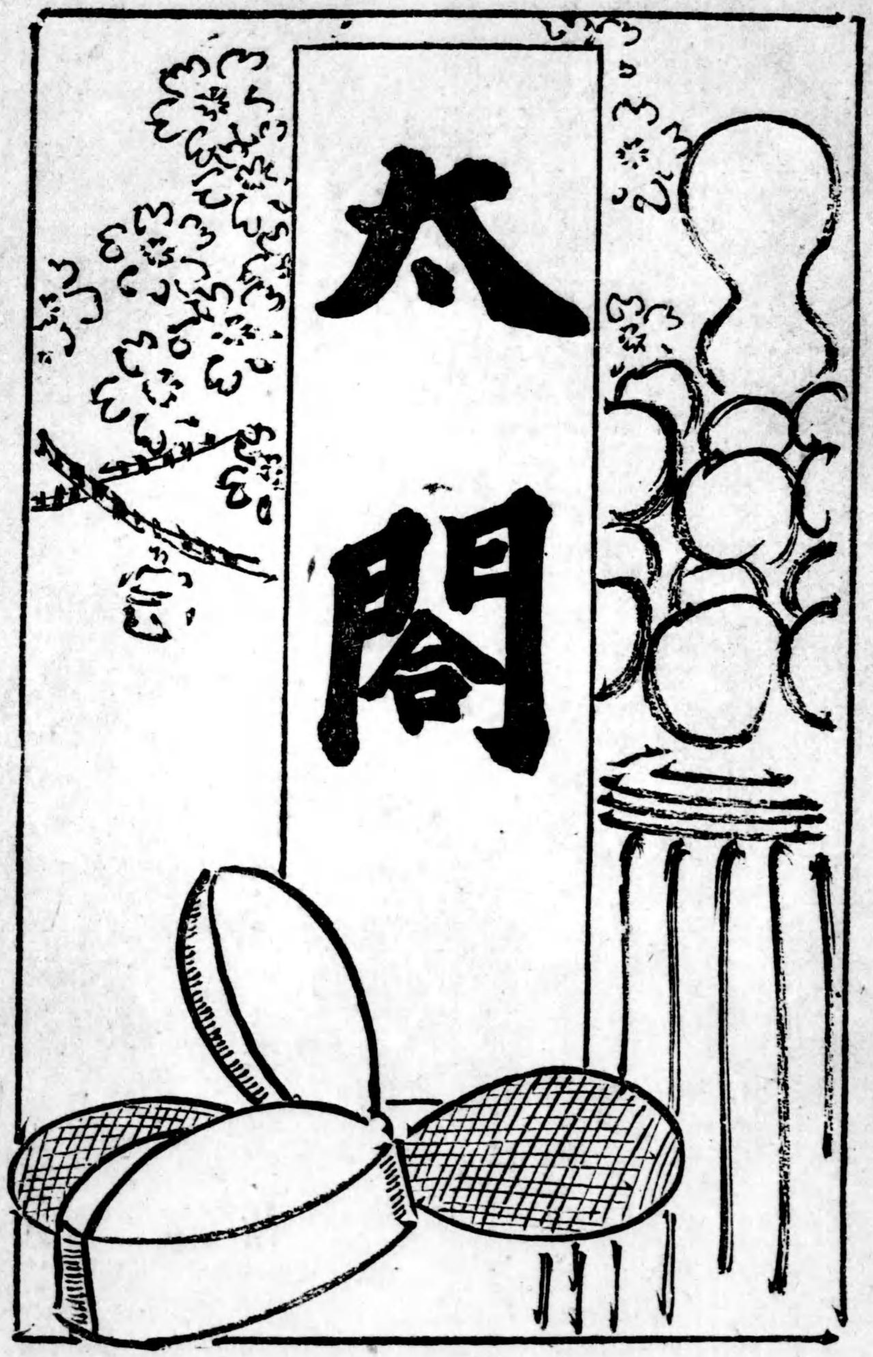
第七席　家康敵の大將を惜む事、並に羽柴勢小牧山引揚げの事……（六四）

第八席　秀吉家康和睦の事、並に秀吉官位陞進の事……（七四）
第九席　秀吉家康と縁組の事、並に長曾我部元親獅勇の事……（八四）
第十席　正則三成評論の事、並に四國征伐出陣の事……（九二）
第十一席　加藤清正長曾我部信親と一騎討の事、並に片桐且元四國へ使者の事……（一〇四）
第十二席　長曾我部元親降參の事、並に秀吉關白となり諸臣の姓を賜はる事……（一一五）
第十三席　北條征伐小田原陣の事、並に伊達政宗延着の事……（一二四）
第十四席　秀吉政宗の領地を削る事、並に捨若君出生の事……（一三三）
第十五席　秀吉諸國行脚思ひ立の事、並に臣下一同諫言の事……（一四二）
第十六席　曾呂利新左衛門諷諫の事、並に新左衛門米倉拜領の事……（一五一）
第十七席　大明攻め評定の事、並に淺野長政家康を罵る事……（一六〇）
第十八席　大政所憂慮の事、並に朝鮮へ出軍の事……（一六九）
第十九席　三條局加茂御代參狼藉に遭ふ事、並に淀君謹慎申付けるらゝ事……（一七八）

第二十席　淀君月見の宴を開く事、並に淀君不破伴作に懸想の事……（一八七）
第廿一席　伴作淀君へ諫言の事、並に關白秀次亂行の事……（一九六）
第廿二席　淀君三成密策の事、並に名護屋陣中諸將會談の事……（二〇五）
第廿三席　名護屋陣中無禮講を催す事、並に秀吉の桃賣大評判の事……（二一五）
第廿四席　大政所薨去の事、並に秀頼誕生の事……（二二三）
第廿五席　秀次一の臺の侍女を殺す事、並に木村常陸介忠義の事……（二三一）
第廿六席　秀次の亂行上聞に達する事、並に常陸介秀次に諫言の事……（二四一）
第廿七席　常陸介屢々秀吉を覘ふ事、並に不破丹波守石川五右衛門を勸むる事……（二五〇）
第廿八席　丹波守五右衛門を訪ふ事、並に五右衛門大事を引受くる事……（二五八）
第廿九席　五右衛門妻子に別を告ぐる事、並に秀吉の寢所へ忍入る事……（二六七）
第三十席　千鳥の香爐奇瑞の事、並に石田三成五右衛門を取調る事……（二七五）
第卅一席　五右衛門秀吉を罵る事、並に三條磧釜焙の事……（二八四）
第卅二席　増田長盛路次に秀次を圍む事、並に秀次高野山に退去の事……（二九三）

第卅三席　福島福原高野へ押寄する事、並に秀次生害の事……（三〇二）
第卅四席　御簾中愛妾三條殿に慘殺の事、並に加藤清正閉門の事……（三一二）
第卅五席　京都表大地震の事、並に清正誠忠桃山出仕の事……（三一〇）
第卅六席　政所清正の勘氣を執成の事、並に清正桃山城警固の事……（三二〇）
第卅七席　清正女鐵門に三成を拒む事、並に淀君清正の勘氣御免を願ふ事……（三二九）
第卅八席　秀吉自ら清正を吟味の事、並に清正三ケ條申開き朝鮮征伐物語の事……（三四八）
第卅九席　清正の勘氣御免の事、並に大明より使節來朝の事……（三五七）
第四十席　秀吉大明の使節引見の事、並に秀吉封冊を裂く事……（三六五）
第四十一席　清正蔚山に乘込む事、並に籠城苦戰の事……（三八三）
第四十二席　鎌田五左衛門兵粮入れの事、並に南蠻船漂着の事……（三九一）
第四十三席　布教使イルマン品物献上の事、並に妙術を現はす事……（四〇〇）
第四十四席　三條局懷姙の事、並にバテレン日本の娘と婚約の事……（四〇八）

第四十五席　瀧川主水バテレンに狙撃さるゝ事、並に耶蘇教徒お仕置の事……（四一七）
第四十六席　三成秀丸を殺さんと計る事、並に利家元丈法師を見破る事……（四二七）
第四十七席　栗柄八平次紅梅を殺す事、並に淀殿三條の局と口論の事……（四三八）
第四十八席　三條局生害の事、並に秀吉病氣重體の事……（四五一）
第四十九席　秀吉前田利家德川家康に後事を托す事、並に秀吉薨去の事……（四六〇）



目次終

太閤

揚名舍桃李講演

（第一席）　徳川勢尾州犬山の城を攻むる事、並に松平又七郎戰場へ赴く事

長篇講談第二十一編『豐臣秀吉』に引續きまして、今回は『太閤』と題し小牧の大戰から申上げることに致します、天正の十二年三月十五日池田勝入齋父子は、森武藏守、遠藤但馬守と共に北畠の侍大將中川勘右衛門の籠りました尾州犬山の城を美事に攻め落しました、この池田勝入齋信輝といふ方は、犬山は元自分の領して居りましたる所、是れは第一に攻め落して夫れより勝入齋犬山に入り、尙ほ小牧山近傍に放火をいたして軍勢の通路を容易くいたしましたのは、流石戰場場數に馴れた致方でございます、然る所徳川家康公に於ては尾州清洲を御進發になつて、小牧山の丑寅に當る小牧の麓に陣構へをいたしたは、秀吉の大軍此の所に來るに相違ないから是れを拒がんと云ふの心底、で北畠殿へ對して右の次第を申上げましたから、有繋は徳川家康、戰ひの道を

知つて秀吉の大軍來らんとする其要害第一の所へ構へを立つたるは、味方に取つて此上もなく力を得たるものなりと欣喜雀躍をいたして居られまする、此方池田勝入齋に於ては諸所に放火をいたして充分に眼の屆く先きを燒拂ひ、遙かに向ふの方を見てあれば、這は抑も如何に白地に靑く三葉葵の旗數十流を飜し、金五本指開き扇の馬章、三つ葉葵の三方角切りの小纏ひを押立てたるは徳川家康の同勢、鶴翼に備へ立てゝ居ります　信『偖こそ海道一の名將と云はれたる徳川家康最早此地に出軍をいたしたるからは此儘棄置く所でない』と心得居りまする內に斥候の者立歸つて右の次第を若殿紀伊守に申上げる、然る所池田の若殿紀伊守は勇猛絕倫の人なれば聞きも敢へず直ぐに備へ立ての用意をいたし、合戰に及ばんと致しましたる時に、父勝入齋大いに驚き直樣紀伊守を呼返し　勝『コリヤ悴匹夫の勇に誇つて合戰するは宜しからず、急ぎ退鐘を鳴して犬山に引揚げるやうに仕れ、少しも猶豫いたすことは相成らぬ』と勝入齋は何故か頻りに下知をいたしまする、紀伊守父の面を見て居りましたが　紀『如何なれば父上例に變りて左樣なる弱きことを仰せ給ふや、敵は今小牧山に陣して其備へ固まり不申、討つべき時ではござりませぬか、徳川家康譬へ智勇兼備の大將なるにも致せ其れ程迄にお驚き遊ばすことはございませぬ、敵の旗色を見て唯の一戰にも及ばず引揚ぐる時は、池田父子は徳川の旗に驚いて退陣いたしたと云はれ、子々孫々の恥辱でございます、急ぎ合戰の用意あつて然るべくと存じまする』勝『控へよ、戰の場に臨んで若年の汝の諫言を入れる某でない、吾は徳川の大軍を恐るゝにあらず、況んや家康其者の采配

を恐るゝにもあらず、今日戰ひを致せば此上もなき身方の不利益にして、犬山の城も德川勢のために攻め落さるゝこと鏡に掛けて見る如し、早く引返して犬山の城を守らなければ相成らぬ、則ち表面の敵より裏面の敵を拒ぐを肝要となす」と勝入齋少しも紀伊守の云ふことを肯かず、退鐘を鳴らしたること故に據ろなく池田の大軍は德川の大勢を唯遠くで見たばかりで人數を引揚げることに相成つたのであります、此時紀伊守天を仰いで歎息なし　紀『アツア麒麟も老いぬれば駑馬に劣るとか申す譬への如く、父に於ては是れまでになき憶病至極の致方なり、最早この合戰は敗けなり』と太く打歎きました、然る所今勝入齋の指圖通り人數を引揚げんとした時に、德川勢の内より大須賀五郎左衞門の同勢、既に勝入齋この近傍に放火いたして居る内に犬山を乘取らうといふ積りで兵を率ゐて此方に進軍いたしました、此時に犬山の城内にては伊木清兵衞、片桐半左衞門等が相守つて居つた、所へ突然大須賀五郎左衞門の六千の大軍が攻め掛つて參りまゐした、去れば速かに防ぎ矢をいたし、必死とこれを拒いで戰ひ半ばに相成りました時に、池田勝入齋の同勢小牧山近傍に放火して燒拂ひ犬山へ引揚げて參りました、去れば大須賀の同勢犬山城を乘取ること能はずして忽ち兵を引揚げた、これを見た池田紀伊守に於ては、初めて父の前に兩手を突へて　紀『父上、若年の身を以て父の命を拒みましたるは恐れ入ります、成る程表面の敵よりも裏面の敵と仰せられましたが、今一ト足遲かりせば犬山の城は德川の手に渡りまする所、是れを免れたるは誠に辱けなう存ずる』と盡く父に詫入りました、尤も此手に向つたるは大須賀五郎左衞

門ばかりではございませぬ、酒井左衞門尉忠次も二陣に續いて取詰めたのであります、けれども先づ斯う云ふ譯で城内に居りました兵士も初めてホッと云ふ息を吐いた位ゐ、さて此方は德川三河守家康、池田父子が小牧近傍に放火をして戰はず、俄かに退鐘を鳴らして居城を差して人數を引揚げたる始終の注進を聞し召して、勝入齋の采配天晴れ戰場々數の者にて彼等父子は容易ならぬ者なりと盡く家康御感服あらせられました、德川家康といふ人は必ず人のことを褒め又人の爲したることを能く記憶いたして居る方であるから中々どうも容易ならん人で、爰に森武藏守、遠藤但馬守の同勢に於ては池田勝入齋が人數を引揚げたること故、羽黑八幡林に人數を立つて居ります、羽黑八幡林といふのは小牧山と犬山との間でございまして誠に要害の宜しき所、武藏守は今年二十七歲の若大將にして遠藤但馬守はもう五十に餘る人、屢々戰場に功を彰はした人物でございます、然る所家康公忠次を召され　家『忠次、今日其方を招いたのは餘の儀にあらず、羽黑八幡林の間に森武藏守、遠藏但馬守の同勢一萬餘人備へを立つて居る、是れを如何にしても打破らなければ成らぬ、由つて其役を其方に申付ける、左樣相心得よ』　酒井左衞門是れを聞き　左『委細畏り奉りました』家『副將として大須賀五郎左衞門其方に申付ける』五『委細畏り　奉る』忠『人數は何程用意いたして然るべく　候や』家『去れば武藏守一萬人と云ふ小勢である、其方等二人にて三千の大軍を以て當らば澤山であらう』　大須賀は酒井と互ひに顏を見合はして居たが分らない、大將少し耄耄けて居る、どんな算盤で當つて見たつて一萬の方が小勢で三千の方が大軍といふ法

がありやアしない、變なことを仰しやると考へて居りましたが　五『エ、吾君に伺ひ奉ります、三千の大軍を以て一萬の小勢を打破れといふのは如何なることでございます』家『コレ〳〵五郎左衞門何を申す、敵は一萬の小勢であるから其方と酒井の兩人三千人を以て是れを討てと申すのぢや、一騎當千といふことがある、彼れの兵は一萬あるとも取るに足らぬ雜兵輩、吾が德川の精兵三千は大軍ぢや、この言葉の反古に成らぬやう隨分注意して戰へ』五『ヘエ』ハ、ア大將偖ては彼んなことを仰しやつて味方を勵ますのだなと思つて　五『御心底相分りましてござる』と爰に御前を退つて酒井大須賀の兩名、名立たる兵のみ三千人を以てエイ〳〵聲して押出だし、羽黑八幡の方に取詰めました、時は天正十二年三月十六日のことであります、眞ッ先には白地に黑く葵の紋付いたる旗一流れを飜へし、金御幣の馬印を押立て既に人數を半途まで繰出だしたる其時、此方は遠藤但馬守豫て斯くあるべしと覺悟したることなれば、近附く儘に數百挺の鐵砲筒口を揃へて擊出したり、其れがため彈煙混沌として白晝變じて暗夜の如く、其間より槍襖を作つて遠藤の同勢が突出でる、酒井大須賀の同勢心得たりとあつて同じく太刀、槍を以て是れに渡り合ふ、或は鐵砲を放つといふ有樣、必死になつて戰つたり、時に遠藤但馬守の軍中より洗皮の鎧を着用して同じ毛絲三枚錣の兜を戴き鹿毛なる駒に打跨り、大身の槍を小脇に搔込み『仁科權太左衞門』と名乘つて躍り出で、見る〳〵內に多くの敵を打破りまするの樣子、其勢ひに德川勢に於ても少しく足並亂れて見えたる時に、此働きを見て面憎しとや思ひけん、白絲縅の鎧を着し、四方白の兜

を押頂いたることにて籠手臑當を嚴重になし、白毛の馬に一ト鞭呉れて乘出だし、槍を振つて大音を揚げ『吾は德川の家來奧平九八郎信昌なり、權太左衞門に見參いたさん』と呼はつたり權『心得たり』とあつて權太左衞門馬を引寄せ電光石火と戰つたが勝負がつきません、打物業は面白からず、イデ組まんとあつて双方得物を投出だし、エイヤ、オーと引組んで暫くの間揉合つて居りましたが、馬上組打ちの習ひとして兩馬の間にドーと落ち、暫時の間は上に成り下に成り揉合つて居りましたが、何う云ふ機みか引組んだるなりゴロ〳〵と川中へ轉がり落ちました、敵も味方もこの樣子を見て『ソレ奧平九八郎を助けよ』と云ふ聲と仁科權太左衞門を救へと云ふ聲は夥しく然れ共誰一人として水中に這入るものはござりませぬ、暫くの間唯ワッ〳〵と云つて眺めて居りまする內に、忽ち水は血を流したる如くに眞ッ赤に成つた、偖てはと思ふ其內に、權太左衞門の首を切り落し、九八郎上にノコ〳〵這上つて來て大音揚げ『奧平九八郎、仁科權太左衞門を討取つたり』と名乘りを上げましたから、敵に於ては大いに驚いたる樣子、この有樣を見るより酒井忠次『ソレ此圖を外さず森勢を打破れ』と下知を傳へましたから德川勢は嵩にかゝつて討入りまする、氣勢を呑まれて武藏守の大軍タジ〳〵と雪崩を打つと大軍丈けに仕末が惡い、大剛無双の武藏守バリ〳〵と齒咬をなし　武『是程の敵に打破れて何とせん、此上は目に物見せて呉れん』とトウ〳〵と馬を乘出したる樣子、武藏守其日の扮裝は赤皮胴、中一段を白絲を以て縅したる鎧を着用し、同じ毛絲五枚錣四方銀向ひ獅子の前立打つたる兜を戴き、猛々緋に金絲を以て男波女

波月に兎の高縫をなしたる陣羽織三間柄穂長の槍を携へ連錢蘆毛の馬に鐵鞍置いて打跨がり、素より馬術の達人なれば馬を自由に乗廻し大音揚げたることにして　武『遠巻のヒヨロ〳〵武士能く承はれ、羽柴勢に左る者ありと知られたる森武蔵守長可とは我事なり、吾と思はむ者は出でゝ勝負を決せよ』と呼はり〳〵縦横無盡に馬を乗廻すの有様、此人は前にもお噂を致して置きました森勝蔵の昔から武勇拔群で流石の上杉勢も舌を捲いた程の大將柴田勝家の組下で一と云つて二とは下らない人物、武蔵守と任官してから人呼で鬼武蔵と云ひ一目も二目も置くといふ三左衛門可成の嫡子で武蔵守長可、僅なる徳川勢に敗れたとあつては一代の名折れと手馴たる大身の槍を提げ現はれた有様は天魔破旬の荒れたかと思はるゝ計り、徳川勢はワッといふと二三町退いた、されどもこちらも名に負ふ酒井左衛門『者共進め武蔵守とて鬼神にはよもあるまい引包んで打取れ』と激しく下知を致しましたから徳川勢再び立直つて打寄せる　武『もの〳〵しや』と計り再び槍をひねつて突いて入れば徳川勢又バッと崩れる、追ひつ返しつ二三度四五度揉合ひました、其所へ武蔵守の忠臣橋本兵太夫といふもの進み出で　兵『先づ〳〵君には一旦御退き下されたく、斯る場合に棄つべき御命にはござりませぬ、御引き下さいますように』と無理に馬の轡を取つて本陣へ引戻さうと致します、がさうかと云つて直ちに引返す様な鬼武蔵ではない　武『離せ兵太夫、多寡の知れたる徳川勢我一人にて打破つて見せるであらう、なまじい雑兵共を頼みにすればこそ敗軍もすれ、一人にて戰ふのである、退けよ、離せよ』とヂリ〳〵して居るから堪らない、鞭を揚

げて打つ、鐙を以て蹴るけれども忠義の爲めと一生懸命馬の轡をしつかと握つた兵太夫打てども蹴れども何うしても放さなかつた、今年二十七歳の若大將であるから氣は荒い、武蔵守の家來野呂助右衛門　助『君に代つて某が一崩しにいたして呉れん』と徒歩にて三尺二寸の太刀を眞向に閃かしたることにして徳川勢に切つて入る、二人三人四人と渡り合つて切倒される、見る〳〵内に十二人の兵を切つて落した、僅た一人の爲めに徳川勢四度路に成つて崩れ立つたる様子、此時松平主水頭六百餘りの精兵を撰つて横様に森の備へに突き入りましたから流石鬼武者の武蔵の旗下も崩れたつて參りました、武蔵守は兵太夫に諫められ死力を以て轡頭に縋つて居りますからどうする事も出來ない、思はず崩れる味方に押されて戰場を退きました。野呂助右衛門は世に聞えある剛の者なれば、三尺二寸の陣刀のためにバタ〳〵と討たれる、其れがために死骸は積んで山をなし、血は流れて泉をなすの有様でございますから、今や助右衛門のために崩れ立たんとして居ります、爰に十八松平の一人三州形原の領主松平主殿頭の若殿松平又七郎家信と仰しやるお方は御年十七歳でございまして、此度の戰ひに留守居役を命令つて居ります、丁度此合戰の折でございますが、三州形原と云ふ所は好いところと云ひたいが隨分邊鄙な所で、庭先きにて出小鳥が好きであるから又七郎頻りに籠に入つて居る小鳥をまた外の籠に入れたりなぞして日當りの好い縁側で頻りに小鳥をいぢくつて居りますと、垣根の外で『アハ、、、どうも大旦那は大層なものだが、若旦那は何んだえ、好い若い者が隱居のするやうな小鳥などをいぢくつて小鳥が大きく成り

やア何うするんだ、迚もこの鹽梅ぢや親父さまの跡を襲ぐことは出來ねえ、全然馬鹿だな』と申して居ります者がある　又『誰だ夫れへ參つて馬鹿だなアといふのは……』甲『へエ、是れは若旦那お耳に這入りましてございますか』ニューと這入つて來たのは本年五十四歳に相成る彌兵衛といふ槍持だ　又『何んだ猥りに庭先へ這入つて來て、唯今其方の申すことを聞いて居れば意氣地がないの、臆病だのと云ふが全體誰のことを申すのぢや』彌『へエ意氣地のない臆病といふのは若旦那貴郎のことでございます』又『コラ控へろ不埒な奴だ、何で左樣なことを申す、拙者は臆病なこともしたこともなければ意氣地のないことをした覺えもない、何故左樣な』

彌『去れば さ、マア能く物を積つて御覽なさい、お父樣は戰場に出て働いてお出でなさるのに、若旦那は家に居て小鳥をいぢくつて遊

んで居る、世の中に斯んな反對のことがございますかな、本來なればお父樣が小鳥をいぢくつて、貴郎が働かなければ成らねえんだ、其の譯が私には分りませぬ、此度の合戰といふものは、羽柴筑前守秀吉といふ者を相手にして北畠樣が戰さをするので、筑前守秀吉は容易の男ではござりましねえと云ふ、大殿樣は小牧山へ人數を出して今日か明日か天下の分目、何方が勝つか敗けるかと云ふ大切の場合でがす、そんな大切な戰さがあるのを知らず顏に家にボンヤリ鳥などをいぢつて居ると云ふのは、第一親に不孝で君には此上もねえ不忠だ、マア私が馬鹿野郎といふのは爰の處だがね』又『イヤ一應は道理であるが、父上が呉れ〴〵も戰に出ては成らぬと仰しやるから斯うやつて居るのぢや、本意でないが仕方がない』彌『インニヤ、譬へお父さんが何んと云はしやつても、家にボンヤリ引込んで居ちやア仕方がありましねえ、斯う云ふと何んでございますが、此の戰さに出て貴郎がいゝ敵でも討取ると大層

なものでございますよ、夫れは軍令を破つて行くのだから宜しくないと思つて遠慮をしてお出でなさるのか知れませぬが、然んなことを云つて守つて居た日にやア、大功を立てることは出來ましねえ」又「ウム」彌「夫れだから貴郎一つ戰さに出て立派な働きをなさいまし」又「然らば彌兵衞、行かうか」彌「行きませう、私が跡から槍を以て御供をいたします」又「さうか、夫れぢやア然う云ふことにしやう」と松平又七郎家信も其氣になつて、ソロ〳〵出掛けやうと仕度をする、と外の者はお父上の命令に背いてさう云ふことをしては成りませんと止めましたが却々承知しない、馬に乘つて出掛けますと槍持の彌兵衞が跡から槍を擔いでドン〳〵飛出して息せき切つて羽黑八幡の林まで乘込んで來た、時は天正十二年三月十七日午の刻頃でございまして、前申し上げました通り八幡林の大戰、森武藏守遠藤但馬守は既に苦戰に陷つて野呂助右衞門が必死の働き、德川勢其れがために一度崩れ掛つて助右衞門に當る者がございませぬ、此時土手の上に昇つて見て居りました槍持の彌兵衞　彌「アレまア若日那見さつしやりまし」と大聲で又七郎を手招ぎして居ります。

（第二席）　羽柴秀吉小牧山の合戰を淺野長政より聞取る事、並に秀吉出陣の事

又七郎家信　又「ヤア豪い合戰ぢやな」彌「只今働いて居るのが野呂助右衞門といふ奴で、同じことなら那云ふ奴を相手にして戰つて首でも取れば、お父樣よりグッと功名になりますな」と又七郎、

樣子を見て居つたが餘り其働きが鋭どいので如何にも進むことが出來ない、彌兵衞側から　彌「サア若日那、彼所へ出て働かなければ不可ませぬ、彼の敵が怖いやうなら馬鹿野郎といはれても腹立つことはならねえ、矢ッ張り戰さに出て來ない方が好いので、家で鳥の籠でもいぢくつて居た方が好うございます」と勵まされて又七郎暫くの間考へて居りましたが　又「此上は彼れに參つて野呂助右衞門の首を取つて呉れん」とトッ〳〵〳〵と馬を乘出して大音を揚げ　又「ヤア〳〵其所に働きをなすは野呂助右衞門と見たは僻目か、松平又七郎家信見參せん」と呼はつたることにして槍をしごいて突いて掛る、野呂助右衞門は大眼をカッと見開いたることにして　助「默れ、若年なる身を以て此所に出づるといふは嗚滸の沙汰なり、汝如きものを相手にする助右衞門でない」と繰出したる槍を摑んでウンと逆に押したること故、又七郎は馬諸共に跡へタジ〳〵〳〵と退がつた、助右衞門に於ては其儘にして行過ぎんとなしたるのをば再び槍を取直して　又「是れ助右衞門暫く待て、此場に至つて敵に後ろを見するか止れ」と追ひ掛けて來た、是非に及ばず助右衞門　助「其儀ならば汝の息の音を止め呉れん」と陣刀を取つて打込んだることにして、又七郎が繰り出したる槍のケラ首をカッキと切落し、南無三と思ひしが又七郎若年ながら剛の者なり、イデヤ組まんとあつたることにて、助右衞門に於ても斯ういふ者と組打ちするは本意なけれども名乘られて見れば是非に及びませぬ、其儘得物を投捨てゝエイヤッと引組んだり、其内に兩馬の間に組んだる儘にドウと落ちた、戰場往來、事に馴れたる助右衞門今年五十二歳、片々は十七歳の若武

者兎ても齒が立たない、忽ちの間に又七郎を組み伏せ胸金物の邊りを確と押へ、アハヤと見えたる時に傍に見て居りました槍持の彌兵衛大いに驚き　彌『オヤ是れは大變』と彌兵衛に於ては其處らに落て居た槍を取て助右衛門の脇腹へプツリ槍を突通した、アッと云つて力の弛んだる所を又七郎忽ちに刎ね反して、ヤッと云ふとヒラリと助右衛門の上に乘掛りました　彌『若旦那……サア首だアよ』亦『アッ彌兵衛其方が助けて呉れたのか』彌『誰も外に助ける者はありましねえ、早く首を切つておしまひなせえ、首せえ切れば働く者はございませぬ』忽ちの内に又七郎に於ては其所に首を打落した　彌『ヤーッお手際〳〵、夫れを刀の先きに突刺して名乘りを揚るのでございます、名乘りを揚げないと功名帳へ付けるのに不都合でがす、夫れを差上げて大きな聲でお呶鳴んなさいやし』又『委細心得た』彌『委細心得たなんて然んな愁長なこつちやア可かねエ、早く〳〵』又『エ、蒼蠅な』夫れより又七郎再び馬に乘つたることにして陣刀の先きに助右衛門の首を貫き、これを充分に差上げ　又『ヤア〳〵敵も昧方も能く聞き候へ、今日の戰ひに野呂助右衛門を討取つたる者は十八松平の内三州形原の松平又七郎家信なり、松平又七郎野呂助右衛門を討取つたり』と大音に呼はる跡より彌『槍持の彌兵衛も少し手傳たり』と怒鳴るから又『何んだ、貴樣まで然んなことを云つて』彌『だつて手傳つたから申すので』又『然んな大きい聲をするな、て其が聞えては外聞が惡いから……』是を聞いて敵も昧方もワッ〳〵と云ふ鬨の聲を揚げたために德川勢も再び勇氣を取直したるの樣子、然る所向ふよりトッ〳〵〳〵〳〵と馬を早めて乘込んで參りまする者は野呂助右衛門の一子野呂助三郎宗康であります、宗『唯今吾が父を討取りたる松平亦七郎は何れに居るや、助右衛門の一子助三郎宗康是れにあり、父の仇を討たんの心底、出でゝ勝負を決せよ、出で合ひ候へ』と呼はりましたが氣の利いて居る彌兵衛が何處かへ連れて行つてハヤ又七郎に於ては姿も相見えませぬ、すると此時其處へ馬を乘出したるは松平主殿頭、主『殊勝なる其孝心に愛で悴又七郎に代つて某し相手をいたす』と助三郎の馬側に近付いたること故　助『其儀なれば汝を先きに討取らん』と云ひながら得物を振つて打つて掛る、双方必死となつて戰つて居りましたが主殿頭が突出したる槍のために助三郎鎧の引合を突かれ馬上に堪らず其所にドッと落ちた、主殿に於ても續いて飛降り忽ちの間に首を刎落した　主『松平主殿頭野呂助三

郎を討取りたり』と呼はる聲が敵味方に聞えましたからまた〳〵ワーツワッと鬨の聲を揚る、偖て小牧の戰ひは略いたして申し上げますが、先づ四方八方の戰ひの模樣が斯う云つた風に兎角に徳川の旗色が好くつて羽柴方の方が惡うございます、唯今の處では羽柴方が八分の負北畠を助けたる徳川勢が六分の勝利だ、是れが大抵の大將ならば心配をして迚もどうも一大事の戰であるから早く其地に參つて采配を取らうと云ふのが尋常の人でございますが、秀吉は平氣なものだ、毎日猿樂などを催して少しも戰の報を聞いて驚く氣色もない、お側に控へて居りまする淺野彈正少弼長政が見兼たものか　長『申上げます』秀『何ぢや』長『細やかに小牧表の戰爭の模樣を申し來りました、何分にも味方の同勢浮足に相成り苦戰いたすの由、全く是れは遠三の兵彼地に進み戰ひを充分にいたしまするので、去るが故に味方先鋒に於ては多く戰の利を失ひまする事と存じます、御出陣あつて味方を助け玉ひ兵士の勇氣を增して、戰ひを充分に遊ばしては如何でございます』

秀『ア、左樣か、然らば出陣致すであらう、長政唯今より早々陣觸を致し、明朝出陣を致すであらう』長政は呆れた、是が五百や七百の小人數ではない、豫て用意はいたしてございますけれども十二萬の大軍を率ゐて彼地に赴くのですから少くも四日や五日の猶豫がなければどうする事も出來ない、夫れを秀吉と云ふ人は氣が短いから云ひ出しては『明日直ぐに御出陣に成るのは不都合でございます』と云へば忽ち御立腹になるのは知れて居る、長政と云ふ方も智惠があるに由り

長『委細畏り奉つりました』と申上げて御前を退る、すると石田佐吉が夫れに出まして　佐『申上

げます』秀『何んぢや』佐『最早進發の用意充分にいたしてございますれば唯今即刻御出發遊ばしても宜しうございます、道中も充分に手當を致しましてございます』石田佐吉が右樣に申上げると秀吉カラ〳〵とお笑ひになつて　秀『佐吉、其方は例ながら予の志しを知つて物を迅速に扱ひ居るが長政は明日出陣いたすと云ふのを聞いて澁々退り居つた、然し此の場合其方が手當は屆いたに由つて唯今より出陣いたして好いと申すと長政のために其方恨みを受ける由つて出陣は明日にいたす左樣心得ろ』大將となると斯る事にも心を配りませんければ成りませんもので、秀吉は家來同士の軋轢を非常にお嫌ひなさる、尤も天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずで家來同士の和合といふ事が一番戰には大切、精兵百萬ありと雖も軍師や大將の間がスレ〳〵でありましたならば戰は必ず負けるものでございます、秀吉でも家康でも家來同士の和合には盡く御心をお配りなすつたもので、其處へ行くと信長は少しも左樣なことにはお構ひがなかつたやうで光秀は森蘭丸を憎んだ餘りに本能寺の變といふとも起つたのであります、去れば爰に夜を徹して進發の用意を整へ天正十二年四月七日總軍十二萬の大軍を從へて大阪城を進發いたしました、モウ途中に於て一里二里毎に充分糧の用意をいたしまして勿論兵粮が乏しいやうなことでは相成りませぬ、道中悉なく同月二十四日に至りまして美濃の國は大垣に對して着に相成りました、然る所が愈々筑前守秀吉大軍を率て大垣表に着いたしたと云ふことを聞くと、敵兵に於ても充分其用意をいたし相待つて居りまする位ゐ、秀吉に於ては直樣手配をいたし、第一左備へは日根野備

中守同く彌次右衛門の兩名を大將となし、是に長谷川藤五郎秀一を加へ其勢二千八百人、右備へは筒井伊賀守貞次、同家臣飯田三郎次郎、宮尾宮内等千餘人是に控へた、中の手は三好孫四郎秀次、一柳市助直盛、堀尾茂助吉晴等一萬餘人、第二番手は細川越中守忠興を大將として六千餘人、右備は堀久太郎秀政、小川土佐守茂光の同勢四千餘人、中軍には蒲生忠三郎秀郷、木下半左衛門の軍勢二千餘人、三番手左備は氏家内膳正、德永石見守の同勢二千八百餘人、右備は中川藤兵衛秀重中川平右衛門の同勢二千餘人を從へたり、續て蜂須賀小六家政、宮部善祥坊三千五百餘人、生駒市左衛門一世、世良田左馬之助、牧村長兵衛三千七百餘人、其他黑田官兵衛孝高、前野勝右衛門、伊藤掃部助、木村小隼人、高山右近太夫、金森五郎八入道、明石與四郎、丹羽五郎左衛門尉長秀、加藤虎之助、加藤孫六尼木六郎左衛門、福島市松正則、脇坂甚内安晴、平野權平長康、野々村肥前守、山名衛門太夫、糟谷助右衛門、本陣羽柴筑前守秀吉、旗本の面々には毛利河内守、伊木半七、櫻井佐吉、伊東主計、赤松彌三郎、平野九右衛門、片桐助作、石田佐吉後陣の方に

は蜂屋兵庫守、淺野彌兵衛長政、富田平左衛門、津田小三郎、柘植與左衛門、古田内匠頭、戸田彦五郎宮城藤右衛門等の同勢七萬八千餘人、兵粮奉行、小荷駄に至るまで、相完備して旗差物馬章は野に滿ち山に漲り宛ら竹藪の如く太鼓、貝、鉦の音はトウ〳〵と天地を震撼するばかり、實に物凄きばかりの有樣でございます、偖て二十七日に至りまして諸軍に於ては斥候の者を出だして敵の樣子を探る所が何分羽黑八幡林には悉く敵嚴重に備を立てゝ居ります樣子、秀吉は淺野彌兵衛、戸田彦五郎、富田平左衛門等をお召になり『充分敵の模樣を探り參るやうに』と云ふ仰せであります、是は戰場には能くあることにて、軍勢が到着したからと云うて突然開戰に相成るものではありませぬ、一時化粧軍と云ふのを致して敵の樣子を見て夫から今度が充分戰ふのでございます、是からが小牧山合戰の本舞臺、秀吉と家康の軍略の巧拙、池田勝入齋の武略より致して、虎穴に入つて虎兒を擒らんといふ冒險戰、即ち名代の長久手の戰に相成りますが此手捌きから軍略陣立などをお話し致します、夫れではお慰みになりませんから略して申上る、こゝに池田勝三郎信輝入道勝入齋は自分の

婿である所の森武藏守が敗軍したのを憤りまして秀吉の大軍が小牧山の家康を牽制して居る間に間道から岡崎に乘込まうといふ軍略で押出しました之に氣のついた德川家康、秀吉は唯牽制する計りで戰をする氣のないといふのを見破つて、旗本の精兵をさぐつて勝入齋を追駈けたが濃州長久手で追付いた、玆で池田勢と火の出る樣な合戰を致しましたが德川勢に前後を圍まれた池田方は大に打破られまして森武藏守は討死する、池田勝入齋信輝は大いに驚き悲しみ信『武藏守を討たしめた上からは此身も存命へて何かせん』と早くも討死の覺悟を致しました、御子息紀伊守に於ては父の心を察しましたから父に代つて討死せんと大須賀五郎左衞門、松平主殿頭の兩手を相手に激しく戰つて居ります、勝入齋はまた悴を殺して何かせん、イデヤ最後の一戰なさんと手廻りの同勢を從へまして討つて出でました、尤も附從ふ人々には秋田勘兵衞、渡邊靱負、古田甚內、梶原兵七、今桐與三郎など何れも池田家に於て有名なる勇士の面々主人の供をして冥土黃泉に赴かんと勢ひ込んで打て出でました、小牧の家康は長久手の注進をおきゝになり鬼と呼ばれた池田の奮戰に舌を卷かれまして井伊萬千代丸に安藤彦兵衞、永井傳八郎直勝の兩人を差添へて一手の同勢と共に加勢にお遣しになりました、此新手が直に池田勝入齋の旗本に切つて入りましたから流石の信輝入道も進退谷まりまする樣な按排で御座います、こゝで一寸お話が變りますが德川家康はよく御家來に目をお掛になる殊にお小性などは悉くお愛しになります其樣子がいかにも溫かい、前回にも鳥渡申上げましたがつまり家來を使ふのが非常にお上手のお方、されば强い

ものは强い者のやうに使ひ、弱い若は弱い者のやうに使ふ、涙に脆いものは涙を以て使ひます、是れが上手なので人間は一人一役と申してあらゆる方面に使へるものでない、必ず一つは特長のあるもの、其の秀でた部分を物の役にさへ立てれば好いので、彼の楠正成が泣男を使つて敵を欺き大いに勝利を得たといふのも是れだ、家康のお小姓の內に兩金次郎といふのがございます、兩金次郎といつて姓名ではないので、金次郎といふ小姓が二人ある、一人は平松金次郎今一人は鳥居金次郎と申します、平松といふのは三州岡崎の住人平松金左衞門の悴でございまして小供の內から有名の臆病で臆病金次郎と綽名を取つて居りました、侍の悴にどうも相應しからぬ名前でございます、惡戲でもして大人に怒鳴られると蒼くなつて家へ歸つて來て震へて居る、朋輩には何時も打毆られてメソ〳〵泣いて歸つて來る親達も大層これを心配して、『今の內に彼の臆病を直さなければならぬ』と明暮れ申して居ります、所が二十二歲の時でございます、濱松勤番をいたして居りましたが用事があつて金次郎仲間二人を供に連れて、大小を帶して新井の渡船場へ差掛つて來るとお武家のことでございますから渡船場でも渡し錢を取るぢやアなし、叮嚀に致ます、金次郎船椽の所に腰を掛けて景色などを見て居ると、一人這入つて參りました身の丈け六尺以上筋骨逞ましく頑丈な、眼光鋭く鼻の尖つたどうも一ト癖あり氣の人物『許せよ』といつてつか〳〵と船に乘つて金次郎が腰を掛けて居る、其傍へ來たが、どう云ふ機みであるか刀の鐺が金次郎の腰のものにガチリと當つた、金次郎は身をすくめて小さくなつて居る、彼の侍は振向て金次郎

の顔をしげ〳〵と見て居りましたが　甲『御武家』金『ハイ』甲『唯今拙者が船に乗らうとした時に何にか宿意でもござるか、某しに對して鞘當てをなされた、鞘當てをする所を見れば決闘乃傷をいたさうと云ふ心底と相見える、船中で右樣のことをいたすと難澁の者もあらうから是れに上つて尋常の勝負を望みに任していたさう、サア上んなさい』金『これはしたり中中某しは決闘などをいたさうとは思はぬ、實を申せば御身の方から過つて鞘當てをなされたので拙者は少しも知らぬこと、左樣仰せられては迷惑をいたす』甲『ナニ〳〵拙者の方から當てたとは怪しからぬことを云ふ奴だ、柄のない所へ柄をすげる、有りもせぬことをあると云ふ怪しからん男だ』何方が怪しからんか分つたものぢやない、亂暴な奴で甲『サア上らつしやい』金『どうか御勘辨に預りたうござる』甲『イヤ成らぬ某しは闘八州の領主北條相模守氏綱の臣後藤五郎作照信といふものぢや、主人の名前までも斯く申したからはモウ勘

辨相成らんから勝負をしろ、其方は三河侍か、何んと申す』金『左樣で……』五『左樣ぢやない、自分の名を考へて居る奴があるか、徳川の腰拔け武士ぢやな』金『甚だ恐れ入ります』五『何んと申す者で』金『ヘエ、恐れ入りますが其所の儀は御勘辨を願ひたう存じます』五『ハ、ア、夫れでは耻を存じて居るか、姓名を名乗らんな』金『どうか御勘辨に預りたい』五『姓名を名乗らんければ勘辨は成らん、サア、勝負をしろ眞劍勝負をすることが出來ぬなら主人は何と申し手前は某しと明かに申したら次第に由つたら勘辨せぬとも限らぬ』金『恐れ入ります、どうか命はお助け下さい、平に此段御詫を仕る』五『唯勘辨をして呉れろでは不可ぬ、大小を脱つて兩手を突き切望御勘辨に預りたいと丁寧に申せ』と傍若無人益々増長がる後藤五郎作、臆病未練の金次郎は其の儘大小を拔取り傍らに置き船中に兩手を突て金『平に御勘辨に預りたうござる』と丁寧に頭を下げました

（第三席）　後藤五郎作平松金次郎を罵る事、並に金次郎巨蛇退治の事

餘りのことに仲間の太兵衛、主人平松金次郎の袖を押へて　太『若旦那、貴郎は餘まり腑甲斐ねエ御方だ、何んで謝罪るので……然なに謝罪ることはねえぢやアごぢいませんか、向ふから事を仕掛けて置いて貴郎が餘まり優しいから増上つて彼んなことを云つて居るんだ、此大勢の乘合のある中で侍が手を突ひて謝罪るなんど何てエことでございます』金『イヤ、迚も私には決闘などは出來ない』太『然んなことがあるものですか向ふも一人なら此方も一人、私だッて向ふ臆位ゐは打

つ拂ひます、眞劍勝負をなさい、侍は其の位ゐのことが出來なくちやアイザといふ時には仕樣がございません、ヨッ若旦那……』金『然んな事は構はぬ、人が笑はうが何んだらうが頭を下げて謝罪る……』後藤五郎作苦笑ひをして　五『アハ、ヤイ供をして居る仲間でさへ殘念だと思ひ勝負をなさいと勸めて居る、貴樣は大小を差して居りながら、頭を摺り付け、大小を取退けて詫入ると云ふのは甚だ怪しからんことだ』金『何んと仰せられても手前はモウ……御勘辨を下し置かるゝやうにとブル〳〵震へて居る　五『何故然んなに震へて居るのだ』金『イヤ貴郎が一ト言仰せらるゝ度毎に手前は胸がドキ〳〵いたします、どうか一命はお助け下し置かれたく存じます』五『アハ、、隨分世の中には弱蟲があるものぢやのう、どうせ三河の德川武士はこの位ゐのものだらう、好し好し勘辨をしてやらう』と云ひながら金次郎が謝罪つて居る肩先きの所へ足を掛けて置てウムーと踏付けた、アッと云つて其所へ倒れる所へパッと青痰を吐掛け　五『是れでも誤るか』金『どうなりましても手前の方は謝罪りますの一點張り……』五『謝罪るの一點張と云ふ奴もないものだ』乘合つて居る船中の者は驚いた、名前を知らなければ格別、中には德川家康の家來で平松金次郎といふ者だと知つて居る者もございます、ヒソ〳〵目曳き袖曳き　甲『どうです、呆きれたものぢやアございませんか』乙『本富にねェ彼れで御領主樣の家來なんだから驚いてしまひます、餘りと云へば情けない人だ』と噂し合つて居る內に船が向ふの岸に着く、皆ドヤ〳〵上がります五郎作も陸に上つて　五『コレ侍、最早是れで許してやる、イヤどうも其方のやうな奴があつたら嘸主人の

名前を上げるであらう』とカラ〳〵と冷笑つて行つてしまつた。サア是れが大變な評判、一犬嘘を吠て萬犬實を傳ふと云ふ譬への通り新井の渡し場で平松が斯う〳〵だと云ふ評判取分まして惡い事と云ふものは早く弘まりますもの　甲『どうだへ、此間新井の渡しで平松金次郎の憶病話し、ガタ〳〵震へて肩を蹴られて痰を掛けられたと云ふぢやアねェか』乙『困つたものだ、彼んな者があつた日にヤア德川の流れが濁れてしまふ』といふ噂さ、是が家康公のお耳に這入つたに由つて平岩七之助をお招になつて　家『七之助』七『ハ、ア』家『平松金次郎過日新井の渡船場に於て何か北條の家來だとか浪人だとか申する者に辛き目に遭たる由だが左樣か』七『お耳に入りまして恐れ入ります、實にどうも論に絕えたる事で』家『金次郎を呼べ』七『ヘエ』家『直ぐに是へ連て參れ』七『ソラ大變だ殿樣のお耳に這入て是は御手討だ、金次郎に話したら驚くだらうと思つて詰所に參り　七『平松、平松』金『何御用でござる』七『殿樣が大急きでお召しに成る』金『左樣で』七『左樣でぢやアない此間の新井の渡し場の一件で』金『ハ、ア、新井がどうかいたしましたか』七『どうかしたぢやアない』金『何んでござる』七『何んでござる、なんて濟まして居ては困る、尊公が其渡場のブル〳〵一件さ』金『ア、彼のブル〳〵一件でござるか』七『困つたもんだ、後藤とか何んとか云ふ北條の家來に尊公非道くやられたと云ふぢやアないか』金『やられました』七『其の評判がパッと立つて今日上のお耳に這入つたのだ』金『上のお耳に這入りましたか、夫れは、や……』七『金次郎は不屈きな奴だ、手討にいたすと君がお怒りの模樣だ』金『ヘエー』金『ヘエぢやアない、迚も彼のお怒りの模樣

では唯では濟むまい、お手討だよ』七『アお手討ちになりますか、夫れはハヤ……』七『今の内に當地を退散いたしたら宜しからう、拙者が跡の所は引受けて何んとでも取計らうが……朋輩だから斯う申すのだ、お手討ちになつても詰らぬ』金『だが唯今當地を退散いたしました所が何れは捕まります、夫れよりは太く短かくお手討になりました方が宜しい』七『お手討ちになつて宜しければ御前に出るが好い、サア一緒に來さつしやい……、エ我君に申上げます、平松金次郎を召連れましてござる』家康公が家『オ、金次郎是れへ參れ』金『ヘエ』家『承はるに先達新井の渡しで大層憶病な名前を上げたさうぢやが其物語を是れにて一應いたせ、包み隱すと其分には差置かんぞ』金『恐れ入りますでございます、實は其の……』七『吾が君に申上げます、平松金次郎儀に就ては如何なることを申上げましてもお腹立ち遊ばしません樣に、御手討ちの儀は平に御用赦に預りたう存じます』家『ア、ー好い好い、コリヤ物語をいたせ』金『ヘイ十日ばかり前のことでございますが新井の渡し場より供を一人連れまして船に乘りました、スルト跡から小田原北條の浪人とか武士とか申す者が乘つて參りまして、私の刀の鐺に向ふから自分の鐺をドンと打付けまして、而して彼の申すには勘辨ならん、人の鐺に鐺を打付けると云ふは何にか意趣あつてのことであらう、サ果合をいたすから是れへ出ろと斯樣申します』家『ウム、不都合な奴ぢやな』金『誠に不都合な譯でございまして……』家『夫れから如何いたした』金『どうぞつい致したのだから勘辨して呉れろと過りました』家『何方が……』金『私が謝罪つたので』家『夫りや可怪いな、向ふで打付けたと云ふのではない

か』金『向ふで打付けたのを私が謝罪りましたので』家『フムー』金『デ何うしても果し合をすると申します、私しは怖くて成りませんから平に謝罪りました』家『先方で何んと申した』金『彼の申すには、其方のやうな奴があるから德川の家が人に笑はれるのぢや、主家を耻しめる不忠野郎と申しました、私はモウ何んと云はれまして命の助かつた方が宜しうございますから、肩を蹴られて痰をかけられて夫れで勘辨をして貰ひましたが、イヤモウ其の痰の臭さ、未だに忘れることが出來ませぬ』家『ア、ー、其の方は天晴れ天下無類の臆病ものぢやな』金『ヘイ』家『是れを褒美として取らせる、納め置け』と傍はらのお刀掛けにござりました、お短刀一口を下し置かれた、一同の家來は驚いた、天晴れの臆病者ぢやと仰しやるからお手討ちにでも成るのかと思へば却つて御褒美を頂戴致した、實にどうも不思議の殿樣だと家臣達は思つて居る、其れが今度の長久手の戰ひに一番槍をいたすのだから人間といふものは分らないものでございます。モウ一人の金次郎即ち鳥居金次郎でございます、是れまたお扈從の一人にて、是れは平松と反對で力量は五人力常に勇を振ふことを好み稍ども致しますると鐵砲を以て山から山を馳け巡り、山狩りなどをいたすのを第一の樂みといたして居ります、丁度廿二歳の時でございまして、弓矢を携へ山鳥を射落さうといたしまして鳥居金次郎仲間を一人連れて山奥へ這入つた所がどうも今日は山鳥に出逢ひませぬ　金『六藏どう云ふものでも山鳥が居ないのだらう』六『さうです、殊に由ると山鳥が何所かで集會でもして居るのでせう』金『馬鹿を云へ、山鳥が集會などゝいふことがあるものか』六『餘り日那

が鐵砲を撃つたり弓矢を持つて山を馳歩くものだから鳥の方でも逃足が早くなつて來たので、下手な鐵砲を打つせいです』金『さうかな、どうも斯う駈歩いて獲物がないと勞かれるな』六『疲勞れますなア』傍らの松の根方に腰を掛けて二人は休んで居りました。松の根方に腰打掛け瓢の中から酒を猪口に注では飲み〳〵主從がやつて居ります內にどういふものか金次郎頻りに眠氣を催して來た 金『六藏大層私は眠くなつて來た』六『眠くなつたと云つて旦那其所へ寢ちまつちやア不可ませぬ』金『不可んと云つてどうも是れは餘程眠い……ア……眠くなつて來て堪らん』と松の樹に倚り掛つたなりにグー〳〵と鼾を搔いて寢てしまつた、仲間の六藏は驚いた 六『不可ないよ、若旦那〳〵眠くなつたら屋敷に歸つて、お休みなさい、爰て寢ちやア不可ません』と云へども却々起きやうにもしない、好い心持ちに眠つて居る 六『是れは弱つたな、……エ仕方がねえ、乃公も寢やう、何んだか馬鹿に眠くなつた……』と仲間の六藏も仕方がないから落葉の上に横になつたが、是れは眠いには眠いのだが何うしても寢付かれない 六『若旦那は恐ろしい鼾だが何んと云つても御苦勞はねへから唯モウ斯うやつて鐵砲持つたり弓矢を持つて野山を歩いて居なされば好いんだ、どうも斯んな所へ奉公をしたのは災難だ、自分が好きで歩いて居れば斯んな面白いことはあるまいが、お役と來ると少しも面白くねへ』と獨りごとを云ひながら梢を眺めて居りますと、生溫い風がドツト吹て來たかと思ふとバサ〳〵と音がした、ハテ何んだか知らんと思ひながら顏を上げて見て驚いた、鳥居金次郎が松に倚り掛つて寢て居ると其の上の枝からダラリ下つ

て居たのは頭を見ると二升樽位ゐもあらうかと思ふ大蛇 紅の舌をペロ〳〵ッ、ペロ〳〵と出して居る、六藏はキャツト飛起きながら能く見ると松の幹に幾卷も〳〵卷いて尙且つ尾は大地に引摺つて居ります、餘程大きなもの、急ちの內にガタ〳〵震へ出した六藏、金次郎の傍へ行きたいが怖くて進むことが出來ませぬ、十間ばかり離れて 六『若旦那〳〵』と石を取つて投げた、漸くに垂れて居た首を持上げて 金『エ、人が好い心持に寢て居るのに喧ましい、第一拙者に石を投げ付けるとは何んだ』六『若旦那……バミ……バミ……』金『何にを云つて居るんだ、何んだ』六『バミ……ウワバ、ウワバミ……若旦那寢て居たらの……呑まれてしまいます』金『この野郎、成崩しに口を聞いて居る五月蠅奴だなア』と云つたが餘りに騷ぐから金次郎ヒヨイと顏を上げて見ますと大きな巨蛇だ……小

な巨蛇と云ふのは世の中にございませんが、實に巨大なる口を明て居る、並大抵の者ならば其儘キャッと氣絶をいたす處でございますが、素より大勇の聞えありまする鳥居金次郎少しく跡に下つて一刀をキラリと引抜きました、巨蛇は怒つて頭を擡げ舌をペロ〳〵と出して呑まんと云ふ氣勢を示した時に金『ヤッ』と云ひながら金次郎切ることが出來ませんから丁度咽喉笛と思ふ所を突立てましたから彼の巨蛇に於ては悶え苦しみ尾を振つて八方に當り木を倒し石を飛ばしまするの有樣、六藏の奴は半丁も向ふへ逃げ出してしまつた　六『サア大變だ』と樣子を見て居る内に　蟒の上にのし掛つて八九度と云ふものは扶る突くといふ譯、のた打ち廻つて終々彼は死んでしまいましたが、實に彼の血を頭から浴びて金次郎は物凄い有樣、六藏も漸く夫れへ參り』六『どうも旦那豪いことやおやんなすつた』金『豫て人の噂にこの山に巨蛇が居るといふことを聞いて居つたが是れ程とは思はなんだ可成大きなものぢやな』六『可成りどころぢやアございませぬ、餘ッ程大きうございます』金『是れは持つて參らう、斯う云ふ所へ置て行つては仕方がない、持つて行つて油身の所を少し燒て貰はうか』六『冗談言つちゃア不可ませぬ、鰻とは違ひますせ、お手柄の一つに成ることでゲスからお持ちなさるのも好うございませう』と夫れから生木の枝を切つて來て蔦葛で縛り上げ、ヤッとのことで二人で山からズル〳〵引摺つて、屋敷まで漸う持つて來た家中の者に話すと、サア大變な評判、ワイ〳〵と云て家中の者が見物に來る、サア大層な評判だ　甲『どうだい、鳥居金次郎は豪い者だな』乙『實に豪い、昔し鎭西八郎爲朝が九州で大蛇を退じて顎から名

玉を得たといふことは名高い話しであるが、夫れにも勝るとも劣りはせぬのは鳥居金次郎だ』と大評判になつて是れまた家康公のお耳に這入りましたから金次郎をお召出しになり、其大蛇を見たいとの仰せ、夫れからお庭先きへ右の大蛇を持參いたしました、德川家康公是れを御覽になるとイヤどうも長さは二間餘もある、見たばかりで凄然とする　家『どうも金次郎、其方は天晴れなものだ、是れを取らせる』とあつてお手許から太刀一口是からといふものは誰云ふとなく鳥居金次郎のことを荏柄の平太と綽名をして其大勇を褒めざる者はない、家中の者が集合つて　甲『各々拙者は此事に就てどうも分らぬことがある、鳥井金次郎は我君から天晴れな大勇ぢやと云つて拜領物があつた』乙『さうだ』甲『是りやアマア當り前の話だが、先々月のこと平松金次郎にどうも其方は天晴れの臆病だと仰せがあつて太刀を賜はつた、平松も天晴れかは知らんか臆病の方の天晴れぢやア仕方がない、夫れを何方へも御褒美を下さるといふのは分らないぢやアないか』乙『拙者もさう思つて居るんだ、兎も角も吾が君の遊ばすことには不思議なことが多い』と家中一般の疑ひとなつて居りました。所が天正十年四月九日森武藏守戰死をいたし、池田勝三郎信輝入道齋に於ては最早死するは今日と覺悟をいたしましたから一手の同勢を從へ井伊萬千代の同勢に打つて掛ります、所が勝入齋を討たんと心得、萬千代に於ては馬を東西南北に乘廻し、長井傳八郎を始め勇士の面々是れに從ひましたるとにいたして池田勝入齋に擊つて掛るの有樣、是れは前回に於て述べて置きましたが、今しも雙方砂煙りを立つて混戰に成つたる此手は前にも申上げたる通り德

川家康公の旗本の内から撰り抜かれたものでかの平松金次郎は白糸縅しの鎧同じ毛三枚鍬四方白の兜を戴き二間柄穂長の槍を小脇に搔込み七寶透しの小手臑當てをなし、武者草鞋を踏占め、其所に乘出だしたるの有樣、一同の者に於ては『ソレ、臆病者の平松金次郎が乘出だした』と樣子を見て居る内に金次郎に於ては敵兵の近附く儘に大音を揚げたることにして　金『ヤア某は德川三河守家康の扈從平松金次郎一番槍一番槍と……』呼はりながら突いて掛ゝる、此時に至り池田勝入齋の家來秋田嘉兵衞政照なる者、萠黃縅しの鎧を着し同じ毛糸の三枚鍬、頭形の兜を戴き小手臑當てを嚴重になし、大薙刀を小脇に搔込み其所に現れ出で　嘉『德川の侍平松金次郎と申する者なるか某しは池田勝入齋の家來に去る者ありと聞えたる、秋田嘉兵衞政照といふものなり、イデヤ勝負を決せん』とあつて大薙刀を水車の如く打振つて打つて掛る『心得たり』と平松金次郎暫くの間一上一下と戰つて居りましたが、さうかうする内に如何なる隙やあつたりけん、平松金次郎が突出す槍先に秋田嘉兵衞が鎧の引合せの所を强かに突きました、突かれては何かは以て堪るべき『アッ』と云つて其儘倒れる所を飛び込み來つたることにして兜の鍬を刎上げ忽ちにして首を上げ小高き所に飛び乘つて天地に轟く大音を揚げ　金『今日の戰ひに一番槍一番首をなしたるものは德川家康の家來平松金次郎なり、後日に功を爭ふ勿れ一番槍一番首ッ……』と名乘つた、此時に至り德川の武士は皆アッとばかりに驚いた、偖ては臆病者と思ひしに今日の働き天晴れなりと一同の感じ入りましたる中に、鳥井金次郎この樣子を見て『オ、彼に一番槍、一番首を付けられた

か、殊念なり』と面も振らず池田勢に切入つたり、是に氣を得て今村淺之助、笠原紋之助、松平七五郎皆必死となつて驀地に敵陣にこそ切込んだ有樣は勇ましなんど云ふばかりなし。

（第四席）　小牧山の激戰敵味方亂軍の事、並に池田勝入齋討死の事

此の注進をおきゝになつた德川家康公　家『家中の者は平生平松金次郎を臆病未練の者と笑つて居つたが彼は決して臆病ではない先頃新井の渡船場に於て北條の家來後藤五郎作なる者に出逢つて盡く〳〵惡口をされ足下に掛けられても謝罪りしは是れ沈勇と云ふものなり、徒に命を棄てるは是れ誠の武士のなすべき所にあらず能く其邊を考へなければ行かぬ、武士の命を棄てる所は戰場と覺悟をなしたる平松金次郎であるから今日斯る働きをいたした、決して臆病者にあらず、平生の行ひを以て戰場のことを考へること勿れ』と仰せられました、一同の者に於ては上の思召しの大なること、また平松金次郎が沈勇なることを爰に初めて知りました、一同『恐れ入りましたることでございます』家『鳥居金次郎は大蛇を退治たる程の者であるが、平松金次郎に敗れを取つたるにあらずや、是れ予が双方に過日褒美を取らした所以であるぞ』一同『ハ、ア』實以て德川家康といふ方は容易ならざる御方、達人は達觀すといふは此邊を申すのでございませうか、然る所池田勝入齋とは自分の軍略で三州へ斬込を仕懸けましたので夫れが相手の德川に裏を欠かれ敗軍して見れば責任上生きて居る譯には參りません殊に婿森武藏守を討たれ、最早今日を最期と覺悟いたしたるこ

となれば最も身輕の扮装をなし、是れに從ふ面々に於ても一人として生きて歸ると云ふ心もなく主人と共に戰死をなすの覺悟なれば、さしもの德川勢に於ても勝入齋が同勢必死となつて働きまする故、少しく足並亂れて相見えました、此時は家康公既に小牧山を潛に立つて小幡といふ所まで出張致し居られましたことで下知を傳へたること故德川方の勢は一段と盛に相成ました、されば井伊萬千代、長井傳八郎、安藤彦兵衞等の面々は縱横無盡に荒れ廻りまするから勝入齋の同勢苦戰と相見えました時、左り手の森の中より堀久太郎秀政の同勢、池田勝入齋を助けんがために是れに乘込み來たるが、どうしても運が傾いては致し方がないもので、勝入齋の軍勢盡く足並が亂れ立ちました、其勢ひを見て井伊萬千代に於ては陣頭に駒を乘出し天地に轟く大音を揚げ萬『アレ〳〵〳〵向ふに見ゆる法師武者こそ池田勝三郎入道に相違なし、吾れ討取つて功名にせん』と人數を率て討つて掛る、池田勢も大將を討たせじと必死になつて是れを防ぐ所へ、斯る亂軍の中へ素裸體に小手脛當をなし陣太刀を背負ひたることにして槍を小脇に搔い込み乘込み來たる一人、是れ別人ならぬ德川家康の旗本にて今村桁之助といふ亂暴者、何んで戰場へ素裸體で出て來たかといふと、丁度是が天正十年四月九日の戰ひでございます、舊曆の四月九日だから唯今で申すと先づ菖蒲の咲く頃で、最も信州邊へ行けば夫れよりは幾分陽氣も若しかも知れませんが三州あたりでは四月九日は可成熱い、取分け天正十年といふ年は大層熱かつた年で、彼は陣中に於て鎧を脫いで汗を拭いて居た所へ俄かの開戰でございます、敵味方寄來つたものでございま

すからモウ鎧を着けて居る暇がない、御案内の通り武具は先づ小手脛當から附けるもので、鎧は一番後だ、此今村桁之助といふ男は旗本の内でも少し變り者で平生は人が狂人かと思つて居る位ゐ、小手脛當を着けた所へ進めの號令が掛つたから其儘飛出した、運の惡い者は鎧を着けて居ても丸に中つて死ぬ死なゝいものなら裸體で出ても死ぬものでない、と度胸を極めて鎖鉢卷小手脛當、越中褌の儘で太刀を背負ふて槍を捻つて飛出し池田勢の中に突いて掛る、亂軍の中ではあるが目に注く、池田勢は驚いた、『何んといふ野郎だらう』と呆れて渡り合ふ者がない、遙かに家康公これを御覽遊ばして　家『何者だ、彼れへ裸體で出た奴は……』甲『恐れながら今村桁之助でございます』家『桁之助か、さて〳〵亂暴な奴、太刀傷でも受けたら何とする、然し勇ましい奴であるわい彼の如き亂暴者の居るのは味方の士氣を鼓舞して大いに宜しい』とお喜び遊ばして在しやつた。其時今村大音を揚げ　桁『德川旗本の一人今村桁之助此所に參つたり、某しに着られるやうな鎧兜を着けてをる者は夫れに出ろ、打殺して分捕りをするから……』非道い奴があるもので戰場を泥棒の場所と心得て居る、所へ池田の同勢の中より一人立出でたるを見てあれば、黃糸と白糸を以て段ダラに縅したる鎧に同じ毛の兜を頂いたることにて小手脛當も充分になし、槍を小脇に搔込み武者草鞋を踏占め　○『ヤア〳〵裸體　桁『裸體とは何んだ』○『池田勝入齋の家來竹村小平太見參せん』と呼はつて突て掛る、此時に桁之助カラ〳〵と冷笑つて　桁『ナニ池田の家來に竹村なんぞとは聞いたること更になし、いづれ雜兵葉武者に相違あるまい、イザ來い來たれ』と暫くの間とい

ふものは一上一下虚々實々……オイ桃李待て貴様の講談は何時も一上一下虚々實々だが外にモウ少し何んとか饒舌りやうはないかと看客はお咎め遊ばしませう、併しこれでないと昔の戰ひのやうに聞えませぬ、唯今の戰爭はボーンバタリ……ボーンバタリ……と片附いてしまう、昔のは何時も唯今で申す白兵戰、劍々相摩するといふ所まで行かなければ勝負は決しません、どうぞ一上一下虚々實實で御勘辨を蒙ります、偖て雙方必死と相戰ひましたが、二十四五合にして更に勝負なく相撲取つての勝負は面白からずイデヤ組まんとあて桁之助得物を投棄てエイヤと組んだ、向ふが金屬の着物

を着て居て此方が裸體だ、妙な組打があるもので暫くの間は上になり下になり上になり下になり爭つて居ります、其樣子を敵も味方も見て居りますが、誰も呆れて手出しする者がない、尤も是は戰さの習ひで組打ちをして居るのを後ろから行つて味方を助けるといふのは餘程卑怯な奴でなければ出來ないものであります、暫くの間其處に引組んで居りましたが桁之助の力勝りけん忽ちの間に竹村小平太を其所へ捻伏せ、南無三と思つて捻返さうとしたがどうして動ければこそ其内に桁之助、自分は太刀は背負つて來たけれども匕首を持つて來ない、仕方がないから咽喉輪をウムーと押して氣を遠くさせ、先方の匕首を以てグサリと突込んだ「アッ」と悲鳴を揚げる所

を忽ち首を左手に持ち胴の方を右脇に掻込んで向ふの森の中へ這入つた、妙なことをすると思ふと、忽ち夫れへ現はれたが今度は黄糸と白糸を以て段ダラに縅したる鎧に同じ毛の兜を高紐に結ひなし　桁『ヤア〳〵池田勝入齋の臣竹村小平太を討取つたるは徳川の旗本今村桁之助なり、鎧兜は分捕つたが、此上駿馬に跨つたる者は夫れへ出ろ』此の野郎戦場に稼ぎに來やアがつた、此時敵味方に於ても此の様子を見て居りましたが誠にどうも桁之助の働きは美事なものでございます、後ちに至り裸桁之助と名前を取つて家康公大層これを愛し玉ふたといふことでございます、さても池田の總大將池田勝三郎入道勝入齋其日の扮装を見てあれば萠黄匂ひの鎧を着し、兜は被らずして鉢金の入つたる行者頭巾を戴きたることにて、白絹に鐙蝶を畫ける指物を翳し、白き駒に金覆輪の鞍置いて悠然と打跨がり、大身の槍を小脇を掻込み手廻りの同勢前後を圍み、最前より東西南北に馳巡り、是れに從ひし勇士の面々も今日を限りと働いて居りましたが、今は大分討たれて殘り少なと相成りました、井伊萬千代は最前より勝入齋の跡を慕ひ如何にして是れを討たんと同じく馬を乗廻して居る、時に勝入齋の旗本田村金次郎包行と名乗つて井伊萬千代に打つて掛る、心得たりと萬千代暫くの間討合つて居つたがトウ〳〵萬千代の槍先きに田村といふ者は胸金物を突破られ、槍先き胸中に深く入つて二言と言はず相果てました、胸金物を突通すと云ふのは妙なお話しでございますが、鎧の鍛へと云ふものは總じて薄いのが好いので、トント職人衆の鋸のやうなものでヘナ〳〵して居る位ゐ、金次郎などの着て居る鎧は未だ夫れ程鍛の好くないものと

相見えて美事に槍先で胸金物を突破つたのでございます、其がため金次郎は落命を致しました、然る所へ乗込み來つた一人は萠黄匂ひの鎧を着し同じ毛糸三枚鍛椎の實形の兜を頂いて陣太刀を背負ひ武者草鞋を踏占め〳〵目方十二貫の鐵の棒を打振り〳〵大音揚げて『某しは池田勝入齋の身内に於てさる者ありと聞えたる阪卷平十郎と申す者なりイデや吾が鐵棒の味を受けて見よや』と萬千代目掛けて打つて掛る、萬千代に於ては向ふが鐵棒であるから槍で受けては堪りませんに由つて馬を其所へ乗巡らし先の勞れるまでは好い工合に逃げ廻る、が阪卷といふ男は池田勝入齋の家來でも頗る勇士でありますから容易い疲れが來ない、萬千代少しく危く相見えたる所へ横合より疾風の如く乗込み來つた一人、大音を揚げ『少しも早く御引上げ下さい、此敵は某が引受けたり』と呼はるに萬千代何者なるかと振り返れば安藤彦兵衛直次でございます、後ちに至り此人は安藤帶刀先生と云つて紀州家に對して附け家老になつた方にて、この安藤彦兵衛是れに罷り越したること故大いに喜んだ井伊萬千代其儘にして引揚げる、阪卷平十郎大いに怒り平『目差す敵の井伊萬千代を逃がしたからは汝の一命を取つて呉れん』と鐵棒を苧殼の如く打振り來たる、彦兵衛『心得たり』と鐵棒を正面から受けては堪りませんから彼方此方と馳廻り居りまする、其内にどう云ふ隙があつたか『エイ』と一聲諸共に彦兵衛の突出だす槍先きは阪卷平十郎の太股をしたゝかに突たから堪りませぬ、アッと云つて其所へ倒るゝ所を隙かさず飛込み來つた彦兵衛のために阪卷平十郎といふ者は首を揚げられました、斯の如く小牧の合戦は或ひは追ひつまた追はれつ、

一勝一敗容易に勝敗の決は相分りませぬ、内にはや九日の日も傾き暮れんとするの有様、偖てお話し變つて茲に濃州大垣まで御出陣に相成りました秀吉、十二萬の大軍を率ゐて來たのは三州侍を相手にして充分に戰ひをいたすの心底、素より信雄如きは秀吉の眼中にはないのだ、然る所が注進櫛の齒を曳が如く味方は苦戰に陥り森武藏守戰死を遂げ、池田勝入齋に於ても今日は死を決し戰ひをなすの樣子があるといふ、秀吉に於ても心を痛め『どうかいたして勝入齋を助けたいものである』と思ひ茲に一萬餘人の同勢を羽黑の八幡林のあたりまで駈足で進みましたがモウ間に合ひませぬ、勝入齋時に四十九歳、寄せ來る所の敵を切り立て〳〵陣刀を拔いて激しき戰ひでござりまする片桐平左衞門を始めとして何れも馬足を助けましたることにして勝入齋を討たせじと心を注けて居りまする、其内に勝入齋は迫々敵陣深く乘込み來たり、右に薙ぎ左に斬りバタ〳〵と近寄る敵を切り拂ひ小高き岳に來りて四方を白睨んだ儘陣刀より滴る血汐を手に受けてガツクリ呑み咽喉を潤し振返つて樣子を見れば味方の者は馬側に一人も居ない『ハテ皆な討死をいたしたか』と考へて居ります、所へ洗ひ革胴丸の鎧を着し、同じ毛糸の三枚錣翁形の兜を戴いたることにして二間穂長の槍を小脇に搔込み現はれ出でたるは是れ三州大濱の住人徳川家康の旗本長井傳八郎直次なり、樣子を見ると今ま池田勝入齋が息を吐いて居る、シテやつたりと心の内に大に喜び、今日の戰ひに此人を討取りなば是れ第一の功名なり、又吾れ彼のために討たるゝとも名譽なり、イデ〳〵と近附いたることにして 傳『ヤア〳〵夫れに控へられたるは池田勝入齋殿と見

たは僻目にて候か某しは徳川家康の家來三州大濱の住人長井傳八郎直次にて候、今朝より御跡を慕ひ罷り在つたり見參見參』と呼はりつゝ槍を捻つて究いて掛つた、池田勝三郎入道勝入齋は此時に至りカラ〳〵と笑ひ『勝』取るに足らざる雜兵端武者、汝如き者を相手に致す某でない、早々に此場を退け』ハツタと傳八郎を睨んだ 傳『退けとは何事なるぞ戰場に上下の區別は御座らん、徳川家康の家來長井傳八郎の槍先受けられるものなら受け玉へ見參ッ』と云ひながら究掛け來る槍先きを受流してチヤチヤーンと打合ひまする、然りと雖も勝入齋先刻よりの戰ひに身體綿の如くに勞れ居りまする所とは云へ傳八郎如き者を相手にする氣はない、井伊萬千代を討つて婿の仇を報いたいと云ふ積り、傳八郎の方では一生懸命だ天晴此大將を仕止めて花咲く春に逢はんとの覺悟 傳『エイ』と再び傳八郎の突出だす槍先き勝入齋は巧みに受けつ流しつ暫くの間戰つて居りましたが今また一聲焦つて突出す槍を勝入齋ヤツと陣刀を以て切つて落した『南無三……』と傳八郎跡に退つて陣太刀引拔いて打合つたが偖て打物を取つて戰つて見ると勝入齋の方が上だ、次第次第に切立てられ傳八郎跡へ〳〵と退がりまする樣子、然るに此所へ飛込み來つた一人是れ別人ならぬ安藤彦兵衞直次であります、此樣子を見るより 彦『長井氏、助太刀は斯く申する安藤彦兵衞がいたす』と呼はつて横合よりエイヤッと云つて突て掛る、勝入齋は右に安藤彦兵衞左に長井傳八郎を引受け、一人で二人を相手にするのでございますから忙がしい事夥しい、内に如何なる隙きやあつたりけん彦兵衞が焦つて突出す槍先きは是れが池田勝入齋の内股の邊りをグザッと

突きましたから何かは以て堪りませう、アッと云ふと其儘に落馬いたしました勝『エイ殘念なり』と云つて勝入齋大いに怒つたが仕方がない、此時に彦兵衛跡に退つて　彦『如何に長井、朋友の義務に由つて危きを助けたり、サア此上は速かに尊公功名をさつしやい、某し證人に相成る』尤も功名帳に名前を付けまするとは云ふことは其頃でも容易でなかつた、大將目前の働きは別として人の見て居ぬ所の働きは丸で證人がなければ不可なかつたもので、唯今の名前で申すと論功詮衡でゲス、これが唯今でも却々難かしいので戰地から差廻つて來た書類に由つて金鵄勳章にも成ることで一番首一番槍、または大將分の首を刎ねたといふことは分けても功は重かつたもの、餘事を申上げて恐れ入りますが彼の源平の時代宇治川の戰ひの時に梶原源太佐々木四郎の乘切りの節梶原の方が先に出た後から乘付けて行つた佐々木高綱が　高『如何に梶原、駒の腹帶が弛みて候が鞍返しゝて怪我あるな』といはれた、梶原も成程鞍返し致しては劔呑だ、第一敵に笑はれるから其儘にして馬を駐めて腹帶を占上げる、其間に四郎高綱は先きに乘出して『宇治川の先陣は佐々木四郎高綱なり』と名乘つたとマア尋常に申上げればさうだが、なか〳〵どうして梶原なんといふ人は左樣なことはしない、佐々木四郎に駒の腹帶が弛んだと云はれて夫れを本當にして馬を止めて愚圖々々して居るやうなことはない、全く四郎高綱が遲れたのであるが梶原の方が川へ馬を一歩でも先きに入れて見れば梶原が一番乘りに相違ない、けれども此人名乘を餘り立派に揚げやうといたしたので失策なつたのであります、梶原が先に乘込んで置て山城の國宇治川の先陣……』

と云ふと跡から馬を乘入れた高綱が『佐々木四郎高綱』と呼んだから何うやら四郎の方が先陣になつてしまつた、梶原は何にも山城國なんぞは要らない、唯宇治川の先陣と名乘れば好いのを餘り立派にやらうと思つたから佐々木に功名を取られたやうなもの、夫ですから論功帳は證人がなければ名前を記して貰ふ事が出來ないから安藤が斯う云つたので、長井傳八郎は大いに喜んで陣太刀を持つて勝入齋の傍らに立寄り一聲籠めて打ち下ろしたる陣太刀に何かは以て堪るべき、肩先き深く切下ろされた。

（第五席）　徳川家康勝入齋の首實驗の事、並に徳川勢引揚げの事

勝入齋は『アッ』と一聲其處へ倒れるを起しも立てず乘掛つたることにして忽ちの間に池田勝三郎勝入齋の首を上げた傳八郎、其儘に首を彦兵衛の前に差出だし　傳『尊公の助太刀に由つて手前危き所を助けられたるは傳八郎實以て辱けなく存ずる、某が勝入齋の首は打落したりとは云ひ、條實は拙者の功名にあらず、尊公が助太刀下さらずば拙者斯る姿に相成つたかも知れぬ、安藤、是れは尊公の功名に相違ない、勝入齋の首を本陣に持參いたして功名帳に御身の姓名を記して下さるやうに』是れを聞いて　彦『イヤ〳〵是れは怪からん、此場に至つて何んで尊公の功名でない』傳『全く某しの功でない、某既に危い所を斯の通り一ト槍付けて戴いたのだから功名は尊公に相違ない』彦『どうしても拙者の功名ではない、御身の……』傳『さうでない、尊公の功名だ、誠

にどうも天晴れなものである』と長井は安藤に功を譲り安藤は長井に功を立てさせやうと云ふので互ひに爭つたが仕方がない、爰で勝入齋の具足其外紘袋には系圖の寫しがございます、夫から太刀等に至る迄殘らず本陣に持參をした、其の時に濱松の太守德川三河守家康が　盡　くお喜びになつて實驗になつた、家康公勝入齋の首を見てハラと〳〵落涙に及び　家『アヽー氣の毒なことをいたした此人義に由つて死するのである』との仰せ、是れより北畠信雄にも實驗に備へました、が跡で手厚く葬りました、去ればにや家康後に天下を一統なされ、其子孫をお召出になつて池田の家名は立派に立てゝお遣はしになつて德川諸侯の内でも池田と云つてはバリ〳〵して居つたのでございます、さて愈々長久手に於て池田勝入齋戰死といふことが敵味方に知れ渡りましたに由つて上方勢は敗軍、德川大勝利といふ譯、是れを聞くと秀吉公は怒り心頭に發し　秀『味方の同勢散々に崩され、剩さへ池田勝入齋戰死を遂げたるは是れ容易ならざることである、此上からは人手を待つべき場合にあらず、自ら乘出だして充分なる戰ひをなし德川勢に一ト泡吹かして呉れんず』と諸軍に出陣の布令を廻はされた、すると爰に戰場で働いて居つた勝入齋の倅紀伊守、ワーツワッと云ふ敵の聲、何であらうと思つて居る内に勝入齋の戰死といふことが知れて來た、大いに驚いて　紀『オヽ、偖ては父上は最早討死を遂げ玉ひしか、吾れ冥土の魁をいたさんと心得しに父に先立れ何面目あつて存命へ居らるべき、其儀ならば長井傳八郎とやらんを討つて其後ち討死をなさんと忽ちの内に覺悟を極め鎧の大袖を切落して進まんとなしたるを松田佐太郎馬の轡を押へて恐れながら暫く御待ち下し置かるゝやう死は一旦にして易く生は萬代に得難しと申す、君輕々しく御討死あるべからず恐れながら一度御引揚を願ひ奉る』紀伊守佐太郎をハッタと睨み　紀『此の場に至り臆病風に誘はれしか、左樣に命が惜くば其方共は討死をなすに及ばぬ、其處放せッ……』と云ふと鞭を擧げて佐太郎の手を輕く叩き、少しく手の弛んだ所を見てパーッと馬を走らせました、松田佐太郎元野源八郎の二人是非なく御跡に慕つて御馬廻りを助けたり、此時紀伊守トウ〳〵と馬を走らせまして　紀『ヤア〳〵池田紀伊守これに在り、長井傳八郎は何れに居るか見參せん、吾が父の敵長井傳八郎とやらんは何れに在るや』と少しも恐れず德川の陣中に乘込み三尺六寸に延びたる陣刀を引拔いたることにして右に當り左りに拂ひ激しき其戰ひ振りに敵兵を散々に馳破りまする、去れば忽ちの内に紀伊守の鎧は破れ血に塗れ太刀は齒こぼれがして恰も　鋸の如く、折しも『オーイ〳〵其處に見えられしは池田勝入齋の御子息紀伊守殿と見たは僻目か、德川の旗本安藤彦兵衛直次見參せん』と呼はりながら槍をオッ捻つて立向つたり、池田紀伊守莞爾笑つて　紀『小賢しき奴もあるものかな、三州侍

に安藤彦兵衞と云へる者あることを知れり、討死は覺悟をなしたる某イザ〳〵尋常に勝負をいたさん』と陣刀を振りて其處に向ふ、安藤彦兵衞は槍を取つては天下に名譽の人でございますから是れに渡り合ひ、暫くの間といふものは一人が槍、一人が刀斬込んで來る所を受流し突いてくるのを引拂ひ爰に十數合打合つて居りましたが、其内にどう云ふ隙を見出だしましたか安藝彦兵衞が『エイ』と一聲諸共に繰出だしたる槍先は電光石火稲妻の如く紀伊守の鎧の引合せをグザと刺せばさしもの紀伊守馬上より翻筋斗切つて落ちました、彦兵衞携へたる槍を投棄て進寄つて忽ちの間に首を掻いたることにて例の如く堂々と名乘りを上げた、松田佐太夫は他の敵と渡り合つて居たが彦兵衞の名乘りを聞いて大に驚き『偖ては御主人討死をなされたるか』と陣刀を以て佐『主人の敵覺悟せよ』と斬込み來る所を槍の石突きにて突かれたからヨロ〳〵と佐太夫が後に倒れる元野源八郎は遙かに向ふから槍を提げたることにいたして韋駄天の如く駈け來たり、彦兵衞目掛けて『己れッ』と突いて掛る『心得たり』と彦兵衞暫時の間互に負けず劣らず打合つて居つたが名にし負ふ所の安藤彦兵衞のことなれば段々源八郎が受太刀となつて參りましたが、面倒と思つたか安藤は槍を擔いでドン〳〵逃出した 源『己れ、敵に後ろを見する法があるか』と追駈ける、首を刎ねるのも氣の毒と思つたから逃出したので實は餘程段が違う、トウ〳〵其姿を見失つて源八郎も殘念ながら引揚げて參りました。爰に德川家康は本陣に控へられて首實驗をいたし面々首帳に記します、勿論この首實驗といふものは大層難かしいものでございまして、大將の首は實驗臺

といふのへ載せて實驗をする、夫れ〴〵禮義があるもので夫れからでなければ首帳には附けないこの又首帳を附ける役が難しい、此時に大須賀五郎左衞門、水野總兵衞、榊原小平太の面々は、今日の戰ひ味方充分の大勝利に相成りました事故、此機を外さず秀吉の本陣に對し攻め掛らんと云ふので既に戰さ立ての用意をして人數を繰出ださうとしたのを家康公御覽に相成り 家『コレ〳〵其方等は如何なれば予の許しなきに出軍をいたすか』太須賀五左衞門進み出で 五『今日の戰ひ恐れながら君の御采配其圖に當り玉ひ味方盡くの勝利でございます、この機を外さず秀吉の本陣に乘込み、恐れながら吾々共猿面郎秀吉の首取つて尊覽に備へたく……』是れをお聽き遊ばして 家『ハハア左樣であるか』と仰しやつた人數を出しても好いとも惡いとも仰せがない、が其等に頓着なく水野、榊原、大須賀の同勢既に陣立をして押出さうとした、家康公は近藤丈左衞門を召して何にか仰せ付けに成つた 丈『心得て候』なりと丈左衞門忽ちの間に早馬に一ト鞭呉れまして、トウトウと陣中に乘込んで來て 丈『三大將に對して申入れる、君の御諚に候なり、漫りに軍勢を出すこと勿れ、筑前守秀吉と云ふものは非凡の大將故此の先き如何なる謀略を構へあるやも知るべからず、勝つて兜の緒をしむると云ふことを知らざるか、唯今より兵を纏め龍泉寺山の麓まで人數を引揚げるやういたせとの上意、左樣御承知に預りたい』と聞く三人は驚いた、戰さに勝つて逃げる奴があるものぢやアない、中にも大須賀五郎左衞門、榊原小平太などはモウ何うも不滿足でございます『勝つて逃げるなんて何んぼ御主君のお言葉でも分らねえ、篦棒なことがあるものだ』と

云つたが軍令を破る譯には相成りませぬ、一同の者に於ても進軍いたすこともならず、其儘にして人數を夫へ据置きましたものと相見えます、今度の戰は申す迄もなく德川家康が羽柴秀吉を相手に戰はうと云ふのではない、北畠公を助ける義の戰さであるから無理に此方から戰ひを挑むといふは宜しくないといふ家康公の御考でございます、此度小牧山合戰の押への軍勢としては酒井左衞門尉、松平主殿頭、石川伯耆守、內藤彌次右衞門、本多平八郎の人々は人數を押並べて敵兵何時押寄せ來たるやも知れんと、備へを嚴重に立つて相待つて居ります、處へ注進櫛の齒を曳くが如く長久手の戰爭は是れ〳〵森武藏守戰死を遂げ續いて池田勝入齋親子の戰死といふこと頻りに知らせて來る、其處で面々是れを聞いて居たが中に酒井忠次暫く首を曲げて考へて居たが　忠『各々臣として君を褒め奉るは此上もなき失禮なことではあるが、吾君の謀略、充分圖に當りしものと相見えるが實に我君の采配恐れ入る、池田父子勇を振ふと雖も敵せずして終に戰死をいたすといふのは實に此方に取つては此上もなき喜びではござらんか』忠勝夫れに進んで　忠『各々に申入れるが斯樣な時にこんな戰さのない所に人數を控へて居るより、拙者の考へではモウこの長久手の戰ひに利を失ひ、勝入齋討死をいたしたと云ふことを承はらば必ず秀吉この機に乘じて兵を出だすに相違ない』酒『ウム』忠『して見ると拙者は筑前守の人數を出ださんとする前に其道を塞ぎ農家を悉く燒き拂ひ、秀吉の本陣に對して燒打を掛けたることならば或は猿面郎秀吉の首を得るやうなことに相成るかも知れん、拙者一番左樣いたさうと存ずるが何うだ』酒井左衞門尉是れを聞

いて　酒『どうも本多、好い所へ心注いた、成程今日の戰さに池田が敗北をいたしたと云ふことを承はらば秀吉　盡く憤りて人數を動かすに相違ない、譬へ十二萬の同勢でも百萬の同勢なりと雖も一旦怖氣の付いて居る兵を動かすのであるから、其處へ乘込んで行つてこれを破ることは心安い、退口を妨ぐると云ふのは至極面白からう、忠次大賛成をする』松平主殿頭これを聞いて主『同意々々、戰さもない所に斯樣にボンヤリして居ることはない、拙者はモウ肉が躍つて血が沸くやうな思ひだ出懸けやう』物騷な人々ばかり、今や進軍の用意に及ばんとした時に『アイヤ暫く……進軍の儀は待たれよ』木多平八郎回顧つて見ると石川伯耆守だ　石『唯今暫くと云つたのは石川尊公かへ』石『如何にも拙者だ』忠『ハヽア、暫らくといつて止める所を見ると御身は不同意かな同意は出來ないと云ふのかい』石『去れば……』忠『どう云ふ譯だ』石『各々方は失禮ながら一を知つて二を知らない、漫りに前へばかり進んだ所が秀吉が討てべきものぢやアない』主『ハヽア夫りやまた何故……』石『なぜと言つて斯う云ふ場合、乘込んで行つて燒打ちを掛ければ猿面郎の首を取ることが出來ると云ふが照箱の雁首ぢやアあるまいし、夫れは世間並の人に仕掛ける手段だ、信長公の草履を搦んで居た木下藤吉郎、瞬く間に高大無邊の出世をした秀吉は凡人ぢやアない、斯る時に人數を出だし長久手の邊り退口を擊つて出で燒打ちを掛けると云ふが迚も失れは不可ない是相手を計らざる匹夫の勇といふ、匹夫の勇は吾等の卑む所だ』忠『默れ、吾等を指して匹夫の勇とは何んだ、サア、本多平八郎忠勝が申出したること、匹夫の勇とは何んだ』伯『立腹をするなら

申入れるが匹夫の勇に相違ない、總じて軍立てと云ふものは夫々軍師の命令に由つて兵を動かし力戰をするものだ、夫れを私しに戰さをいたして勝利がある時は宜しいが萬一敗軍をいたしたら何んとする、人々に笑ひを受け、軍令を破り君の計畫に齟齬を來たすではないか、至極好いと飽までも思はつしやるなら吾が君の御許を受けて見なさい、お許があるかないか、ないに極つて居る、兎も角も斯く申する伯耆守はどうあつても不賛成、必ず〳〵人數を出だすことは相成らん」平八郎是れを聞いて居たが　平「ア、ア石川、貴公は何んだな敵の勇氣を扶け昧方の勇氣を挫く感心な心掛けの男だ、夫れでなければなるまい、彌々貴公がさう云ふ了簡なら宜しい、筑前守を扶け燒打ちを掛けるといふことを妨げいたす所を見ると、貴公は秀吉に内通をして居るな」石川伯耆守面色を變へ　伯「默れ、是れは怪しからぬ平八郎の一言、斯く申する伯耆守が筑前守へ内通して居るとは何んだ、戯れか眞實か……」本「内通をして居る覺えがなければ此場に至り勝つべき所を勝たず敵を逃がしてしまうやうなことを申す譯がない、此間よりの致し方、どうも忠勝が見て居るのに怪しい節があるぞ」石「愈々怪からん、怪しいとは何んだ、サア、何處に其證據がある、怪しいと云ふ譯を云ふて聞かせろ」忠「是に居らるゝ酒井左衞門、松平主殿頭、内藤彌次右衞門等の人人某しに賛成をして是れから秀吉の退口を妨げ燒打を掛けやうと云ふのを貴公一人不服を唱へられるのは敵方に内通をして居るものと見るより外に見方がないではないか、勿論軍令には背く、軍令に背く程の事をしなければ非凡なる働きの出來るものではない、或は思ひも寄らぬ戰ひに利

を得ることがある、察するに是は秀吉を助けやうといふ其方の心底、どうも貴樣は面魂一ト通りではない、敵に内通をして居るに相違ない」是れは伯耆守も才物であるからこの當時は德川に屬して居たが其實羽柴筑前守と云ふものは天晴非凡の大將である、この人に從つてさへ居れば大丈夫であると云ふ見込があつたものと相見えます、其所で秀吉を助けたいと思ひ、この戰さで燒打ちを掛けられたなら秀吉或は討たれたかも知れませぬ、後に至り石川伯耆守秀吉に咐屬して大阪城内に於て差向いてお物語りのあつた時太閤秀吉　秀「其方に改めて予が禮を申す事がある、先年小牧山戰ひの折柄に予が退口に向つて酒井本多が燒打ちを掛ると云ふたのを其方遮り止めて呉れた、其がために予は命を全うしたが誠にどうも辱けない」と仰しやつて伯耆守へ内で拜領物があつたと云ふことがあります、してみると石川伯耆守と云ふ人物は全く秀吉を助け、二心あつた人と相見えます。だが其時には誰も伯耆守の心中は存じませぬ、が立腹いたして平八郎に於ては今一言云はゞ石川伯耆守を切つて棄て

やらうと云ふ今更引くに退かれませんから伯耆守も飽までも爭つて居ります、此時に酒井左衞門尉は本多忠勝の樣子を見て居つたが　酒『各々先づ暫く御待ちあれ、本多尊公は是れから燒打ちを掛けて羽柴秀吉を討たうと云ふ、また石川伯耆守は軍令を背いて右樣なことをして勝てば好いが敗走をいたす時には物笑ひを招ぐ上にお叱りを受けなければならぬ、第一軍令に背くと云ふ、コリヤ何れも理があると思ぶが木多斯うしてはどうだ』忠『どうするのだ』酒『吾々一同は此の所に止まる、伯耆守の云はるゝ通り軍令を破つては宜しくないから』忠『ウム』酒『忠勝、貴公は自分一手の同勢を率ゐて秀吉の退口を妨げ充分にやつたらどうだ』忠『ウム、ー結構、やるとも人手を待たず一手の同勢でやる、去れば唯今より平八郎一手の同勢を以て猿面郎秀吉の歸りを待つて、必ずとも打破つて見せる』酒『さうか吾々共三人は爰にあつて樣子を見て居る、萬一貴公の同勢がさうでもない彌々苦戰といふ時に相成れば斯申する忠次を初め、一同人數を繰出して助けるやうにいたさうどうだ』忠『どうも恐れ入つた、去らば此段は相賴んだ』酒『其所で猿面郎秀吉の首を取れば尊公一人の手柄、吾々共は軍令を守つて居つて若し尊公がお叱りを蒙むるやうなことがあれば吾々共一同が命に替て君にお詫をしてやる　忠『そいつは千萬忝けない』と石川伯耆守心中に驚いた、『是れは大變だ、燒打ちを掛けないでも亂暴者の本多平八郎が一手を以て秀吉の退口を妨げをする事に成るとどうも危ない、然し夫も止せとは申されませんから大きに其がために胸を痛めて居りました、平八郎に於ては面々と約束をいたし一旦自分の陣に引取り、今日の戰ひは充分事を遂げれば

天下に英名を轟すことが出來る、今日は一生の中に大切の日なりと是れから間者を出だして秀吉の動靜を探るお話し……。

（第六席）　本多平八郎忠勝秀吉の旗本へ切入る事、並に忠勝加藤清正と奮戰の事

この本多平八郎忠勝といふ人はモウ讀者諸君もお馴染のお方で、申迄もなく德川四天王の一人、勿論誰々の四天王とか何んとか云はるゝものに何れ愚かはござりませぬが分けても德川には好い四天王があつた、井伊、本多、酒井、榊原といつては何れも德川柱石の臣で榊原小平太と云ふ人は總身に百六ヶ所の傷があつたと申します、平八郎は何にも榊原に劣るやうな人ではないが鵜の毛で突いた程の傷がなかつたと云ふのは餘程運の好い人でございます、鐵砲の中を通り亂軍の中を駈廻つて働をいたしても少しも身體へ傷を受けないといふのは誠にどうも平八郎忠勝・剛い人で大阪御陣の折柄は御自分は大病であつて、悴の出雲守忠友が大阪へ乘込んで前代未聞の働きをいたした忠勝は『どうか疊の上で死にたくない、御奉公の仕納めに敵一人なりとも討取て死したし』と熱に浮かされて囈言を言つて死にました、是れを思ひますと德川家に取りましては誠忠無類のお人でございます、今ま石川伯耆守と爭ひ伯耆守は飽までも夜討ちを致すと云ふのを妨げましたが、酒井左衞門尉の扱ひに由つて、忠勝が一手の同勢にて退口を妨げると云ふことにな

り、忠勝己れの陣を立出でますることになつた、尤も本多の家來には天晴れなるものが澤山居りまし、面々を夫れへ招いて偖て云々斯樣の譯だ、只今より筑前守の退口へ討つて出でるの心底けれ共敵の多少萬端のことを見定めてから掛らなければ戒りませんから 酒『コリヤ金平、其方斥候を致して參るやういたせ』金『畏まり奉りますする』といつて立出でましたのは是れなん本多の家來梶金平といふ有名な人、紺糸の腹卷きを着けまして小手臑當の用意を遂げ立派やかに扮裝で居りましたが、間者に行くのにさう云ふ扮裝をして參る譯に參りませんから、俄かに物の具を拂ひ百姓の姿となり股引袢天、誠にむくつけき姿で長刀を差して參ると却つて露顯をいたしますから懷中に匕首の用意をして梶金平ドン〳〵長久手の方に參り敵の模樣を見やうと草鞋穿きで來る、すると向ふから來たのが身の丈け六尺もあらうと云ふ是れも百姓の姿、金平樣子を見て居たが金『オヤ向ふから來やアがつたのはどうも百姓ではない、姿こそ百姓のやうではあるけれども事に由つたら向ふの斥候の奴かしら、某し同樣の奴に違ひない』とピタリと金平足を止めた、向ふから來た男も頻りに金平の樣子を見て居たが『アレ、あすこへどうも嫌な奴が來た百姓の拵へではあるが眼中の樣子と云ひ、一ト癖あり氣な奴だ、殊に由ると百姓ではないぞ、間者かな、向ふでも心注いて足を止めて見て居るから梶金平の方から言葉を掛けた 金『イヤどうも御同樣に僅かな賃錢で人夫に雇はれ斯うやつて戰さの場所へ來ても私共はどうも臆病で鐵砲の音を聞くとブル〳〵震へてしまつて足がすくみます、漸うマア鐵砲の音の聞えない所まで來やした、お前さんも矢張り人

夫かね』○『如何にも乃公は人夫だ』金『不可ねへ〳〵お前さん人夫ぢやアねへよ』○『何んで人夫でない』金『何んだつて人夫にしちやアロの利きやうが違つて居る、私ア富田村の百姓金兵衞といふ者だがお前さんの樣子を斯う考へるとお武士だな、矢張軍人だ、戰さの樣子、三州勢は何う云ふ所へ備へを立つて居るか、兵はどの位あるかと云ふのを見やうがために來なすたのだらう、お前さんは敵方の間者、羽柴方の人だらう』○『是れは怪しからん、私ア然んなものぢやアない、ココの通り百姓だ』金『扮裝は百姓でも言葉遣ひが違ふ、百姓は百姓の言葉を使ふもの、武士は武士の言葉を使ふものだお前さんのは確かに武士の言葉だ、イヤ、だが私などは何方が何方でも構やアしない、五文でも賃金の多い方に轉ぶ賤しい身の上の金兵衞、然んな事は御遠慮なくお話なせえ』

○『ウム、貴樣は何にかえ、全くの人夫かへ』金『ハア、全くの人夫でがす、何んで嘘を云ふものぢやアねへ、彼の男は『アーさうか』と云つてヅカ〳〵と傍らに來て梶金平の頭を見た、其の頃ほひでございますから、手拭を被つて居りましたが、手拭を取つて改めて見ると郎黨額、其時分には三河奴と申しまして德川方の武士は野郎額でありました、大抵總髮で居たもので戰場で討死をしても三河武士は早く知れるやうにといふ所から額を剃落して居りました、去れば俗に三河奴是れを見ると彼の男 甲『何んだ貴樣は……何にか間者に相違なからう』といふ內に彼の大きな男は油斷を計つて置いて突然長い刀を引拔いた、是れは、竹の中に仕込んで置いた物と見える、エイと一聲橫に拂つたから梶金平の首が落ちたかと思ふと金平跡に退つて體を變はし、傍の松の枝

を取つて立向つた　甲『此奴なか〳〵手剛い奴だ……』金『サア斯う成る上からは云つて聞かせる、某しこそは本多平八郎忠勝の家來梶金平といふ者にて、如何にも間者に相違ない、貴樣も名乘れ』

甲『オ、見込に違はず間者なりしか、某しは羽柴筑前守の家來山村十郎と申する者なり』金『して見れば、汝も吾が見込みし如く間者であつたか、最早名乘り合をいたしたからは用捨は成らぬ覺悟をいたせ』と梶金平は松の枝を以て打込んで來る、彼はヒラリと體を變はして刀を振ふて切込み來たが、暫くの間松と刀と打合つて居つたが、是りやア松の方が割が惡い、動もすると危い其内に金平彼の隙を窺つた　金『エイッ』と手の内よりバット飛ばしたる手裏劍、狙ひは誤たず彼の眼の玉を貫きましたる樣子、アッと倒れる所を飛込んで向ふの刀を奪つて、十内の首を切つて落した、莞爾笑つて血押拭ひビタリと鞘に納めて自分の杖に致し、敵陣の樣子を充分に窺つて立歸りました、元の所に來て見ると山村十郎まだ倒れた儘だ、こいつ捨ておくもあつたらものとそれを取つて自分の陣へ歸りましだ、忠勝陣中に相待つて居る所へ、漸うのことで金平立歸つて參ると、右の手に首を下げて居る忠『其首は如何いたしたのぢやア』金『ハッ、幸ひにして敵の樣子を窺ひましたが敵兵は既に三萬餘人唯今長久手の方に向つて進軍の眞つ最中でございます』忠『ウムーして見ると筑前守秀吉大軍を率て居りながら三萬餘の同勢を長久手に差向けるか　金『左樣にございます、只今立戻らんといたしますと云々斯樣々々の譯にて山村十郎と申する者討つて掛りました、由つて彼が刀を取り持參仕りました、忠勝之れを聞いて大いに喜び　忠『軍神の血祭りと申

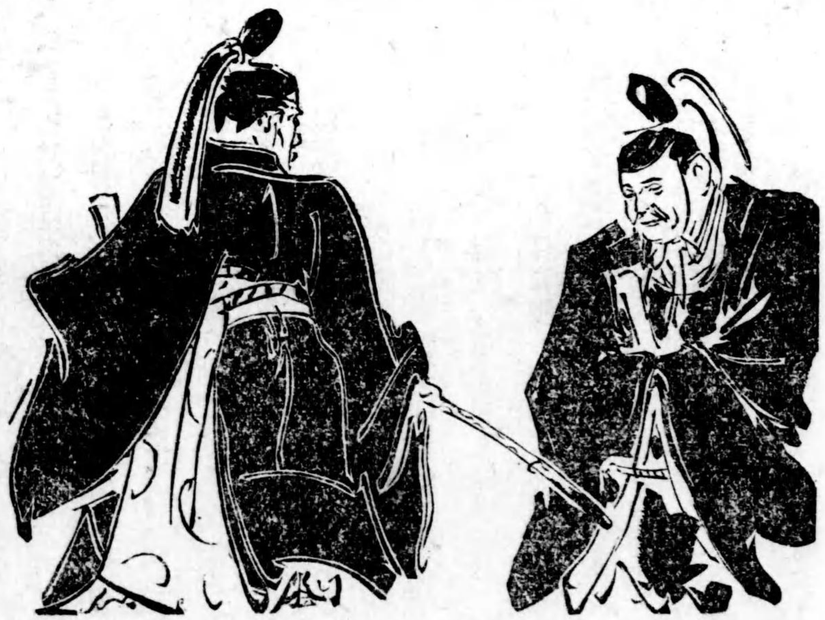
すは此事であらう、其方立歸らんとなしたる折柄敵の間者を討取つたるは誠に感ずべきの至りである、何れ恩賞の沙汰に及ぶであらう』金『ハ、ア有難き仕合はせ……』大きに金平は面目を施しました、平八郎に於ては右の如く三萬人の大軍を進發いたすといふことが知れましたる事故、捨置く場合でございませぬ、僅かに七百人の同勢を率ゐ最も忍びやかに行かなければ成らぬから街道へ出まする迄は旗馬章を伏せたることにして、彼の白地に紺を以て現はしたる左放れ三ッ葵の紋の付いたる旗、金の九尺大百足の馬章等を皆横になし、口は濡紙を張り忍びやかに七百人の同勢此所を立ち出でまして既に山續きを參り、唯今にも秀吉人數を出だした其時には充分の働きをなし、猿面郎秀吉の首を打取つて呉れんの心底にて、左右の森影に兵を忍ばせ平八郎頻りに樣子を見て居る、其内に筑前守秀吉は備へを立て誠に嚴重にいたして先陣が鐵砲組次が槍組、また次が鑑砲組、また槍組と一段交せにいたし其間に騎馬武者の備へを立つたることにいたして、實にどうも陣立に於ては感服いたしました、是が故右大臣前長公の御手許に長年あつて、年來戰さ立ての樣子を見て殊に信玄公の軍さ立てを餘所ながら學んで居りました所の筑前守秀吉なれば、敵なからも感心をいたし、今ま中軍の備へ三好孫七郎の同勢が通り越しましたる所を見て、忽ちの中に森の内より鬨の聲を作りドーンと一發の合圖と共に左右より鐵砲をつるべ打ちに放發いたしました、此時は羽柴筑前守秀吉の旗本は『夫れッ』と云つて忽ちの間に是れに應戰をいたし是れより、激戰と云ふことに相成りました、内にハヤ平八郎忠勝に於ては、陣頭に乘出したる其日の扮

裝を見てあれは、紺糸の鎧を着し、同じ毛糸鹿の角の前立て銀の獅嚙の脇立て打つたる兜を頂きたることにして、田原彈正左衞門正直の鍛へたる、俗に是れを蜻蛉切りと名付けたる、天下有名の槍でございます、其の槍を馬の平首に付け、大音揚げ『ヤア〳〵其所に控へたるは筑前守秀吉ならん、徳川家康の家來本多平八郎忠勝此所に控へたり、見參々々……』と呼はつて、人數を出だして七百餘人の同勢にて微塵に成れと打つて掛る、秀吉の旗本に於ても面々激戰をいたしまする樣子でございます、秀吉は少しも驚く氣色なく　秀『さては平八郎此所に打つて出でたるかソレ本多を討取れ』と下知を傳へましたから、敵味方入れ亂れ奮激突戰死力を竭して今を限りと戰ひました有樣は凄まじき計りで御座います、平八郎に於ては彼の蜻蛉切の名槍を提げ憶せず怯めずの働きでございます、本多の勇戰に由つて見る〳〵間に秀吉の旗本備へ崩れ立ち、筑前守既に危しと心得たる事故、馬を鞭打つて引揚げんとなしたる樣子を見るより忠勝大に怒り　忠『ヤア〳〵敵の大將筑前守何れに引揚げんとはし玉ふぞ、引返して尋常に勝負に及べ、筑前守首を渡せ』と呼はりながら其所に追掛け來たりまする樣子、秀吉は一生懸命馬を走らせたることにいたして引揚げると『見參々々〳〵』と云つて平八郎忠勝韋駄天の如くに追駈けました、其時に横合より致して一人飛出だしたるは、紺糸天人胴の鎧を着し同じ毛糸五枚錏鳥帽子型の兜を戴いたることにして赤銅作りの陣太刀を脊負ひ鹿毛なる駒に打跨がり、臥龍丸と稱けたる志津三郎の鍛へたる片鎌の名槍を提げ乘込たりしは、是なん秀吉荒小姓の一人、加藤虎之助清正大音を揚げて『ヤア〳〵

夫れにあるは德川の家臣本多平八郎忠勝なるか我は加藤虎之助なり、相手に取つて不足あるまい見參々々……』と云つて突いて掛る　忠『心得たり』とあつて蜻蛉切の槍を持つて暫くの間槍搦みをいたして居りましたが、此の時敵も味方もこの樣子を見て一人は本多平八郎、一人は加藤虎之助なり、何れも聞ゆる天下の勇士と勇士、この勝負見ずんばあるべからずと、恰かも梅ケ谷と常陸山の取組でも見るやうな心持で皆一同是れなる方に眼を配つて居りましたが、兎角する間に平八郎素より槍を取つては、天下一流、また此方は槍のみではなく打物取つては何事にも秀でゝ居る清正、容易に勝負が付かない、今ま龍攘虎搏の勢ひを以て爭つて居る、其の眞ん中へ何れより發したるものか流れ玉がボカーンと落ちました、この彈丸に驚いたるものか兩人の馬が跡に退つた、途端に羽柴の同勢此所にドッと人數を入れましたから、惜いかな物分れと相成りました、大將の一騎打ちと云ふものは刧々物分れとなるべきものではない、何れか倒れまする迄やるのださうですが、其間に大軍一時に這入りましたがために、物別れと成りましたものと相見えます、平八郎に放ても殘念に心得たが虎之助に於ても本多を討漏したかと齒嚙みをなした、是れは後ちに天下が納まつた時に、互に酒を飲みながら物語つた　忠『彼の時に加藤公と長く戰つて居つたら拙者迚ても今日までは生きて居られなかつたでござらう、貴殿のために一命を失ひましたらう』清『イヤ〳〵、拙者こそ彼の時に大軍中に崩れ入つたればこそ、一命を全ういたした、打物業は御身に及ぶ所でない』と兩人卑下いたしたと云ふは英雄の心裡奥床しい所であります、却說お話し別れ

て、秀吉に於ては既に本多のために撃たれんとなしたる所、虎之助清正に助けられホッと云ふ息を吐いて、西尾崎の方へ參りまする、勿論斯る亂軍の中なれば一騎掛けでございまする、時に西尾崎の方よりいたして一人紺糸の鎧を着し、同じ毛糸の兜を戴いたるとにして槍を馬のケラ首に引付け　甲『夫れに引揚げたるは羽柴筑前守秀吉に相違あるまい、徳川家康の家來榊原小平太康政此處に控へたり、見參々々と云つて迫馳けて來た、是れは豫ての約束でございます、南尾崎には本多が來り、西尾崎には小平太康政が控へて居りました、其前を秀吉が引揚げやうといたしましたから堪りませぬ、本多の持つて居る槍が蜻蛉切り榊原の持つて居るのが笹切といふ名槍だ、夫れを持つて迫馳られましたからイヤ秀吉驚くまいことか、迚も一人では叶はんと思ひましたから、ドン〳〵逃げ出した、小平太是れなる樣子を見るより　小『逃ぐるとは卑怯なり、返せ戻せ……筑前守返せ、戻せ、織田の天下を盗んだる大泥棒明智に倍増す大惡人返せ戻せ、猿面冠者、猿面郎、お猿のお尻は眞赤な、ヤーイ大馬鹿野郎……』　秀吉驚いた、世の中に口の惡い奴があるものだと思つたが、何んと云つても返さない、返せば命が危い、康政是れまでと思ひましたから馬を走らしてドン〳〵跡を追ひました、是れは秀吉が返さないのには意味がある、筑前守が未だ木下藤吉郎といつた昔し永祿三年のこと、桶狹間の戰ひに今川義元を釣出しては惡口をする、義元怒つて逃げれば助かるものを、引返して來たばかりに其謀計に落ちて終に今川とも云はるゝ人が毛利新助、服部小平太のために、討たれるやうなことになりました、大將は斯ういふ時に怒つ

て引返せば必ず敵のために討たれる、其邊は能く心得て居りますから秀吉は榊原が何んと云つても構やヤアしない、ドン〳〵尻に帆を掛けて逃げ出した、康政は怒らして引返させ討取らうと云ふ心底でございますから例の笹切りの槍を提げたることにて、尚も跡から　小『織田信長の天下を盗んだ大泥棒野郎、猿面冠者秀吉返せ、猿返せ……お猿のお臀は眞ソ赤いな』と又たヤリ初めヤがつた、秀吉は何んと云はれても構はず逃げたればこそ助かりました、けれ共秀吉は恐ろしい記臆の好い人で其後ちに至り小牧山の戰ひ御和睦に相成り、旁々いたし、徳川家と羽柴家とは、切つても切れぬ御間柄でございました、終に秀吉公從一位の極官關白大政大臣に御登身なすつた、徳川家康公に於ては、内大臣でお出で遊ばした、慶長元年閏七月十二日の夜に山城の伏見にお出でなすつて大地震、秀吉は翌朝禁裏御見舞として



參内を遂げた、其の參内を遂げる時に家康公は秀吉公御見舞として伏見桃山に參殿、殿下秀吉内大臣をお迎ひなすつて　秀『内府唯今より參内をいたすが、今日は豐臣の家來は召連れず足下の家人を以て登城をいたす』と仰せられたのは、どうも實に大膽不敵でございます、豐臣の家來が間に合はないのぢやアない、是れには深き思召しがあつて、徳川の家來をお召連れになつたのでございます、其時に本多中務大輔忠勝、榊原式部少輔康政をお供に連れて、お立出でなさる、秀吉は活潑な方でございますから、三里の間大地震のために家屋は倒れ道は崩れて居りますから、馬も駕籠も用ゆることは出來ませぬ、殿下は山鳩色の御裝束、淺黄八ツ藤形の御差拔き、紫色の御帶二重緒の玉冠を召され志津の三郎の太刀を佩き雲丹甲螺の笏をお持ち遊ばし、御裝束の裾を搦げ矢張り草鞋を召して居らつしやる、お供の人々も草鞋穿きだ、其時に本多忠勝榊原康政の兩人は顔を見合はして　忠『どうも今日こそは天の與へる時である、今天下を取らんとするには、この秀吉を討ち奉るの外はない、自分の權勢に誇り飽まで油斷の秀吉、今日に限り豐臣の家臣一人も召連れざるは天の與へる時なり、吾々共兩人途中にあつて油斷を測り秀吉の首を捻切つて呉れやう』と康政の顔を見る、康政は早くも其意を察しました。

（第七席）家康敵の大將を惜む事、並に羽柴勢小牧山引揚げの事

榊原式部少輔康政も腹の内で　康『如何にも本多の云ふ通り今日は猿面郎秀吉の首を取るには屈竟

の日だ、小牧山長久手の戰ひに彼れを逃がし、和睦となつて今日唯今斯る天變地異とは云ひながら今日の場合敵を討てと神佛の即ちお告げに相違ないと喜んで供をして來たがな本多……』と眼と眼で相談が出來て兩人は内大臣のお傍に參りました　康『申上げます』家『何んぢや』康『唯今我我共兩人協議仕りました、今日こそは天より與ふるの秋……』家『ウム』康『殿下秀吉の壽を絶ち奉るに於ては、天下は徳川家に歸しますること、願くば吾々共兩人へ此儀仰付け下されたく途中に於て秀吉を刀物要らずに首捻切つて御覽に入れ奉りますれば、仰せ付けられまするやうに……』康政の申入れたる時に家康是れを聞いて莞爾とお笑ひなすつて　家『さて〳〵其方等は何故左樣な愚かなことを申すや、徳川の四天王とも云はるゝ者が左樣なことを申す奴があるか、敵の首と其國を取ると云ふは此れ戰場の習ひなり、今日は既に和睦と相成り殊に一天萬乘の君より太政大臣の極官を授け玉はりたる尊きお方、吾れは未だ内大臣に過ぎず今日斯る天變地異混雜の其の中を我家の家來のみを召連れて參内とは是れ殿下の思召し宏大無量凡人の測り知る所にあらず、然るに途中に於て徳川の家來が油斷を測つて、殿下秀吉公を討ち奉つたとあつては却つて人の笑ひを受け、天下の同情を失ふの道理、今日まで仁德を專らとして立ちたる徳川家の末代までの瑕瑾たり、よしまた、斯かることをいたして天下を一度は得ると雖も永續いたすべきにあらず、暗に罪する者は天是れを罰し、明かに罪を犯す者人是れを罰す、罰は一つのみ必ず〳〵左樣な心得違ひをいたしては相成らんぞ』と以ての外なる御不滿の樣子、忠勝進み出でて　忠『恐

れながら君の仰せを背き奉りまするやうなれど、秀吉を害したるは本多榊原の兩人であると君が仰せあれば夫れまで、且つ吾々共は如何なる嚴刑を蒙むりましても、必ずお恨みとは存じ奉らず、何卒此段お許し下されたく……』家『成らんと云つたら成らん、其方共は時節を知らんか、今秀吉を討つて天下を取ると雖、も決して永續いたす氣支ひはない』忠『へエ』家『必ずや心得違ひをいたしてはならんぞ』康『へエ……』君の一言では仕方がない、ア、ー斯う云ふ好い時節がまた再びあるものではないが、と二人は實に殘念に思ひながら秀吉公のお傍へ戻つて參りました、秀吉は下賤から成上つて、天下を併呑した位ゐのお方、別に人相や占易はなさらないが忽ちの内に二人の樣子を氣取つておしまひなすつたから 秀『ふア此の二人の奴は油斷の成らぬ者である』と思召したが 秀『然し今日に至つて家康が是れを聞入れるものでない、然んな愚かな内府ではない、多分は兩人意見をされて戻つて來たのであらう、好し〳〵、其儀なりせば一つ兩人の生膽を寒からしめて呉れん』と思召しましたに由つて、俄かにピタリと歩を止めて 秀『内府々々〳〵』と内大臣家康をお呼びなさつた、足を早めて夫れにお進みになつた内大臣 家『ハッ』秀『イヤ、年を老ると誠に物が苦になつて行かぬ、暫時この太刀を内府に預ける』と仰しやつて佩てお出で遊ばした、志津三郎の太刀を取つて家康公に預け玉ふた、飽までどうも膽力が坐つて居る、斯う云ふ時に太刀の外に是れと云つて一身を保護すべきものはない、其太刀を渡してしまつた、内府家康是れをお預り申上げまして其所でお供をすることになつたが、太政大臣の佩びて入つしやる太刀で

すから、夫れを手に受取つて自分の腰に付ける譯ではない、矢張り秀吉公のお腰へ下がつてる儘を支へてお供をするので、家康公も樂ぢやない、そう云ふ風にして進んで行くのですから是非腰を家康曲なければ成らない勘定だ、然るに秀吉は意地が惡いからノソ〳〵歩くかと思ふとチョコチョコ駈出す、其度に家康屁ッピリ腰をして駈けなければ成らない、是を見て忠勝、康政は齒をバリ〳〵と嚙で口惜がつた、其處で忠勝が康政を顧みて

忠『どうだえ康政彼れを見なさい、御主人は屁ッピリ腰をなすつて供をしてお出でなさる、吾々どうも見るに堪へん忌々しいなア』康『ムウ、吾々共兩人に對し申付ければ、君の仰せがなくともやつてしまう』忠『さうだ、好い鹽梅に命令れば好いなア』夫れ

から四五丁參りますと　秀「内府勞れたであらう、何者か代れ」康「ハッ」秀吉公忠勝を見ると秀「汝是れへ參つて内府に代り予が太刀を持て……」忠「ハッ」忠勝夫れに出で忠「畏り奉る」と云つて太刀を受取る、内大臣は本多の顏をジロリと見て　家「心得違ひをしては成らんぞ」と口には仰しやらないが眼で知らせる　忠「委細畏り奉る」と、また眼でお受けをしたが　忠「ナニ拙者一人命を棄つれば好いのだ、此の場に至つて、何んでこの秀吉を助けられるものぢやアない」とお側に寄ると、どうも仕方がない、立つて歩く譯になりませんから、矢張り平八郎屁ッピリ腰をして御太刀を持たんとした時に殿下秀吉、忠勝の顏をジロリと睨んだ、平八郎程の英雄だがブル〳〵と震へた、夫れは其筈で應仁以來天下糸の如く亂れ、奸賊蜂の如く起り、英雄鷹の如くに集まり四海麻の如く亂れたのをば一枚の筵を以て、捲き納めたるが如くに天下を治め玉ふたお方、今日では從一位關白太政大臣、位は人臣を極め、威は海内に震ふお方だ、繪で畫けば御光でも付けませんければ成らぬ位ゐのもの、其のお方にジロリと睨まれたのでありますから、有繋の中務大輔忠勝も震へ上がりました　忠「是れは不可ぬ迚も討つ所ぢやアない」と思つた　秀「忠勝々々……」忠「ハッ」秀「どうぢや今日は豐臣の家來は一人も居らんが其方共が主人を思ふ誠忠は予も存じて居る、斯う云ふ時に、秀吉を討たざればモウ討つことは出來んぞ、どうぢや、幸ひこの途中に於て予を一擧の下に撲殺すか、左もなくば、太刀を持つて首を切るかと云ふ勇氣はないか、殺さうと云ふ氣はないかな」忠勝額に汗を流して　忠「どうも恐れ入り奉ります、中々持ちまして」

秀「イヤ〳〵遠慮に及ばん、斯ういふ時に、予を殺せば、德川の天下に成るのぢやが、其の勇氣はないかな」忠勝はいよ〳〵驚いた、時に遠くから見て居た康政　康「何んだえ、忠勝の樣は……ピョコ〳〵お辭儀ばかりしやアがつて、だが美事にやつてしまうだらう」とまた四五丁參ります と、秀吉公　秀「其方勞れたであうから、康政代れ」康「ハッ」と云つて、康政夫れに能り越して、お太刀を預つた、太刀を渡すと忠勝が小さな聲で　忠「不可ない〳〵迚も不可ない」康「ナニ不可ないことがあるものか」お傍へ出るとまた秀吉公にキッと睨まれた、康政案に違はずブル〳〵慄へ上つて　康「成る程、どうも不可ない、アヽー不可ない」と思つて居る内に内府公は康政の顏をジロリと見てお目配せをなすつた、必ずや心得違ひをいたすなといふ意味、康政も考へた、さうどうも御主人が御心づかひで見れば秀吉を殺すことは宜しくないと思ひ、急に止す氣に成ると別段恐るゝ所もない、暫く立つと康政も遠慮のない人でございますから　康「願ひます」秀「何んぢや」お太刀を某しお預り申上げて登營いたしまするは承知いたしましたが、何分にも三里もある所、お上のお腰へ太刀を附けてお供をいたせば、是非手前の腰を曲げなければ成りませぬ、僅かの所ではなし、此儘に二里も三里も歩けるものではござりませぬ、勝手ケ間敷きことを願ひ恐れ入り奉りまするが、お太刀を手前が自由に持ちまして宜しうございませうか伺ひます」秀吉はお笑ひなすつて　秀「アヽー好い〳〵勝手に持參をいたせ」康「有難き仕合せ、勝手にいたせとの御意がございますれば、手前勝手に仕ります」と突然太刀を腰に差した、二本差して居る所へ一本差した

から三本になつた、夫れで澄まして、秀吉の跡に尾いて行く　秀吉『康政々々』康『ハツ……』秀『どうぢや、唯今忠勝にも申したことぢやが小牧山の戰さが和談に相成り、今日は秀吉は太政大臣關白に相成つて居る、其方の主人家康は内大臣で予がなければ天下は德川のものぢや、斯う云ふ時に秀吉を殺し德川の天下のものに致さうと云ふ志しはあらざるか、予を殺害しやうと云ふ氣はないか、どうぢや』と仰せられた時に榊原康政は物に遠慮のない男でございますから　康『如何にも其心はございました『秀』あつたか』康『ヘエーさう云ふ了簡もございましたが、然しさう云ふことを致すも如何と心得て、止めましてござる』秀『止めたか』康『へ、』秀『なぜ止めた』康『マ、一つ左樣なことは御免蒙りたいもので』秀『アヽー思ひ出したことがある康政……天正十二年四月のこと小牧長久手の戰ひの折であつたが、予が唯一騎にて引揚げんといたした時に笹切りの槍を以て追馳けて參つたのは確か康政其方であつたな』康『アヽー彼の逃出した時で……』秀『逃げ出した時ではない、予が引揚げる時ぢや』康『は……引揚げると申すと大層體裁が宜うございますが、實は上は逃げてお出でなすつた時で』秀『ヤア〳〵逃げたで好い』康『殿下が逃げた時に左樣で……殿下には本多平八郎に追はれ給ひ、また手前が忍んで居ることを知らずにお出でに成りました、彼のとき追ひ掛けましたは拙者に相違ございませぬ』秀『左樣だな唯筑前守待てといつて追ひ馳けて來るのなら好いが其時其方何んとか申したな、餘程どうも珍言を吐いたやうであつたが、何んて云つて追掛けた』康『左樣で……其何んでござる』秀『コレ〳〵決して遠慮には及ばんから何んと申して追馳けたか、物語りをいたせ』康『ハツ、夫れはどうも御免を蒙むりたいもので』秀『苦しうない咎めはいたさめ』康『左樣なら申上げます、ヤア〳〵夫へお引揚げに相成るは羽柴筑前守秀吉公と見奉りしは僻目か、速かにお引返し遊ばせと申して追掛けました』秀『イヤ然んな叮嚀ではなかつた』康『左樣ですか然し戰場にて申したることを今日に至り御咎めに相成つては康政迷惑をいたすので、彼の砌りは敵味方でございますから少なくも暴言を吐たに相違ございまんが、唯今お咎めに相成つては迷惑を致します』秀『イヤ〳〵康政安心をいたせ、夫れを繰返したからと申して唯今に至り彼是れ咎めたてはいたさぬ、大層珍言のやうに心得るから相尋ねる』康『左樣なら申上げます彼の砌り手前は笹切りを以て追掛けました』秀『何んと云つて追掛けたな』康『ヤア〳〵夫れにお引揚げに相成るは羽柴筑前守であらう、引返して尋常の勝負に及べと申したので』秀『イヤ〳〵未だ夫れだけではない、もう一つ申したことがあつたやうぢやな』康『ヤア〳〵』秀『夫れは分つて居る』康『ヤア〳〵羽柴筑前守返せ、榊原小平太これに控へたり、見參々々……と申したがお引返しがございませぬから、據ろなくヤア〳〵』秀『ヤア〳〵は分つて居るよ』康『ヤア〳〵羽柴筑前守返せ、織田の天下を盜んだる大泥棒明智に倍增す大惡人筑前守返せと斯樣に申しました』秀『未だ其位ゐのことではあるまい、未だ其方何んとか云つたな』康『ヤア〳〵』秀『ヤア〳〵ばかり申して居るな』康『織田の天下を盜んだる明智に倍增す大惡人羽柴筑前守返せと申しましたが貴郎はお引返しがございませぬから止むを得ず猿面冠者秀吉返せ、お猿のお尻は眞つ赤いな、牛蒡燒いて押付

けろ」秀「もう好い〳〵」康「どうか御勘辨を願ひます」秀「然しどうも夫れを憶せず物語をいたしたのは天晴れな者ぢや」と改めて内府公を召されまして　秀「面々何れも出世をなし、本多は中務大輔、井伊は兵部大輔、酒井は左衛門尉に任じ、榊原一人のみ、榊原式部少輔と名のみは改めたれど四人の内一番身分輕しと承はる、何卒三人と同じ祿高を與へ取らせよ」と、殿下よりお言葉を賜はりまして、こゝで伏見の城に立歸りましたる時に殿下より赤銅作りの御太刀一口を賜はりまた、別に黃金十枚を賜はりました、内府家康公も棄て置けませんに由つて、四家老の内に加へられ、大層な出世をいたしましたと云ふこと、惡口をしたのが、一つの幸ひと成りまして、斯く相成つたといふ、是れは後ちのお話しでございます、お話し元に戻つて羽柴筑前守人數を分つて長久手に進まんとなしたる時に一度は本多平八郎忠勝のために迫はれ、また榊原小平太康政のために二度まで馬側に乘付かれましたが、秀吉は幸運無類の人で幸ひにして其所を免れました、さうこうする内に、秀吉の大軍に於ても、追々其跡を慕ひ參りまする、爰に德川の同勢は小牧山を本陣といたして、充分に人數を備へて居ります、羽柴の兵に置きましては、長久手一體の平野に對して陣を張り、備へを立つて居ります、其備へを家康遙かに見るに、十二萬の同勢を四十六段に備へ、先陣には日根野備中守、同じく彌次衛門の同勢七百餘人にて相堅め、二陣左備へには山崎太郎左衛門行安一千五百餘人にて相堅め、充分に此所を堅めたり、續いて多賀豐後守、多賀新左衛門、木村隼人正、加藤光内、神弓田平左衛門、長岡兵部大輔藤孝の息與一郎、高山右近太

夫、木下平左衛門、中川藤兵衛、德永石見守、小川孫市、金森五郎八、高畑新八郎、蜂屋出羽守丹羽五郎左衛門、生駒甚助、黑田勘兵衛、蜂須賀小六、明石與四郎、蒲生忠三郎、稻葉伊豫守入道一徹齋、堀久太郎、筒井四郎、中軍には、羽柴筑前守秀吉續いて羽柴美濃守、加藤虎之助、加藤彌六、竹中兵助、糟谷助左衛門、伊藤掃部守、毛利河内守、牧村長兵衛、松下嘉兵衛、瀧川久左衛門、山内猪右衛門、河尻與四郎、矢部善七、柘植與八郎、池田久左衛門、淺野彌兵衛等の軍勢何れも旗馬章に於ては旭に輝き、鎧兜の光りは閃々として吉野龍田の花紅葉、日の波寄する千松島、實にどうも其の勢ひといへるものは邊りを拂つて相見えました、德川家斥候の者に於ては、この樣子をつく〳〵見極めて、立歸り總大將に言上をいたします、家康公は「さては秀吉、愈々爰に天下分け目の戰ひをいたすものと相見えたり、吾が方も此分にては、或は戰ひに勝つことは覺束かない」と思召し盡くどうも秀吉の備へ立てを御感心遊ばしました、然る所秀吉公何に思ひけん俄に是れだけの軍勢を一戰に及ばずして退くといふことを仰せ出しになつた、サアどうも一同は、其の眞意のある所に苦しみましたが總大將の仰せなれば仕方がない、使番は馬を東西に乘り違ひて御陣拂ひと云ふことを觸れ歩きました、大軍のこと陣拂をすると云つても直ぐに引揚げると云ふことには成りませぬ、中にも驚いたのは加藤清正、福島市松、早々御本陣に罷り越して御樣子を見ると總大將秀吉公御本陣にお控へ遊ばして、今や御酒宴の最中であります秀「オ、市松、虎之助、如何なる用向きあつて罷り越したか」正「恐れながら吾々斯く滯陣いたして今日に

もあれ開戰いたすこと丶心待ちにいたして居りましたる所俄かに御陣拂ひ、一度當地を御引揚げに相成りますやうに承知いたしましたが、全く御引揚げに相成りまするか、如何で……』秀『去れば一時當所を引揚げ都合に由つては秀吉唯今より大阪表に引揚げるであらう、其方等も其用意をいたして宜しからう』此時に虎之助市松兩人顏を見合して呆れて居りましたが　虎『虎之助伺ひ奉りまする』秀『何んぢや』虎『何故あつて一戰に及び玉はずしてお引揚に相成りまするか、此度の戰ひたるや實に容易ならんこと、是れ迄の間に御味方の大將多く失なひ、且つまた過日の戰ひには三河勢のために先鋒を破られ、此上は吾々共必死の戰ひをいたすべきの心底當の相手が德川家康海道一の釆配取りと云はれたものを相手にいたしての戰ひなれども、家康如何に能き計略を巡らすと雖も君また、奇才を振ひ玉ふて、德川家康の首を得んことは敢て難き事には是なくと心得まする、然るに兩陣此所に於て相見えましたばかりにて、此儘に引揚げ玉ふとは、如何なる事にございますか』と秀吉に向つて申上げた、福島市松は遠慮のない男ですから、眼を怒らし肩を聳かして是又秀吉のお傍に進んだ。

（第八席）　秀吉家康和睦の事、並に秀吉官位陞進の事

正則が　正『恐れながら上に於ては德川家康を左ばかりにお恐れ遊ばすか、恐れ玉ふ位ゐならば初めから戰さを遊ばさない方が好うございます、德川家康とても鬼神にも候はず、百戰百勝でもご

ざいますまい、此上からは不肖正則に於ては此度の先陣を勤め次第に由つては三河守家康の首は取上げて御覽に入れます、何んで然んなにお恐れ遊ばすので』秀『ハ丶丶丶ハ正則其方の志しは面に現はれて居るが、德川家康を怖る丶とは甚だしき一言、けれども咎めはいたさぬ、正則は格別虎之助は能く予の志しを知る者と相心得たるに、其方まで是に罷り越して意見ケ間敷き申分は何んぢや』清『へエ』秀『左樣其方等が申すなら其の次第を申聞かせん、抑も此度の戰ひたるや容易ならんことであるぞ、汝等は幼年より吾が手許にあつて志を知るものと思ひしにイヤハヤ存外の一言、夫北畠信雄殿は故右大臣家の御總領に渡らせらるゝなれども、今日まで此秀吉を仇敵の樣に思はるゝ爲め此方の御爲を存じて計らうとを悉く惡しく御取りになり、常に刀を磨き玉ふ之は一には讒者の所爲もあれど、信雄殿が物の道理を辨まへ居られざるがお誤りのもとなれば一度弓矢の上にて秀吉の力を御覽に入れ、軍といふもの丶六ケ敷事を御會得ある樣と存じ、信雄殿の討手に向ひたる迄の事ぢや、元より信雄殿を滅ぼす意ならば別に手立もあり又自ら出陣致さずとも事は足りるのであるぞ、又德川は元より我に仇もなく恨もない、其家康が今日に至り、北畠殿に對して昧方をなし我に刀向ふのは全く故右大臣信長公とは深き間柄で其義理からである、去れば家康は義のために戰ひを致す、吾れまた其義戰を承知いたして家康を相手にするといふは負けても勝つても家康の名を擧げる計りである、我士卒を傷け戰糧を費して家康の名をなさせるのみか故主の連枝に刀向ふといふ惡名を蒙る外何の益もない、其上戰志は故右大臣家の御尊慮の如く、十善

萬乘の君の宸襟を安んじ奉り、下萬民塗炭の苦しみを救はんといふにある、されば我平生の志に違ひ益なき戰をつゞけて何の詮があらう、吾れ三州を取て吾が領地を肥さんとするの慾情よりして戰ひをなすならば格別なれど、そんな考は毛頭ない、德川とても其通り我と干戈を交えて勝算はあるまい、唯名の爲にする戰爭であつて少しも戰に執着のない事は明かである、又今に至つて彼れ信雄殿は其の愚かなる心にも戰さと云ふものは斯ばかり難かしいものかと、心注き必ず後悔をして居られるであらふ、恐ろしく思つて居られるであらふ、さすれば我志は遂げられたと申すもの、吾唯今より小牧山なる德川家康の陣に對して、一紙を投じ其返答に由つて事をいたさんの心底、當の敵は信雄殿で德川は其方人ぢや、信雄殿此秀吉を殺す心を思ひ止まり玉ふとならば十萬の軍を起した目的は遂げられたと申すものぢや」といふ長談義、成程承つて見れば尤な話で知ず〳〵家康の廣告をして居るとは馬鹿々々しいと感じました、そこで秀吉の手紙は北畠殿無實の罪を糺さず老臣等を誅戮し、且つ百姓の艱難を顧みず濫に干戈を動かし秀吉を打滅さんとして軍兵を起さる、是以の外の僻事なり秀吉何等の罪ありや、抑秀吉昔は織田の賤臣なれども今は朝廷守護の大役を承はる者、然るに北畠殿は猶我を織田の賤臣と見做して朝廷守護の臣たる事を忘れ之を害せんとするは朝廷に對し奉り悖逆の罪を犯すものにあらざるか、三州又之に加擔するに於ては同じく悖逆の罪人なり茲に思を寄せざるは叡智なる三州としては尤も不審の至り速に干戈を休め天下泰平を計るとは彼我の務なり、書答の如きは大阪に於て之を待つべし云々とい

ふ文面秀吉も中々外交家だ、お前は織田に對する義戰だといふ看板を掲げてるが夫は間違だ、一歩進んで考へれば天下悖逆の罪人であるぞと脅かした文面、秀「サア此手紙を持つて小牧山の本陣に至り、三河守家康に對し此の使ひを仕遂げるものは何者が宜しからう」上の仰せを承はりて虎之助も誠に恐れ入つた、虎「委細了解致しました、就ては手前お使に參りませう」秀「イヤ其方ではいかん」福島が進み出で正「手前が參りますナンノこんな使譯はない」秀吉公お笑ひに成り秀「其方では猶いかん」此時お傍に控へて居りましたるは丹後田邊の城主長岡藤孝入道の悴與一郎忠興夫れへ立出でました、是は細川忠興の祖と云はれた位ゐの人、父藤孝入道よりはまだどうも才物でございます、明智光秀に見込まれ其娘を貰ひ受けて妻と致した、年は未だ二十の上を二つか三つしか越しませぬが確乎りして居る、與一郎忠興其所に立出でまして忠「右のお使ひ與一郎忠興に對し仰付け下し置かれまする樣願ひまする」と申出でた、秀吉是れをお聞取りに相成り秀「オオ能う申した、其方ならば至極よろしからう、然らば唯今よりいたして其方この書面を以て小牧山に至り家康に面會の上にて申告ぐるやうに致せ」忠「委細心得ましてござる」と細川與一郎忠興は早速に本陣を放れましたが、其日の扮裝は紺糸の鎧を着し、兜は被らず白布を以て鉢卷となし鹿毛なる駒に鐵鞍置て打跨がり書面を懐中なし使ひ旗といふのを持つてトウ〳〵と小牧の方へ對して參ります、陣中にはまた樣々の旗がございます、使ひに行く者を猥りに殺すと云ふ者はない今も昔しも戰さには義理のありますものでございます、降參旗または使ひ旗などゝ云ふ者がござ

いまして何れも小旗でございます、是れを腰へ付けて乘出だして參りました、早くも小牧山德川家康の陣中に於ては大須賀五郎左衞門樣子を見受けると、唯一人大膽にも是へ小旗へ持つて來る者がある、近付く儘に是を呼止め、五『夫へ參られしは羽柴方細川與一郎忠興と見た目は僻目か、承はるに與一郎は天晴れなる者であると云ふことは豫て某の知る所である、如何なる使ひに參りしか其口上を述べられて然るべし』忠『ハツ、此度の使節餘の儀にあらず、此度の合戰につき我大將の志を述べ三州殿の思召も承り度委細は則ち是れなる書面、德川三河守殿直き〳〵御披見に預りたし、宜しく……』と取出だしたのが秀吉直筆の書面、大須賀五郎左衞門是を聞き 五『オオ大切なる使者の役目御苦勞に存ずる、某しは大須賀五郎左衞門でござる、御差出だしの御書面某し取次がんか、御身君の御面前に出でゝ、差出だすべきや』是れは與一郎が手紙を大須賀の前へ差出だしたつて大切な使ひだ、容易に取次へ渡すべき男でないとチヤンと存じて居りますから態と斯ういたしましたので、中々狡猾な男でございます、與一郎莞爾笑ひ 忠『相成るべくは大將の御面前へ罷り出たく……』五『オ、如何にも心得た、暫くお待ちあれ』と五郎左衞門が家康の御前へ出で此事を披露に及んだ、家康公も偖はと思召しましたから 家『是れへ通せよ』との仰せ、其所で早速與一郎家康の面前に通りますと、家康の兩側には三河侍がツーと居流れて居ります、四天王其他鎧兜嚴めしく强さうなのが居るが與一郎は平氣だ、鄭寧に御挨拶の上 與『大將秀吉今日軍馬を此地に向け戰ひをなすことを實は快しとせず、勢ひ止むを得ざるを以て今日まで戰ひ

を致したり、また是迄の間敗走をすること屢々なれども手前方にても加賀井竹ケ鼻兩城を乘取岩崎を踏破つて居りますから互角の勢で此役の成敗は分り申さんが、味方は十二萬の大軍あり、其所は宜しく御熟考に預りたし、恐れながら是は大將よりの御書面、直き〳〵御披見を願ひたう御座る』取出だしたのは秀吉の書翰、御自身に家康是を御覽に相成りまして、此儘にお手箱の內に納めて仕舞つた、御家來の人も家康とは餘程離れて居りますから何んのとだか知らない 家『忠興使ひの儀は大儀に存ずる、書面の次第豫め相分つた、然し是れは容易ならん大切の事であるから即答を致す譯には相成らん、また返書を遣はすと云ふ譯にも相成らぬ日數七日の間猶豫をいたすべし、其內に篤と熟考をいたして返答に及ぶ、立歸り秀吉公には御書面は相分つたが然し其實を家康へ對しお見せ置るれば一層喜ばしく心得ると家康が答へたりと申されよ』忠『委細畏りました』家康公傍らの家臣に向ひ 家『陣中の使ひ相當の手當てをして遣はせ』と仰せがあつた、早速其所へ酒肴を調へ取揃へましたが陣中の事で格別料理と云ふものもない、ホンの冷酒を夫れへ汲んで參り 盃事に及んだ、忠興大いに喜び二三盃を重ねまする、家康公樣子を見てお出で遊ばしたが 家『是れは今日の使者大儀に存ずる、志の品を遣はす』とお手づから一口の短刀をお遣しになりました、與一郎辱けなく其品を貰ひ受け一同の者に對して一禮を述べ、甘儘に致して陣中を離れ、再び馬に打乘りまして秀吉の本陣に立歸り右の次第を秀吉公へ申し上げました、秀吉其返答を聞いて 秀『さうだらう、言ふことは易く行ふことは難い、どうか其實を見せて貰ひたいと

云ふ即ち德川家康の申分ヨシ〳〵」と去れば秀吉公においては既に陣拂ひの用意に取掛りました
から間者は其旨を家康公の本陣に通じました、お話し二つに分れて德川家康公の旗本に控へて居
りました酒井左衞門尉、偖は榊原式部少輔などゝ云ふ人々は何を秀吉から申越して來たか知れな
い、大須賀五郎左衞門だけは此事を知つて居りましたが、家康公すらお隱しに成つた樣子であるか
ら口外は出來ませぬから默つて居る、去れば一同は知りたいが其儘にして居る、家康公に於ては
頻りに斯く首を曲げて居る、お傍に居りまする人々大きに氣に成つて來ましたから、取分け松平
主殿頭と云ふお方は思召しに叶ひ何事も腹藏なく仰せられまする人、主殿頭夫れへ罷り出でまし
て　主「申上げます」家「何んぢや」主「ヱ、先刻羽柴筑前守よりいたして遣はされましたる書面、如
何やうなる儀にございまするか」家「イヤ〳〵左樣なる事は尋ぬるに及ばぬ、申して好ければ申す
が偖てどうも秀吉といふ人物は豫て容易ならざる人物であることは承知いたして居るが、アヽー
益々容易ならぬものだ、始終は天下の政權を握り天晴れ將軍とも成るべきものである、却々内大
臣信雄などが何を企てゝも及ぶべき所ではない、今にして秀吉を倒さなければ生涯秀吉を倒すこ
とは相成るまい、然らざれば吾れも秀吉の機嫌を聞く身の上と相成るのぢや」と仰せられました
のは、どうも家康といふ人物は名智の人でございます、今は戰ひに勝つて居るからこの虛に乘じ
て討たなければ生涯秀吉の手許にあつて働かなければ成らぬ事を存じて居らしつた、成る程、仰
しやる通り兎も角も後には隨身をして秀吉公は直ぐのお妹御おきく殿を家康に下し置かれ、是を

駿河御前と申し上げ南妙院殿旭の前、或は駿河御前と申し上げ御簾中に直りました、彼の築山
御前と云ふお方の御落命になりました後でございます、さう云ふことになると今更兄弟でございます、切つても切れない間柄、去ればにや朝鮮お手入れの折の留守居から引つゞいて、慶長三年秀吉公御他界の後はどうしても德川家が天下の政權を掌る運命になりました、秀頼が十五歳に成るまで後見といふのはホンの表向で、其時分の勢ひで見ると德川でなければ中々豐臣の後を襲で一天萬乘の君の宸襟を安んじ奉ることは出來ませぬ、兎も角も秀吉も豪いが、家康も豪い、兩英雄の胸中知らず〳〵の間に小牧の戰ひが和睦といふことになつた、其所で秀吉から兵を退て見せなければ成らぬから、和議を申込んだが斯う家康が秀吉をお褒めに成つても、外の者には更に分らない　唯「エー」と松平主殿頭なども聞いて

居るばかり　主『何んだい親玉は……無闇に敵の大將ばかり褒めてしまつて、アー敵を恐れてはこの末が思ひやられる』榊原康政が　康『全體吾君は二タ言目には秀吉をお褒めなさるが、夫れ程褒める人物なら、初めから戰ひをなさらんが好い、譯の分らねえことだ』とブツ〳〵云ふ、家康影口を御存じある筈はないが、並んでゐる家來の顏色を見て、アヽ彼は斯う思つて居る、是れは斯う考へて居るなともう疾に不平なのは御存じであります、偖て面倒なる双方の交渉は略いたして爰に小牧の合戰も終に和睦と云ふことに相成り、家康公より北畠信雄方にも御沙汰があつて天正十二年十一月十一日勢州は桑名郡矢田河原において御和睦、家康は遠州濱松に羽柴秀吉は大阪表に北畠信雄は清州に對して夫れ〴〵兵を引揚げた、デ秀吉より右の次第を棄置く譯に成りませぬから京都に奏問を遂げられる、即ち此度和睦いたしたことを申上げたので一天萬乘の君に於ても大いに叡慮を安んじ給ひました、尤も國内に戰があれば大御心を痛めさせ玉ふに相違ございませんが、和睦いたしたと云ふので、公卿百官に於ても大に安堵いたされました、此時秀吉に對し都よりして内大臣の勅諚がありました、北畠信雄は内大臣であるから是れを右大臣に進めて秀吉を内大臣にしやうと云ふ禁中に於て御詮議があり右の次第を内々仰せ渡されました時に秀吉以ての外に驚き御辭退を申上げた、素より尾張國愛知郡中村より出でたる匹夫の某し、右樣の高官に陞るは恐れ入り奉る、どうぞ此儀は御赦免に預かりたき由を言上した、誠に其志しの神妙なる所を感ぜられ尚更内裏の評判宜しく終に强てとあつて秀吉に於ては從二位權大納言といふことに相

成りました、是も御辭退を申上げたけれども、さう〳〵御辭退する譯に成りませぬ、爰に從二位權大納言といふことになつた、さてお話し二つに岐れて爰に北畠殿に於てはなまじいなる戰爭を起し、手も足も出ず一二度戰つたが手痛く打破られて絶體絶命の淵にも臨むべき所を家康の出陣に依つて免れた上、此度對等の和睦といふ事で鳧がついたといふのは全く家康のお庇である、物には謝するの禮ありと云つて實に此度御和睦に相成るまでの德川の骨折は一通りでありません、流石に傲慢なる北畠内大臣信雄　盡　くどうも家康公の義心に感じて老臣一同の者と會議の末、使者を以て御禮を申述べては失禮に當る故自身お出に相成り、德川家に直き直きに御禮を申述べる事になつた、所が北畠信雄は性愚鈍でありますから又考へ直して老臣に打向ひ　信『予は内大臣である、家康は大將なれば身分に於て餘程の懸隔があるに由つて家康を當方へ招いで宜しからう』と云ふた、老臣共大に驚き　甲『なか〳〵爰に官位の高下を以て爭ひまする所でございませぬ、是は飽くまでお出向き然るべし』と涙を流してお諫め申上げましたから、漸く不承々々に北畠信雄が自分濱松に罷り越した、先手の者右の次第を注進いたしましたに由つて、濱松城内に於ては此儀に就て評議をなし、酒井左衞門尉お出迎として途中まで罷り出でまして即ち濱松城内へ御案内申上げた、家康公に於ても快く御對面に相成りました節信雄が『偖て此度の合戰に就ては一方ならぬ御加勢を下し置かれ有難く、右お禮として此度當地に罷り越しましてござる』と逃べた時に家康『イエ内府の重き御身を以て輕々しく濱松に對しお越し下されたるは誠に家康喜ばしく存ずる

某しは故右大臣殿とは別段の間柄なり、其右大臣殿に縁故あればこそ此度お頼みに應じて筑前守を相手に戰をいたしたるが、御和睦に成れば此上もなき事なり、先づは一天萬乘の君の宸襟を安じ奉るこそ第一でござる』と呉れ〳〵も將來の時勢に就て說き及ばし、信雄も家康の大見識に驚いて種々手厚き饗應に預りて立歸りました、入れ變つて秀吉方も淺野彌兵衞長政家康方へお使ひでございます、是も矢張り此度の和睦に相成つたに就て申越されました、是れまた手厚く扱かひ淺野彌兵衞も其頃ほひはモウ彈正少弼でございます樣々の下され物があり 家『予は素より筑前守殿へ對して意趣も意恨もない、勢ほひ止むを得ずして織田の家名爰に倒れんとする折柄であるに由つて家康人數を出だした、然る所幸ひにして戰中ばに相成り斯く和睦をいたしたのは双方の幸福である、家康實に喜ばしく心得る、右の次第を羽柴殿へ好きなに御披露に預りたい』と至極どうも御叮嚀の御挨拶でございます、彌兵衞は家康の溫厚の君子なるに驚きました。

（第九席） 秀吉家康と縁組の事、並に長曾我部元親獨勇の事

長政が何で驚いたかといふに大抵の者ならばお前の方は十二萬の大軍を率て此方は僅かに二萬に足りない一手を以て合戰をして一度も負けたことがない、和睦とは云へお前の方から持ち込んで來たから和睦もしたものだ、もう少し戰つて荒膽を挫きたかつた』位のことは云ひ兼ねないのである、又さう云ふ手合は自然腹の底が見え透くといふのは此長政も苦勞人で是迄積んだ經驗があ

る、所が德川家には毛頭さう云ふことがない、誠にどうも叮嚀のお言葉丈けに長政に於ても心の奥がわからない、恐れ入つて立歸り此次第を申入れると、天下を飲む位の勢ひであつた秀吉も首を曲げて考へた『どうも是れは大變だ、實はどうも家康といふもの、是れ程ではないと思つて小牧山長久手の戰ひを開いたのであるが、戰ひをして見ると戰さは上手だし人望があつて夫れに兵を養ふことに妙を得て居る、實にどうも吾がためには目の上の瘤、是れはどうも德川家康に油斷をして思ひも寄らぬ不覺を得ることがあらう』とお考へなされた、其時に淺野彌兵衞が 彌『仰せの如く彌々恐るべきは家康でございます、先づ今の內に御親族の御縁組をなさるが第一、唯今は好いやうなものゝ先きへ行つてどんなことに相成るかも知れませぬ、一層今の內に縁を組んでおしまひなさいまし、幸ひ家康には築山御前と云ふ御臺所がございましたが先頃不幸にして先立ちました、去れば御愛妾はありと雖も御簾中と云ふものはござりませぬ、お妹御をお遣しに成つては如何なものので』秀『夫は幸ひである、貰つて呉れやうか』長『喜んでお貰ひなさるでござらう、私一つ參つて見ませう』と爰で長政がまた〳〵濱松に出掛けました、家康何事なるかと御前近くに召した時に長政が 長『偖て今日はお目出度いお話しに參りました、秀吉の 妹 南無妙院旭の前と申すおきく殿といふ婦人を御簾中にお貰ひ取りを願ひたい、容貌は美くしいと申上げたいが兄に似て居りますから、少し猿のやうな所がござる、一つ貰つて下さることは成りませんか』と淺野彌兵衞さんと云ふ人が中々の辯者でございます』好い鹽梅に話しをした、德川の家來は一同左

右に居並び是を聞いて居りましたが、猿のやうな女と云ふのぢや如何寛仁大度の吾が君もお斷はりに相成るであらう、且ついつかは敵と成るべき秀吉の妹、旁々御承知はあるまいと考へて居りますと、家康快く御承知に成つた 家『夫れはどうも辱けない、思召し辱けなく、其おきく殿と友白髪の八千代まで夫婦と成るであらう』と最も速かなる御返答。彌兵衛長政大きに喜んで立歸り忽ちの内に充分の仕度を整へておきく殿は濱松に下向、夫婦となつてお仲も睦じく、爰に秀吉と家康の兩家は姻戚となりました、斯く秀吉は家康を眛婿と致しましたが未だ夫れでも烟たくて仕方がないから、其後長政をお招きに成りまして 秀『此上どうか緣を深くしたいものだが如何したら好からう、予に未だ子供がないが徳川には大層子供がある、一人どうか貰つて養子にしたい、是れを一つ申込んで貰ひたいものだ』其時に長政が手を拍つて喜んだ 長『君が其の思召しならば宜しうございます、參つてお貰ひ申しませう』とまた使ひに行つた、徳川家康の懷中刀と云はれたのは本多上野之介だ、秀吉の懷中刀と云はれたのがこの淺野彌兵衛長政、黒幕の裡にあつて凡ての謀略を巡らしますのは戰場に出て敵を斬るよりも難しいものでございます、さて長政が濱松に參つて右の儀を申し入れると、家康公お喜び遊ばし 家『不肖家康の子供を以て養子にいたされたいと云ふのは辱けない、然し幼少なのではお手數が掛るであらうから……』と御次男於義丸と仰しやる本年十三歳にお成り遊ばしたのをば大阪にお遣はしに成りました、此お方が後ちに至り三河守秀康と申上げ、御離緣の上徳川家に復歸して越前宰相秀康公と申上げ、後には足羽郡

福井に於て七十五萬石を領したお方であります、日本の關羽と云はれて身の丈けが六尺八寸五分あつて、お顏の色は紅の如くであつたと云ふ、豐臣秀吉は徳川家から子供を貰つて置て是れに跡を次がせる積りであつた所、實子の秀賴公といふものが出來たものでありますから、隨分手前勝手だが其の貰つた子供が少し邪魔になつて來た、デ結城の家が絶えて居たから養子におやんなすつたが、其時に徳川の家來一同大いに憤慨をいたしたと云は、自分の勝手に小供を呉れろと云つて貰つて置きながら今更實子が出來たからと云つて其子供をまた自分の勝手に他にやると云ふのはどうも豐臣秀吉に似合はしからぬこと、吾君よりいたして此儀に就てはお掛合あつて然るべしと申されたが家康公は何のお掛合もなさらなかつた、其の時に徳川の家來は小牧山の戰ひ以來豐臣家は少しも恐る

る所はない、夫を秀吉がなせる儘にして何をなされてもハイ〳〵と云つて在つしやるのはどうも其意を得ないと云つて家康公に申上げた、其時に徳川家康頭を振つて　家『必ず左樣な事を申すこと勿れ、彼の時に秀吉十二萬の兵を率ゐたりと雖も未だ尾張國中村から出でた百姓の成り上りのことは誰も知つて居る、十二萬の同勢も據ろなく從つて居るやうなもの、去れば戰さに成れば自ら其の十二萬の兵は落付かない、是れ秀吉の恐れて先方より和睦を申込んで參つた譯である、其前二三回戰ひに勝つたのは當家の幸福、今日の所では先方は太政大臣關白の位に居る、征夷の職にあらば天下の事意の儘なり、其者を相手にして戰さをしては重ね〳〵の不利なり、今秀吉に從つて居るやうなもの丶別段何も恐れて從ふのではない、太政大臣關白と云ふお位に對して頭を下げて居た所が誰が何とも云ふ者はない、今日は中村より出でたる百姓草履取りの木下藤吉郎より羽柴筑前守に成つた時とは違ふぞや、先づ時節を待たなければ不可ぬ』と盡く〳〵諭されました、其時に家臣一同どうも上の御胸中大いなるには恐れ入つたといふことでございました、却説秀吉は正二位内大臣に陞任いたされました、是全く秀吉といふ人が王室を尊びまして誠に天子に對し奉り誠忠無二、また百官の方々を勞はり、尚攝家清華の人々から愛されましたから御陞進も早いと云ふたやうな譯、去れば益々其勢は旭日昇天の如く、海内風の草木に加ふる如く從ひましたが其中に唯從はないのが伊豫、土佐、阿波、讃岐の四ケ國を領して居りまする長曾我部元親、是なる元親のみは秀吉に對して未だ一度も款を通じたる事なく、王室に對し奉り貢物を納めたこと

もなく唯四國全土を擧げて己れが王樣の如くに我意を振ひ居りまするの樣子、屢々秀吉公より使者を送ると雖も是れに應じないのは一儀のある事でございます、此長曾我部元親と云ふ人の先祖を尋ぬれば秦の始皇の皇孫に陣與といふ人があつた、陣與が日本に渡り人皇十四代仲哀天皇の御時信濃國に暫く居住をして居りました、此人文武の道に達して居りましたる人でございます、代々信濃國に秦の姓を賜はつて居りました、然る所が人皇三十一代用明天皇の御時に守屋大臣と云ふが現はれ、此者が佛教を破却いたす事を專一となし、誠にどうも穩かならざる時に丁度秦の川勝といふ者聖德太子に勸め奉り守屋の大臣を滅ぼした、其功に由つて土佐國長岡の庄を賜りました、デ其領分の内に曾我部といふ所があつたから是を取つて姓にいたし、頭に長の一字を付けて長曾我部と號す、然る所足利義冬公周防の國に成らせ玉ひしが、是は全く其御臺所が大内義興の妹なれば其緣を以て周防國に寄食して居る内、義冬に三人の兒があります、總領を義近と云ふ、其人は阿波の宮と云ふ所に於て落城をいたし其お子に義景と云ふものがあり是れを土佐國へ移し奉り長曾我部が此お方を將軍と仰ぎ奉り義景を大切に御養育申上げた、去ればにや足利の血統義景が元親の手許にござるために彌々長曾我部元親の勢ひと云ふものは大したものに成りました、長曾我部元親の勢ひ旭の如く土佐の大濱にあつて誠にどうも其嚴重に事をなして猥りに他國の者を入れませぬ、秀吉幾ら何んと云つて參りませうとも今こそ内大臣なりと雖も元來が匹夫下郎と云ふ氣がありますから、とんとどうも是れに應じないのでございます、應じないと云つて其

儘に棄置く譯に相成りませぬから、茲に秀吉大いに怒つて四國を手入れといふことに成り、先づ浮田黄門秀家仙石權兵衛を大將として讃岐國より進ませました、權兵衛は讃岐から段々攻め込んで宇多津の聖道寺山の麓に於て大將株十三人の者を煮殺しました、其勢ひに驚いて四國の者が逃げるかと云ふと、茲に河東郡安原と云ふ所に安原甚太郎親行と云ふ者がありました、彼れは大いに權兵衛の致し方を憎んで『如何にどうも秀吉の命とは云ひながら仙石權兵衛と云ふ奴は吾が領地近くに乘込んで來て各々を捕へて首を刎ねると云ふのなら兎に角、是を煮殺すと云ふは實に慘酷極まつた奴、此所へ兵を進めなば一同死を賭して仙石に當るべし』と大いに相待つて居る、其内に權兵衛秀久安原へ乘込んで參り是れを攻めました、安原甚太郎親行は人數僅かに三百五十人でありますが必死に相成つて拒いだのみならず、甚太郎は血眼になつて權兵衛の行衛を探し是に槍を付けて激しく戰つて居る中小鬢の所に疵を附けました、けれども權兵衛も大勇無双、突込み來たる甚太郎の槍の柄を握つて手許に引くよと相見えたが、素より八人力といふ馬鹿力だから堪りませぬ、甚太郎は前に仰めり馬の鞍壺に餘つて大地に落ちた 權『汝先刻よりの致し方實以て天晴れな奴だ、この權兵衛秀久の身中へ聊かたりとも傷を負はせたるは譽むべき者能く切つた』と自分の小鬢を切られて喜んで居る 權『就ては其方は侍らしい働きをいたしたるに由つて煮殺すことだけは許してやる』と是れを生擒りにいたして逆さ磔刑に處しました、尤も甚太郎一人ではない、安原の家來八十餘人と云ふもの皆な磔刑に上げたのであります、其勢と云ふものは何んと形容致すべき言葉もなく、一方は蜂須賀彦右衛門、是は阿波國から攻め込みました、素より長曾我部元親に於ては偖ては彌々この所へ手入れをいたすと心得たから國境を嚴重にいたし大將分を是に配り、要害を守つて居りますから猥りに人數をこの國に入れる譯には相成りませぬ、尤も大濱の城内には長曾我部元親子息彌三郎信親老臣等一同日々評議をいたし、寄せ來る所の羽柴の大軍を如何にもして一泡吹かして退かしめんと謀略おろそかならず、去れば蜂須賀仙石浮田の面面も唯譯もなく戰さをドン〳〵進めると云ふことは相成りませぬ、で仙石權兵衛と蜂須賀彦右衛門よりいたして其の警戒嚴重なることを委しく秀吉に報告いたしました、由つて秀吉はこの由を聞いて大阪城内千疊敷の大廣間に於て諸將の面々を集め、今日四國征伐の儀に就て御評定申渡しに相成りました、モウ其頃には秀吉公は内大臣となり、部下の人々に於ても澤山の國守大名が居る、正面の所には秀吉公が二重臺を設けたることにして實に美麗なる其の有樣、一同席も相定まりました時に秀吉人々に向ひ申されけるは 秀『さて四國長曾我部元親は南海の端土佐の國に本城を構へて暴威を逞うし、上洛の儀を屢々申送ると雖も其使者に對し應答をなせしことなく、貢物を納めず王室を尊ばず、傍若無人の振舞なるに由つて先手の兵を出だし、一度敵の樣子を探りしに充分に楯籠るの樣子、此上此儘に棄て置けば王室の御威光に拘はる、依つて今一度使者を遣はし元親をして王室に參内せしめ尚貢物を納むることを申付け、また四國の内阿波伊豫の國を返上せしめ土佐讃岐の兩國を元親に遣はす、若し異議を申すべきか、異議を申さば兵を以て粉

韮微塵に打碎く由を申送らんと存ずるが汝等一同の心底は如何、何等か一同名策あらば此所に於て申すべし、尤も個樣なる評議は新古老若を論ずべきにあらず、一同の者如何に……」と仰せ出だされました、唯今までは斯樣な場合、御自分の御家來は別として諸國諸侯には可成鄭寧に御會釋があつたのですが、もう內大臣といふ高官に經昇つて居るので意氣天下を併呑して居りますから汝等と來た、一同は誰あつて其場に於て卽答いたす者もなく席上水を打ちたる如くであります、其時席の中央より進み出でたるは石田佐吉 三「恐れながら這般土佐の國大濱の城主長曾我部秦元親の許へ使者の役目は某しを以て仰せ附け下されたく願上げ奉ります」此時面々顏を見合つて居たが、人もなげなる振舞と思つてゐる、秀吉公は靜かに石田の方を御覽に相成り 秀「佐吉、其方へ然らば申付ける、けれどもこの使者は尋常一樣では不可ぬぞよ、元親頑冥不靈にして容易に其

意に應ずる者でない、次第に由つては軍の法を破りて使者を斬り捨つるやも計り知れず、能く〳〵注意いたして四國に渡らねば相成らんぞ」三「ハ、ッ、恐れながら上に王室の御威光を戴き君の嚴命を守つて長曾我部の許に參ります、四方に使ひして君命を恥しめずとか、首尾克く相勤め立歸りまする、必ず元親を說いて二ケ國を返上させ、尙貢を納めることを說きまする、何事も憚りながら佐吉にお任せ下され度い……」と言上をいたした、傍らに控へ居りました福島市松正則、未だ此の時分は市松と云つた時分で大勇無双の人でございますが夫れに進み 正「恐れながら申上げ奉ります、此度の使者は斯く申する福島市松に對し仰せ付け下されたく、石田の如き者罷り越し、若し四國に渡らんとして彼れがために押へられ如何なることに及ぶも知れず、其時には斯く申する正則武威を以て其暴を抑へ、次第に由つては長曾我部元親の首を提げて立歸るやう仕りまする、何卒某しに仰付け下されたく、三成如き佞辯邪智の者をお遣はしに相成れば却て敵に侮られます」と四邊憚らず申述べました。

（第十席） 正則三成論の事、並に四國征伐出陣の事

石田三成是れを聞いて 三「福島何んだつて……先刻から默つて承はれば佞辯邪智の曲者とは何事だ、而かも友達同士の閑談なら好いが吾が君の御前、斯く諸侯の相集まる席上に於て佞辯邪智とは何事でござる」正「ウム、佞辯邪智に相違ない、平生よりいたして其方の行ひを見ると、唯

もう君のお心にのみ叶へば好しと心得甚だしきことをいたす、吾々共の如きは戰場往來槍先を以て事をなすに汝のみは三寸不爛の舌を以て君を惑はす、此度の使者は其方には勤まるものか、恐れながら正則に仰付られたく……』三『默り居らう、正則、君前なれば愼み居るに圖に乘つて飽まで左樣なことを申すか、佞辯邪智とは能く云つた、此度の御使ひは大切なる所なり、汝の如き匹夫に首尾克う勤まるものではない』正則ジリ〳〵と席を進み 正『何が匹夫だ馬鹿野郎、何んでこの正則が匹夫だ、己れ其分には差し置かぬ』秀吉公是れを制して 秀『コレコレ兩名靜かにせい、汝等兩人斯く相爭ふも皆な是れ忠義の爲である、然し石田佐吉が第一に申出で正則は第二番に申出でた、由つて三成が先番であるから此度の使者は三成に申付ける、左樣心得ろ』とは秀吉の豪い所、正則は戰場に出で槍先の功名をさしたら天下無二であるが、斯う云ふ掛け合ひは不得手だと云ふことは御存じだ 正『アヽまた一番やられたか、どうも殘念だ』是れを見て面々平生ながら正則と云ふ男は遠慮のない男だ、少しも其の謹むと云ふ事がないと呆れて居りました、去れば三成は彌々四國へ渡るといふことになつた、時は天正十三年四月四日に大阪を出船をいたしまして讃岐の國に渡りました、手廻りの同勢といつた所がホンの少々ばかり、三成といふ人は毎度申上げた通り天下の三傑と云はれた程の人で秀吉家康三成といふ順序だ、秀吉公も實に其の才智には驚いてお居でなさる位ゐ、內部のことは三成に凡て任せると仰せられた程だ、此の度の使者は實に容易ならざる事と考へて居りますから三成も一生懸命、讃岐の國に着船いたすと高安と云ふ所

に細川源左衞門といふ者が居ります、砦を構へて嚴重に守つて居りますので、此の者に此度の京地より致して使者に罷り越したりと云ふことを知らせたから、細川源左衞門に於ては大きに驚き旅館に案內をいたさせ、デ土佐大濱の本城に對して早打ちを以て此の趣きを申入れると長曾我部元親は豫てもう使者の來ることを覺悟をいたして居つたから 元『偖ては思ふに違はず使者を送られたるか、早速案內いたせ』とあつて則ち源左衞門が諸將を案內者とさせて、大濱まで石田三成を連れて參りました、彼の道は山越しで却々難路だ、一生懸命に歩いても三日掛る、昔の人は斯んな所は平氣で歩いたもの、今ま思へば實に身體は强健であつたものです、偖て大濱の本城に着く、石田三成に於ては旅館に着いて服を改め、水色に白く定紋染め拔いたる紋服を着用なし、中啓を取り悠然として登城をなし使者の間に通りました、さう斯うする內に案內に從つて奧の廣間に對して罷り通る、然る所正面には御簾を下ろしまして、其內には足利將軍の血統義卿景御着座と覺えたり、其の左の方には長曾我部元親大紋素袍にて控へられ、續いて子息彌三郎盛親に於ても同じく大紋を着し、何れも中啓を持つて控へて居ります、夫れより左右に下つて控へられたるは吉田備中守、多氣藏之助、江島豐後守、吉田四郎左衞門、大村孫左衞門、金子傳兵衞等の重立ちたる老臣を初めとして大將分百數十名、次に侍大將等數百人綺羅星の如くに控へて居ります、兎も角も阿波、土佐、讃岐、伊豫四ケ國の大守、宏大な勢ひでございます、樣子を見ながら恐るゝ氣色もなく石田三成座の中央に進む、すると一人が、『羽柴秀吉の使者石田三成罷り出でま

してござる』と披露をいたす途端に向ふの御簾がツーと捲き上がりました、未だ御幼年とは云ひながら足利義景公泰然として御着座あらせらる御樣子は自ら頭が下がります、時に長曾我部元親眼下に三成の方を見られて　元『石田三成とやら、此度遙々京都より罷り越したる使者の口上を述べられよ』佐吉三成此の時謹んで一禮を施し、良あつて頭を擡げ　三『先づ當國の主人長曾我部元親殿には、何時も麗はしきを拜し大慶至極に存じ奉る、此度某し內大臣羽柴秀吉の命を受けて當國に罷り下りしは餘の儀には候はず、當國は誠に南海の端とも申すべき一孤島なりと雖も然かも此土は王土なり此民は王民なり汝能く武を修め文を學び民を愛し國を富ます誠に以て感ずる所なれど、曾て天皇に對し奉りて天機を伺ひ奉ることもなく、また今日に至るまで貢を納むることをなさゞるは如何なる譯なるや、察するに四國は海を隔てし島にして長曾我部殿爰に王たるの思ひをなすともなんぞ其押領を許さんや凡そ普天の下率土の濱何れか王土にあらざるはなし、去れば王室に於かせられても逆鱗實に甚だしく由つて屢々當國に使者を下すと雖も終に其儀に應せず、秀吉今日は內大臣の大官を拜し奉り天下の政事を預り禁裏守護征夷將軍に等しき大任を受けたる以上、其の秀吉の命に背く者は即ち朝廷に敵對し奉るものなり、唯今より飜然非行を顧みて上洛なし貢を奉り尙ほ四ケ國の內伊豫阿波の二國を朝廷に返納し土佐讃岐の二ケ國を元親の所領と定めなば即ち長曾我部家は二ケ國に安泰なるべし、去る上は秀吉よしなに朝廷に繕ひ參らするなれど、若し此儀承諾なく以前の如く我を張り威を逞ふするに於ては當家は風前の燈火

の如し、この儀能く〳〵……』三成言葉未だ切れざるに元親烈火の如くに怒り　元『默り居らう佐吉、唯今承はれば將軍の存意なりと云ひしが、其將軍とは誰なるや』　三『去ればなり、內大臣羽柴筑前守こそ目下將軍同樣の禁裏守護の大任を拜し居るもの』元『ハ、、、事も愚や其の云ひ分、秀吉は尾張の國中村より出でたる數にも足らぬ土民の忰、信長の配下に付て草履を取り、幸ひにして今日は天顏に咫尺することを得る身上とは相成つたり、未だ改めて征夷の稱を賜はりし者にあらず、是に御座遊ばさるゝ足利義景公こそ世々征夷大將軍たる正統の御方なり、將軍職他にあるべからず、殊に秀吉は先祖代々吾が手にありし四ケ國の內伊豫阿波の二國を奪はんとするは何事なるや、言葉を巧んで恐れを抱かしめ二ケ國を體好く奪はんとする下心、吾が家は古より武の家たり、上方勢の百萬二百萬押寄するも敢て驚くものならず、攻むるなら攻めよ、勝手にいたせと申したと立歸つて猿面郎秀吉に申せ』と威猛高に相成つて元親が述べ立てました、左右に居並ぶ面々も主君の命だに下らば飛び掛つて三成を踏み潰さんと肩肱を張り眼を怒らして控へたり、並大抵の者ならば驚くべきでありますが其所は石田佐吉の恐ろしい所、莞爾と笑つて　三『是はしたり長曾我部殿、某しは四國の大將長曾我部元親殿は智謀勝れし大將と聞きたるが聽くと看るとは大いな相違、左ばかりの道理の分らざりし大將なりしか、そも足利のお家は今日に至るも其儘將軍職の地位に居らるゝものにはこれなく、當義景卿は周防の國に下り給へる義冬卿の長子義親卿の御子なり、足利は十三代にして將軍職は朝廷に戻り唯其血統が殘り居ると云ふまでのみ、苟

くも吾が主人羽柴筑前守秀吉は應仁以來天下麻の如く亂れ奸賊蜂の如く英雄鷹の如く起りたるを悉く討ち平げ、上は一天萬乘の君の宸襟を安んじ奉り下萬民の塗炭の苦しみを救ひ、聖旨に副ひ奉りたればこそ今日は正二位内大臣禁裏守護職とは成らせ給ふ、王室より見る時は義景は無位無官一箇の野人に異らず、元親殿の所謂足利將軍義景とは何所より許され給ひたるや、譬ひ秀吉公未だ將軍と任官なくも既に内大臣の大官にあれば、其命に從はざるべからず、然るを元親殿には無位無官の田夫野人の義景を輔佐して朝廷に對し奉りて弓を曳かんなぞとは、イヤ驚き入つたる思召でござる」と憚りなく大言壯語一座唯啞然といたして居りました、星の如く居流れたる多くの家來の中にも事に耐え性なき金子傳兵衛偖てこそこの一言聞棄てならず、一層のこと是なる石田三成を搦み殺して呉れんと、其外二三の人々身仕

度をいたしたることにして其儘に進まんとなしたる時に長曾我部信親大音を擧げ『彌彌』控へよ各各、唐も日本も昔しより使者を切りたる例しはなし』傳『去れば』と申して餘りといへば吾君に對して不屈至極の致し方、だに因つて彼の首を引拔き軍陣の血祭りにいたさんと存ずる」此時彌三郎信親一同の者を押靜めて彌『石田三成と申すか流石は羽柴秀吉の命に由つて當國に使ひする者なり、天晴なる其の申分、なれども今日と相成りては猥りに秀吉に膝を折ること弓矢の手前相成らず、また譬へ如何やうのことや出づると雖も當國には當國の考へあり、父元親を始めとして當地に止まり素より合戰をなすの心得なり、汝立歸つて秀吉

に其次第を告げ兵力を以て四國に渡るべし、弓矢を以て應戰なす勝負は時の運にあり、また家來一同の者使者に對して無禮をなすは當國に人物なきことを上方に知らせるも同樣、必ず使者に對して無禮をいたしては相成らぬ、この石田三成に對して盃の用意をいたして然るべし」と若年ながら彌三郎信親の言葉、其所で元親も同意いたし改めて酒肴の用意をいたし是れに差出だす、石田佐吉三成は心中大いに感じた　三「この彌三郎といふ者は却々豪い男だ、某しに無禮をいたさせぬ所は驚き入る」と思つて居る、大抵の者なら此酒の中に毒でも這入つて居るかと思つて、なかなか毒味をいたさぬ内に呑まないが佐吉三成は大膽なる男でありますから一向頓着なく呑んで居る、さう斯うする内に三成は盃を納めて　三「偖て此度は勢ひに乘じて止を得ず御無禮を申上げました所却て御叱りも之無く御手篤き御饗應に預り辱けなく存じまする、この次は大方金鼓の音の中にて御目通り仕るべく……」彌三郎これを承はり　彌「如何にも道理なり、立歸りて秀吉に能く申せよ、何時なりとも軍馬の用意をいたして相待つ程に決て假借のあるべからず、軍備出來の上は何時にても攻め來るやうに……」と少しも惡びれず叮嚀に挨拶を致して、また彌三郎家來に申付けて　彌「是より上方の使者石田佐吉三成を路次過ちなきやう嚴重に送り屆けるやうにいたせ」と命じましたから長曾我部の家來共數十名三成を濱邊まで送りいだす、三成は其者等と相別れ愈々長曾我部と手切れと定まり、今度は高知に船を廻したることにて是れに打乘り浦戸といふ所を過ぎて紀淡梅峽から大阪へ引返して參りました、即日大阪城に登城に及び、秀吉公に斯く

と申上げましたる時に、秀吉公是れを聞し召したることにて　秀「小賢しき長曾我部の申條かな、然らば速かに四國征伐をいたして吳れん」と早速參内を遂げ四國征伐の儀を奏聞に及びましたに由つて直ちに勅許が下りました、秀吉大いに喜び冥に大阪城内にて大評定の上手筈既に定まりたれば忽ち出軍いたすことに相成りました、時は天正十三年四月十日秀吉自ら泉州堺まで御出張に成り妙國寺を以て本陣と定め總軍七萬餘人加藤主計頭清正、小早川左衞門尉隆景の一手一萬二千餘人は伊豫國和氣郡三津ケ浦から上陸を致しました、尤も前方浮田中納言秀家、黑田官兵衞孝高仙石權兵衞秀久の面々がモウ四國に押渡つて居ります、一說には浮田秀家は四國のお手切れの後に押渡つたとありますがどうも色々の書物を調べて見まするに秀家は仙石權兵衞、黑田官兵衞等と共に前に渡つて居つた方が實說に近いやうでございます、秀吉のとで奇才縱橫のお方でげすから必ず長曾我部が一日手切れを申出るに相違ないといふことは知つて居るに由つて先づ手切れに成らない内に一手を攻込まして置いたので斯うして置けば敵が四國の海邊を拒ぐといふことに就ても餘程仕事がやり憎いのでありまして、偖て四國征伐の講談も成るたけ前後は略して面白い所のみを申上げます、といふのは既に長講十六編加藤清正の方で申上げてありますし、重復になつてはお慰みがなう御座いますから此處は略して申上ます、加藤の方で申上げぬ所は拾つて述べることに致しました、この戰ひは天正十三年三月より合戰に相成りましたが前にも述べました如く長曾我部は阿波、伊豫、讃岐、土佐四ケ國の太守にして尤も元親と仰せらるゝ御方よりは嫡男の彌

三郎信親の方が人望がございました、殊に大勇無双常に二十二貫の鐵棒を振ひます位の剛勇の御方にて、初め浮田秀家卿渡海をいたし續いて羽柴家の勇士の面々追々四國に渡つて參りますもの八萬餘人、けれ共是れを堪へて戰さをして居たのは全く彌三郎信親の軍配其宜しきを得たるがためで、數々戰ひもございましたが其邊も大略いたします、さて時は天正十三年五月十二日といふ日に相成りますると先鋒の大將加藤主計頭清正の陣に對して使ひ旗が立つて參ります者がある何者なるかと清正これを見てありける內十四五名の者を召連れ馬上の侍馬を下つた、此時に當り加藤の家來森本儀太夫進み出でまして『儀『何等の用事あつてお出でありしか』と尋ねまするとの者『去れば長曾我部信親の命に由つて主計頭清正殿に御面會の上一言申上げたきことあつて罷り越しました、拙者は熊谷四郎左衞門と申す者……』面々是れを聞いて驚いた、是れは四國に有名の人であります、早速に清正にこの趣きを告げますと清正是れを聞いて 清『左樣か粗略なきやうに是へ通せ』とありました、去ればにや陣中へ案內をいたしまする、同道いたして參りましたものを差置きましたることにて四郎左衞門其日の扮裝は紺糸の腹卷を着け兜は被らず綾を疊んで鉢卷をいたして居ります、猩々緋に干羽鶴の高縫なしたる陣羽織を一着なし白檀磨きの小手臑當て、勿論昔しの五月十二日といへば燃えるが如き炎暑の盛り、けれ共軍人は仕方がない、具足を着用いたして靜々と夫れに參る、正面に清正床几に掛り加藤の家來木村又藏、井上大九郎、飯田角兵衞、森本儀太夫を初めとしてドウ〳〵と居流れて居ります、時に合備へをいたして居りま

したのが小早川左衞門隆景であります、四郎左衞門清正の樣子を見て一禮をいたし 四『某しはお取次へ對し唯今申入れたが熊谷四郎左衞門と申する者、今日信親の命に由つて是れに罷り越した る其の用件は餘の儀には候はず、先刻よりいたして數々合戰をいたし大きに敵味方とも兵を失ひ彈藥を損じ糧を棄て候も、誠に以て主計殿の軍法、殊更勇氣四國を壓し、此上ともに無益の人命を絕たんより明日正四つ時三坂峠に於て主人信親主計頭殿と一騎打ちの勝負をいたさんといふことを願はんがために使ひとして某し罷り越した次第でござる、願くは御聞濟みあつて明日三坂峠に於て一騎打ちの勝負をなさるため御出張下さらば辱けなく存じ奉る』と申入れたる時に加藤の郎黨何れも是れを聞いて、南無三一大事なり御主人清正公何卒御承諾なきやうにと互ひに顏を見合はして居りました、清正は莞爾打笑ひましたることにて 清『これは〳〵長曾我部彌三郎殿は當國の主人元親公の御子息にして秦野川勝の後裔、實に堂々たるお家柄なり、此度は內大臣秀吉の命に由つて當地に發向いたすと雖も互ひに宿意あつて致すにあらず、君命を守り殊に朝廷よりいたして四國征伐を仰出だされしは四國の大領主でありながら一度として參內もせず、由つて一天萬乘の君逆鱗の餘り秀吉をしてこれを討たしむ、吾々共主命に由つて斯く數々戰うと雖も彌三郎殿の軍法却々以て清正の及ぶ所にあらず、然るに今日唯今清正を人ケ間敷く恩召され、多くの人命を失はんより明日は信親殿一騎打を望むとの仰せ清正身に取りて何より滿足に存ずる、明日正四つ刻限を違へず必ず罷り出で不肖には候へ共御相手を仕る、由つて御歸陣ありなば右の

次第彌三郎殿へ宜しく御披露に預りたい』と立派言に切つた、四郎左衞門大いに喜び　四『如何なる御返答あるかと心得しに速かに御承諾下し置かれ辱けなく存じ奉る、必ず正四つ迄に三坂峠に御出陣を待上げまする』と一禮に及びまする。

（第十一席）清正長曾我部信親と一騎討の事、並に片桐且元四國へ使者の事

清正の郎等は何れも顏を見合せて居ります、清正は莞爾と笑つて清『承知致した其時刻には相違なく罷出るで御座らう』四『難有き仕合せ尤も明日は休戰をいたし信親自身に勝負をいたすことなれば見物の儀はお許し下し置かれたい』清『武士の龜鑑とも相成るべき明日の一騎打ち清正とても其の如く然しながら雙方共に卑怯の振舞なく相互ひに大小の神祇八百萬神に誓ひを立て戰ひをいたする上は一騎打ちの勝負必ず御見物下し置かれたい』と爰に堅く約束をなし、御暇を告げまして彌三郎の陣に對し引取りまする、跡に殘りましたる木村又藏、井上大九郎、加藤清兵衞、加藤與左衞門、飯田角兵衞等の人々色を變へたることにして　角『御前に對し申し上げます、長曾我部彌三郎如何なる所存あつて右樣の儀を申越したるものなるか、また吾が君が安々これを御承諾相成りしは如何なる次第なるか、萬一のと有之り候節は味方一同の勇氣衰へ容易ならざることに相成ります、明日の一騎打ちはどうか是れは御斷り相成りましたる方宜しく……』清正は何んにも

云はず唯微笑を漏らしてお出でなさる。時に傍らに控へて居りました小早川隆景　隆『アイヤ、主計頭殿へ申上げる、明日こそは實に前代未聞の晴れの業必ずやお心を靜め充分の勝負いたされて然るべし、實に侍の手本とも相成るべきもの相手は四國に名にし負ふ長曾我部信親、また此方は天下名代の主計頭殿、此上なき所の一騎打ちと心得る、隆景も手勢を率ゐて拜見いたすでござらう』清『夫れは千萬辱けない、不肖には候へ共敵方より申越されたる此度の一騎打ち、斯く成る上は快く用意をなして出陣いたすでござらう』是れを聞いて一同の臣等其の思召の大いな

るを知つて此上とともに御斷り相成るやうとは申しませぬ、其夜一ト夜は家臣等一同安き心もなく明けました、明くれば天正十三年五月十三日、幸ひにして一天拭ふが如くなり、尤も燃るが如き熱き日にて主計頭の同勢彌三郎信親の同勢に於ても何れも今日の一騎打ちの勝負を見物いたしまするために出陣いたしました、當日に於ては必ず卑怯なる振舞是れなきやう堅く約束をいたし、眞ッ先なる方には白地に蛇の目桔梗の紋を現はしたる旗五流れを飜へしたることにして南無妙法蓮華經と書いた旗は日永上人の御筆にて清正は大法華經の信者でございます、朱の藤の馬章を押し立て、繰出だしたる清正其日の扮裝を見てあれば、紺糸天人胴の鎧を着し同じ毛糸五枚錣金三尺の立烏帽子形にして法華經二十八卷を兜の八幡座に修め、備前大兼光の鍛へたる赤銅作りの陣太刀を背負ひ、馬は名にし負ふ帝釋栗毛の駿足に金覆輪の鞍置いたることにして、紅白三段の厚房に紅白二段の尻貝掛け、面繋、鞅は金唐草に何れも悉く蛇の目桔梗の紋を現はし、紅白鼠染分けの手綱を腰に挾み腰の捻りにて馬を自由自在に乘廻すは馬術名譽の清正、彼の兼光が鍛へたる臥龍丸と名稱けたる二間三尺青貝柄の蛭卷干段片鎌の槍を提げ悠々として進出でましたは、彼の蜀の燕人張飛が長盤橋に百萬の敵を睨み返したるが如き慨があります、此片鎌の槍は問題に毎度致しますがどうも清正は片鎌でないとうつりが惡うございます、清正の馬側に控へたる者は加藤清兵衞、加藤與左衞門、小代下總、飯田角兵衞、鵤平次、齋藤立本、赤星太郎兵衞、森本儀太夫木村又藏の面々なり、此時長曾我部信親に於ても塞を立出で此の三坂峠の半腹の所まで立出でま

した、此時に四國の武者に於ても今日の一騎打は容易ならぬことゝ心得まして有名なる長曾我部の臣等堂々と其場に居流れて居ります、彌三郎信親其日の扮裝は赤糸の鎧片草摺を白糸を以て縅したる大鎧、同じ毛糸五枚錣の金龍頭の前立て打つたる兜を猪首に着なし、黄金作りの陣太刀を脊負ひ、土佐駒の駿足、浪に千鳥の高蒔繪なしたる伊達鞍置きて打跨がり重量二十二貫ありまする所の鐵棒、先きに百八つの疣が打つてあります、悠々として是れを提げ立出でたる所の姿といふものは實に大したもの、有繋四國に名高き長曾我部元親の御子息と云はずして點頭かれました、其内に長曾我部の方より使者一人、清正の方より使者一人、是れは陣中の使ひで打合せをいたしました、此時清正の使者は甲『昨日の御約束に由つて是れに今日罷越しました、御用意能くば早々に勝負を仕らん……』とのことで『イヤ御約束の如く今日是れへ御出陣なし下されて辱ない、お仕度能くばイザ尋常に勝負をいたさん』と互ひに申入れました、使ひの者立歸り双方の大將に申入れる、然る所各々それを聞いて偖ても時こそ來つたれ、今日の勝負如何ならん』と心得居りまする内に長曾我部信親に於ては彼の鐵棒を提げて夫れへ參る、清正に於ては彼の二間三尺臥龍丸の名槍を以て夫れに出でる、雙方互ひに間近に相成つたる時に先づ清正より聲を掛け、

『如何に彌三郎殿不肖清正に昨日使者を以て委細申送られ今日この所へ出陣をいたしたり、サ此上からは互ひに運を天に任せて勝負を仕らん』彌三郎莞爾笑ひ『有繋は加藤主計頭清正殿能うこそ御出陣下されたり、イザ此上は尋常に勝負を致さん』清『イザ』彌『イザ……』といふ間

に兩陣共に吹き出だしたる貝、鉦、太鼓の音、是は勇氣を引立てるがためでございます、さう斯うする間に清正に於ては彼の二間三尺の槍を持つて夫れに立向ひまする、彌三郎は二十二貫目の鐵棒を以てブーン〳〵と風を切つて打込んで參ります、上方勢これを見て、偖てこそ彌々彌三郎の彼の鐵の棒に當らば清正の身體は粉なの如くに相成らんと胸を躍らして居る、また四國侍は清正が持つたる二間三尺の青貝柄の槍にて突かれたる時は身體に芋刺しに相成るべし、と驚いて居る內に兩人互に馬を掛け違ひたることにして繰込み打込んで參ります、其の有樣といふものは千變萬化、電光石火の如く火を放ちまするの光景、何んともはや口舌に盡せませぬ、折しも清正の乘つたる馬は何者にか驚きけん、タジ〳〵〳〵と跡に退がる、清正家來一同は彌々御主君の危急と心得ました、信親は此處なんめりと一聲焦つて打込んだる鐵棒、アハヤ清正の腦天微塵に打碎けたかと思ふ時に、如何なしたることとなるか、清正の陣中ズドンと一發の鐵砲長曾我部彌三郎の鐵棒を丸は掠つたることにして西の方へ飛去りたり、アッと驚き彌三郎跡に飛下る、清正に於ても馬を跡に乘退がる此時に信親の家來はスワヤとばかり立上つて『卑怯未練なり主計頭清正偖ては一騎打ちを承諾き主人を是へ引出し砲殺をなさんとの心底なるか、主計頭は上方に於て天晴れなる侍と承はりしが見ると聞くとは大きな相違、笑へや〳〵』ドーッと四國侍手を拍つたることにして打笑ひました、彌三郎も此時大音を揚げ 彌『卑怯未練なり主計頭の振舞、汝如きものを相手にいたして何んとせん、ア、ー得物の汚れである』と忽ちの間に馬を乘返して本陣差し

て沸然と立戻つたり、後ろ姿を見送つて唯呆然たる清正、口惜涙を兩眼に浮べて控へたり、所へ飯田角兵衞進み出まして 角『先づ〳〵御引返しあつて然るべし』と申入れると雖も更に肯入れる樣子もなく 清『イヤ〳〵唯今清正に恥辱を與へたるは何者なるか』とお尋ねがありました、其時遙か後ろの方より立出でたるは年齡十八九歲の若者崩黃匂ひの鎧を着し兜は被らず綾を疊んで鉢卷をなし、七寶透かしの小手脛當をなし、武者草鞋を踏占め夫れに罷り出でて御前に兩手を突へました、清正公がジロリと御覽に成ると近藤久馬と申しまするお旗本の一人であります、清正公御眼を怒らし 清『久馬汝なるか唯今一騎打の折柄發砲いたしたるは』久『恐入り奉りますが私が發砲いたしましてござる』清『無禮者奴ッ、なぜ彼のやうな白痴たことをいたした」

久『既に御主君危しと見奉りまして唯君を助け奉りたき心底より前後の考へもなく發砲をいたしました』清『偖て〳〵困つた奴だ、情けなきことをいたして呉れた哩、假令清正此場に落命いたせばとて據ろなきこと、其がために軍中にて彼程に申渡したではないか、彌三郎信親は四國に名立る名將なり、殊に卑怯の振舞なすべき人でない、此度の一騎打は清正身に取つて實に譽れと存ずる、然るに何故あつて汝發砲をいたしたるぞ、譬へ清正此場に及んで戰死いたすと雖も天下晴れての今日の一騎打ち、汝が思ひも寄らざる發砲に見よや、四國の山猿共に清正は笑はれて一言半句の返す言葉もない、吾れ今日程赤面をいたしたること曾てなし、吾れ馬を引戻せしは是れ故あつてのことなり、彼は二十二貫目の鐵棒を振り居れば、如何に剛勇なりと雖も長く彼の棒を振り居られるものにあらず、終に勞れを生じたる所を其時にこそ飛掛つて組打勝負をいたし信親を生捕らんと心得しなり、然るに汝唯若年にして其志しを知らず猥りに發砲いたしたる爲に清正の面目を汚し武道の瑕瑾を來たすは此上もなき不忠不義なり』是れを聞いて一同の者は驚いた、偖てはさうであつたかと自分等の一時案じたる不明の罪を心密かに恥じて居る者もある、久馬は唯頭を下げて居ります 清『ハヤ此上は信親を討取らんこと容易ならず、實に今日の振舞以ての外なり』といつてお怒りになつたが又熟々御考へに成つて見るに彼は幼年より吾が手許にあればこそ吾が危きを見て發砲をもなしたるに相違ない、其志しを味うて見れば無碍にも久馬を責める譯には行かないと思ひ清正は悄々として、陣中に引返さんと馬の頭を立直したる其時に近藤久

馬 久『御主君暫く御待ち下し置かれたい、某若年にして前後の考へもなく唯御主人危きと考へ右樣の不屆きを働きたる段恐れ入り奉ります、願くば茲に於て御手打になし下し置かれ此首を以て長曾我部殿へ申入れ、再び一騎打ちをなし下し置かるゝやう願ひ上げ奉りまする』清『ウム、不憫とは思へども此儘に差置きなば愈々上方侍は卑怯なり、主計頭清正は侍の道を知らざる者と四國侍に笑はれんか、然らば久馬汝は切腹をいたせ、首は必ず敵に送つて今日の事情を申送らなければ相成らぬ、誰ぞある久馬の介錯をいたせ』ハッと云つたが誰も出る人がない、久馬は主人を助けやうと思つたから發砲をしたのだと思ふから、誰も介錯に出てがない、といふのは人情だ、然る所森本儀太夫夫れに罷り出で 儀『左樣でござらば某し介錯をいたして遣はす、久馬尋常に生害をいたせ』久『森本氏、御介錯下し置かるゝ段辱けなう存する』といつて久馬は忽ちの内に鎧を脱ぎ捨てたることにして、若年ながら勇ましく切腹をいたしました、其首を取りましたる森本儀太夫、主人清正に御覽に入れたる時に清正は久馬の首を見て胸一杯にお成り遊ばした 清『彼は忠義の爲に落命いたしたることなり、誰ぞある此首を持つて彌三郎信親の陣中に至り今日の事を申入れて尚後日のことを約束いたして再び一騎打ちの儀を取計らうやうに』と云つたが是れも難かしい使者だから私が行つて參りませうといふ者がない、サアさう成ると森本儀太夫 儀『左樣でござらば某し介錯をいたしたる事故長曾我部の陣中に參つて彌三郎殿に面會を遂げ今日のことを申入れ再び一騎打ちの儀を申入れて見ませう』と爰に於て四五の家來を召連れて使ひ旗を立

つたることにして信親の陣中を差して進み、右の次第を申入れた、もう四國勢は　甲『何しに來たかどうせ加藤の家來に碌なものはない、是れは御面會の儀御斷りあつて然るべきでござる』と云ふと　信『イヤ〳〵左にあらず、吾れ今日までの事を聞くに主計頭といふ人は彼のやうなる卑怯なことを致す者にあらず、何か是れには仔細のあること、儀太夫と云ふ者を是へ通せ』とあります、家來が何んと云つても鶴の一聲　據ろございませんから儀太夫を本陣に案内をした、其時に儀太夫が今日の次第を逐一述べ　儀『偖て其がために主人清正　盡く赤面をいたし久馬を斯くの如く首討つて持參をいたしました、尙重ねて一騎打ちの勝負のお約束をいたして參れとのことでござる』森本が近藤久馬の首を差出したる時に彌三郎信親是れを見て　信『ア、ー何うも清正には良い家來がある、主人の危きを見て發砲をいたして其がために首刎ねられたか、首を刎ねられたのではあるまい、自らが詫のために切腹を致したのであらう、是必ずや清正殿の與へる所でない、左樣な卑劣な事をなさる主計頭でないことは彌三郎信親、遠き土佐の國に在りと雖も聞き及んで居る、然らば改めて一騎打の儀を申入れるでござらう、なれども其の期日を契約いたす事は私ならざることなれば、改めて協議の上にて其日を相定めて御返答をいたすでござらう、此儀御披露に預りたい』と森本儀太夫に對して申入れた、儀太夫大きに喜んで使者の任を完ういたして立歸りました、時に信親夫なる近藤久馬の首級に對して御手許にありましたる所の黃金作りの短刀を下し置かれました、誠にどうも敵將とは云ひながら信親の致し方感ずるに餘りあることにて森本儀太

夫は涙を流して右短刀を申受けて立歸り、斯と清正に告げたる時に清正彌々彌三郎の志を感じ傍らにあつたる小早川隆景其他の大將方も只管其の仁慈に感じ入りました、然る所此時はモウ上方勢四國の津々浦々より大軍上陸いたし接戰夜を日に繼ぎ四方より軍狀を信親の許に通じて參ります、信親また、是れを一々父元親に諮つて、種々軍略を其の方面に授けなければ成らぬ、夫れや是れやで信親は加藤主計頭との一騎打ちは終其儘と相成て居ります、然るに秀吉の武運彌々盛んに成るの時節か、將また長曾我部家の衰運の時機到來いたしたるか、四方の戰さは次第々々に上方の手が勝利を占めて四國勢は段々と追詰められて、一つ所に固まつて來ると云ふ譯、去れど長曾我部宮內少輔元親といふお人は今日に相成つて幾ら戰さが破れても味方が利を失つても、自ら休戰をする抔といふことは云はない、されば胸中には天運といふことは心得て居りまするから所詮モウ長く戰ひをいたすことは出來ないといふお見込みはあるが、大將の勇氣が衰へると一同の兵士に於ても敵に降る者が出來る、由

つて飽迄勇氣を逞しくいたして唯此上は土佐の國一國に楯籠つて小濱高知の兩城を守つて譬へ秀吉親ら大將を率ゐて乘り込み來ると雖も、此所において一戰をなして蹴破らんと心得、充分に其用意をいたして居る、然るところへ内大臣秀吉より上使なりと云つて、乘り込んで來た者がある、城内においては秀吉より如何なる儀を申來りしかと思ふ時に、彌三郎信親父の御前に進み出でたることにして『偖てお父上唯今當國へ使者として罷り越したる者は片桐且元と申する者に て彼は市正と申し噂さに聞えたる智者、殊に今日使ひに參りし其の樣子を承はれば軍服を着せず一人の兵士を召連れず、唯供の者兩三名を召連れて優美の姿にて罷り越したりとのこと、去れば當家に於ても戰さ立てをして其使者に面會いたする時は何にか使者を恐るに似たり、當家に於ても成る丈け軍器を隱し常の如くにして御對面あつて然るべきかと存ずる』元『大きに道理のこと早速に其の用意をいたせ』と爰に弓鐵砲を連ねましたる所へは一面に幕を張り、常の如くにいたして城門を開き、入り來つたる片桐市正且元、越後縮みの羅物を着用いたして、社祢姿大刀を手に提げて小刀を腰に帶びて居ります、僅かに供の者三人を召連れて靜かに入り來りましたが、素より供の者は玄關より上がるを許されず且元一人悠々と押上がる、夫れへ長曾我部御親子お出迎ひに成る、是れは且元を大切に思ふのではありませぬ、天子の勅命に依つて四國征伐をいたす、内大臣秀吉の使者、其の内大臣といふ官位に對して出迎ひをいたしたので、偖て丁寧に案内をいたし且元既に大廣間に着座をいたす、此時長曾我部の長臣を始めとして如何なる儀を秀吉申送り

たるかと片唾を呑んで控へて居りました。

（第十二席）長曾我部元親降參の事、並に秀吉關白となり豐臣の姓を賜はる事

此時長曾我部親子は懇ろに會釋をなし元『炎暑の砌り片桐殿には羽柴秀吉殿名代として當城に御越しに相成りたるは如何なる用件あつてのことなるか、其所に於て述べられよ』且元謹んで頭を下げ且『御丁寧なる御會釋を賜り且元の面目此上も候はず、偖て不肖某の參りたるは餘の儀にも候はず、上方勢今日まで大軍を率て當地に攻入り不幸開戰を見ること幾旬日、是より先き數々當國に使節を送り一天萬乘の君を大切に保護なし奉り、尚貢を送ることを申入れたるに御當家に於ては其の使節に對して暴言を吐き玉ひ、中には其儘にして領地に入れず追返したり、由て内大臣秀吉右の次第を奏聞に及びたる所主上には逆鱗ましまし〳〵四國征伐の勅命を下し玉ひ、其命に背き奉る時は即ち、違勅の罪を免れ難く、由つて兵を出だし既に阿波、讃岐、伊豫の三ケ國に於ては最早手入れに相成り候、此上ともに父子當國を守り籠城をなすは一方より申し候へば武門の譽れ、武士の本分に候へ共兵士を失ひ良民に塗炭の苦しみを與ふるは仁者の執るべき途にはあらず、古へより邪の正に勝ち候例も之無く此上長く長曾我部殿父子戰ひを挑むに於ては父子は此所に滅亡の外之無く、夫よりは茲に志しを飜へし玉ひ、一度御降服あつて然るべし、内大臣秀吉に

對し降服いたすとあれば兎も角一天萬乘の君に降服いたすとあれば何をか恥入るとの候ふべき、サ、御降服なさるとあれば、不肖且元誓つて主人秀吉に申入れ、内府秀吉より奏聞を遂げ土佐の國一ケ國は長く長曾我部のものたらんことを御約定いたす、また足利鶴丸君は長く當家に養ひ奉ることを許されなば、足利家への義理も相立つべし、然らば朝臣の列に入りて俯仰天地に愧る所なく驚く所なく兵士を失はず領民を苦しめず誠に四國は泰平なるべし、茲に道理を味ひ玉ひ、宜しく御返答に預りたい、然し御即答のならざることは且元能く知れり、暫く此所にあつて休息いたさん、願くば御回答の寸刻も迅からんこと祈り候』と辯舌懸河の流るゝ如く有繋は秀吉の鑑識に由つて遣はしたる程の片桐市正、恐るゝ所ろもなく滔々と述べました、元親は頭を擡げ　元『秀吉の口上の趣き委細相分つた、なれども是容易ならぬことなり、一時の間猶豫をいたせ協議の上にて返答を致さん、また唯今の言葉の内に秀吉親ら大軍を以て征伐云々とある吾は秀吉の大軍を恐るゝ者にあらず、秀吉自身采配を取るとも是を恐るゝものにあらず、唯一天萬乘の君の思召を思ひ奉るが爲、領民を思ふが爲め、又兵士を思ふがため休戰の儀を望む所である』と云ふのは嚇かされても降參はしない、降服はしないが天子からの命令なら降參をしやうと云ふ事は其内に含んで居る、彌三郎信親進み出でたることにして　彌『且元殿には暫く御休息ありたし……使者の待遇をいたすやうに……』と御家來に仰付けられ、夫より此の所を引取る、サア、爰で奥の廣間に老臣方を集めて大評定、評議はなか〳〵一決いたしませぬ、其時に彌三郎信親進み出でたるこ

とにて　彌『父上某し今日に至り決して勇氣撓しにあらず且元の一言誠に尤もに存ずる、足利鶴丸君を御養育申上げ尚土佐一國は下し玉はるとのこと、素より先祖秦野川勝は天子に忠勤を盡し奉り其が爲に頂戴をいたしたるは土佐の國なり、其の土佐國を保つことを得れば是れに越したる幸ひはあるべからず、兎に角是れは降參あつて然るべし』と申入れる、一同の者は實に信親の事理明白なるを感じ二十二貫目の鐵棒を振つて出でたる時に加藤主計頭すら驚く位ゐ、また謀略を以て敵を破るといふことになれば張良孔明を欺く位ゐ、尚兵を愛し、民を撫育する仁德に至りましては堯舜の如く、實にどうも智仁勇三德兼備の大將といふのは彌三郎信親のこと、去れば一同の面々も其説に服して天子に降服をいたすといふ説に賛同をいたしました、去れば議論一決いたしましたに由つて改めて長曾我部元親及び彌三郎信親、其他老臣等元の席に立戻りまして、片桐市正且元に面會　元『偖て大きに御

待遠でござつた、唯今老臣等と一同協議の末、如何にも御身の申さるゝ所道理至極なるに由つて降參を仕ることにいたしたり、此段内大臣殿に宜しく……」とある、且元大きに喜び　且『某しの面目此上もあるべからず委細承知仕りました』と爰で充分の御饗應に預つて萬端書類の交換をいたし、種々の頂戴物をいたして、且元は大阪に立歸りました、尤も此間に種々入込んだことあるこざいますが是等は略して伺つて置きます、偖て委細のことを羽柴秀吉公に言上いたしました時に内大臣秀吉御喜び遊ばすこと一方ならず、素より秀吉の考へでは、四國の名家長曾我部を全然倒して跡方もなく致さうといふのではない、即ち天下の爲に膺懲しようと云ふ思召しに過ぎないのである、デ兵は出しましたが、今日までの樣子を見ると長曾我部の勇士追々に戰死を遂げる中にも子息長曾我部信親の働きは花も實もある若侍士、誠に惜むべきものと思ひ名智の秀吉でございますから是れなる信親を助けたく、長曾我部の家をも殘して遣はしたく片桐且元をお遣はしに相成りましたる所向ふに於ても早速承諾に相成り爰に和談が出來ることに相成りました、さうなると共に兵を差置く譯にも相成りませぬ、由つて一度兵を引揚げることに成りまする、尤も後に至りまして、この時の功に由つて阿波國は蜂須賀彦右衞門に下し置かれ、讃岐國は仙石權兵衞に下し置かれ、尙權兵衞は越前守に昇進いたして伊豫國は小早川隆景に對して賜はりました、是れは秀吉が豐太閤と成られた後ちの御話しでございますが序でながら申し上げて置きます、さて爰に和談も出來をいたし長曾我部の方に於ては死したる者の遺族に對し、萬端の手當を遣はし、

尙滯りなく事を計ひ三度の使節を立てまする、秀吉に於ても三度の使節をお立てに成り、既に天正十三年十一月六日に至り土州高知を元親公御發足に相成り尙夫れより大阪城に赴き秀吉公に御對顏となりました、然るに一方羽柴秀吉は四國平定いたしたる趣き奏聞を遂げたる時に主上叡感斜めならず即ち天正十三年七月十一日勅命に由り内大臣より關白に昇進し玉ひ、姓を豐臣と賜はつて關白豐臣秀吉と成り玉ふて大層な出世でございます。元親が大阪へ來たのは十一月關白になつたのが八月でございますから、モウ此時には關白の格式で御對顏になつたのであります、この秀吉が是れだけの大功と是れだけの德があつてなぜ征夷大將軍に成れなかつたかといふと是れにはまた色々の絡んだ事情がございますので、秀吉といふ人は大人物官位の高いのを笠に着て何も威張らうといふのぢやアないが、官位が卑いとどうも諸侯が馬鹿にして命令に服從しない、是には誠に困る、モウ事實天下の政權は自分の手に歸しましたやうなものゝまだ〳〵天下の形勢を見るのに薩、日、隅の三國に雄たる島津は九州にあり、關東には小田原に北條あり、まつた奥州には伊達政宗といふ者が控へて居ります、先づ四國の長曾我部こそ吾が手に歸したやうなもののまだ〳〵油斷は出來ませぬ、就てはどうしても自分が征夷大將軍といふ職を帶びて置かなければ不都合の場合が多いから秀吉は極く悵近の公卿衆より禁裏に於て近々自分を昇進して下さるやうといふ噂を承はり、無論今度累進すれば左大臣であるが、夫れは文官である昔から例もあることで大臣で大將を兼ね征夷大將軍に成りたいものであると、其の向き〳〵に盛んに運動を始め

たのでございます、秀吉が征夷大將軍の職を望んで居るといふことは叡聞にはまだ達しては居りませぬが、公卿衆が聞いて「如何なものであらう」といふ相談が始まつた、サア公卿衆が集會を開いて征夷大將軍を秀吉に許すべく奏上したものであらうかどうかに就て大問題であるから議論を始めました、人間には好き不好きと云ふものがございます、家康を好きな人もあれば秀吉の好きな人もある、公卿衆に於ても秀吉に心を寄せて如何にもして彼を征夷大將軍にしてやりたいものであると考へて居る方もあれば、彼んなものを征夷大將軍にして堪るものでない、彼は織田信長の草履取り、人臣の極官に取立てやるやうな者ではないと言張る人もあつた、結局唯今で申すと投票といふ仕方、何方でも數の多い方にしやうといふので札を入れて見ると征夷の職を授けて然るべしといふものが三人、不可ぬといふ者が七人でございます、是れはつまり征夷大將軍たるべきものは清和天皇の後胤源氏正統の者でなければならぬといふ前例がある、どうも秀吉の損な處で兎も角も尾張の國中村の百姓の悴といふことでは征夷將軍の資格がない、さて此越きを時の主上に奏聞を遂げたる時に、秀吉が征夷大將軍を望み居るが然し卿等が不可といふならば其れ迄であるとの勅命で其儘に成りましたが、去らば何んといつて斷つたものであらうか、彼れ秀吉は王室を尊び、君臣の儀を明かになし、應仁以來の大亂を鎮めて今ま斯くの如く天下泰平、民擊壤皷腹いたし居るも皆秀吉の功なり、其功臣に向つて征夷の職は授けられぬとは申されぬ、何にか好き斷りの言葉を考へなければ成らぬ、どうした者かと公卿衆が御困りの時に松殿大納言進み

出で恐れながら吾が日本の政權頼朝以來武家の手に移り數々其の間に興廢ありと雖も征夷大將軍の職は世々源家が相受け居りまする、源頼朝にあれ足利にあれ皆源家の嫡流に相違ございませぬ、然るに彼れ秀吉は尾張中村の卑賤に身を起し血統と申しては何者なるや更に相分り申さず矢張此儀を廉に御斷りあつて然るべくと存じ奉る」成程これは尤な言葉で征夷大將軍の職は先例に由つて源氏の血統でなければ與へられぬといふのは、秀吉に取つてはグーの音を出すこともの出來ぬ好い文句でございます、其所でこの事を或るお公卿樣から秀吉公に通じました、勿論表向き願つたのでないから、陛下から勅命で御斷りに成る所謂はない、サア是れを聞くと秀吉はがつかりした、が斯んなことで志しを飜へすやうな秀吉ぢやない、何んとかして征夷に成る工夫はあるまいかと頻りに考へて居つたが、爰に足利十三代の將軍義輝公は既にお隱れになつて足利義照公當時中國の大守毛利右馬頭輝元の家老桂能登守の領分備後の國鞆といふ所にお住ゐになつてゐらせらるゝ、尤ま是れまでに義照公は諸國を徘徊まして結屋毛利にお頼になつたので、輝元から能登守に命じて鞆といふ所にお置き申した、立派に館を出來へ足利家譜代の老臣方もお附き申上げて居る、一切のお賄ひは毛利家から來るのですから少しも御不自由といふものはないのです、同じ居候でも吾々の居候とは大きに趣きを異にして居ります、此の御方は當然十四代將軍にして然るべき所のお方であるが、不幸にして足利家の名望は地に落ち今は室町將軍の昔しをかこつのみにて群雄のために壓迫され、斯くの如く昧氣なき月日を送つて居られました、早くも秀吉は

このお方に目を注けて　秀『是れは義照公を此方に抱き込み、自分を義照公の養子にして戴いて足利となり、然らば血統は兎も角も源家の跡を繼だものであるから然る上京都に御願ひをいたさう』と斯う氣が注きましたに由つて石田治部少輔三成に能く其旨を含め　秀『其方備後の鞆に至り足利義照公を迎へ來たれ、容易に當大阪城に參らうとは仰せあるまいが其所を其方の辯を持つてお連れ申すやうに致せ』三成承はつて　三『委細心得ましてござるが義照公或は當大阪に參りなば如何なる憂き目に逢はんかと思召さんも計られず、是は私の辯舌のみにては容易に動き給はざるべし、先づ御懇ろなる書狀一通御認め遊ばして然るべし』秀『如何にも尤もの次第然らば……』とあつて内大臣秀吉が是れから一通の書面を認めて渡しましたから三成は此御書面を携へて備後の國は鞆の足利義照公の館に至りました、義照は是れを聞し召れ　義『秀吉の許より使者が參る所謂はないが兎も角も是れへ通せ』とあります、使者の間に通つて相待つ所に義照公正面にある御簾の内に現はれ玉ひて御着座、譬へ諸國を流浪いたしたりと雖も未だ昔の格式を失はず、御簾の内に着座するといふのは、チト大仰であるが習慣の久しき止むを得ぬ所でありませう、老臣夫れに進み『内大臣秀吉の使者石田治部少輔三成、大阪表より遙々當地に罷り越したる段大儀に存ずる、シテ其の用向きは如何なることにて候か』三『ハヽア義照公には何等の御變りもあらせられず大慶至極に存じ奉ります、主人内大臣秀吉よりの使ひの趣き先づは是れを御覽下し置かれたく……』差出だしたるは一通の書面、内大臣羽柴秀吉と認めてある、老臣是れを受取つて義照公

の御目に持參をいたした、義照は披見に及ぶと何卒御目通りをいたしたく存ずるから大阪表まで御越し下し置かれますやうにと最も懇ろに認めてある、義照の思召ではハヽア是れは秀吉今彼は海内に英名を轟して他に肩を並らぶる者もない位、殊に由つたら予を輔佐して十四代將軍となし呉るゝやも知れぬと思召しましたから大いに喜んで「コリヤ三成と申す者に手當てをいたして遣はせ」『ハッ』其所で三成は山海の珍味を以て響應を受けて居ります、此方は義照公奥の間に老臣を進め　義『さて秀吉より斯樣申して參つたが予は大阪表に參つて見たく存ずる』といふ、桂能登守が　能『恐れながら是れは御見合はせが然るべくかと存ずる、大きに思召に違うことがあると不可ませぬからお出で遊ばさぬ方が花かと存じます』と御意見を申上げましたが義『イヤ〳〵是非參つて見たい』といふ仰せ、其處で　據ろないから三成にいづれ跡より大阪表へ出向くといふこととの返事をいたしました。若し行かないとでも云つたら大いに辯を振はうと思つたが何んの異議もなく參るといふのですから三成は喜んで大阪へ立歸つて來て内大臣秀吉に此事を申上げる、此方は義照公、立派にお供揃ひを仰せ付けられて遙々大阪の城にお出でなされた、着て見ると實に痒い所へ手の屆くやうな有樣、大きに御滿足に思召してお逢ひになつた時に　秀『さて義照公、態態遠路の所をお招き申上げて恐れ入るなれど天下多事の折柄なれば御免しに預り度く、就いては今の世の中は此の如く泰平に相成りましたが、未だ〳〵却々油斷は相成り兼ねます、即ち西に島津あり、東に伊達、北條あり、此時に當りて油斷いたして居りなば何時如何なる變亂に相成るか

も知れ申さず就ては何卒この秀吉をば足利家の御養子になし下し置かれたく、然らば恐れ多くも一天萬乘の君に願ひ奉り征夷大將軍の職を某し承はるの心底御諾し下さらば難有く存じます」色を變へ玉ふた義照「義」「默れ秀吉、汝は下賤より成上つて内大臣の高官を得たれば最早此上望む所はあるまい、此上にも將軍の職を望むといふは隴を得て蜀を望むと申すものぢや」秀吉莞爾笑つて秀「ではござらうが」義「出羽でも奥州でも成らん」秀「其の御禮としては望み玉ふ地に於て三十萬石……」義「譬へ三十萬石が百萬石にても先祖を汚すことは出來ぬ、其方如き氏も素性も知れざる者に足利の姓を讓るなどは以ての外なり」と云ふ腹を立てるかと思ふと秀吉決して腹は立てない、尤も爰で腹を立つて無禮を加へるやうな人なら關白太政大臣には成れなかつたらう 秀「イヤ左樣に御怒りあれば是非に及ばず先づ〳〵當分御滯在を下し置かれますやう……」といつたが、即日立歸るといふ其處で秀吉公は種々なる贈り物を吊臺に乘せて是れは一ト足先きに備後に送り屆ける、義照は供廻りを召連れて最と不興氣に備後に御歸りになつた、桂能登守が「如何なる御相談でございました」義「イヤ怪しからぬ所の秀吉、是れ〳〵云々であつた」能「先づ其邊にて候はん、私豫め察して居りました以來は御他行は御無用でござる」と堅く御意見した。

（第十三席） 北條征伐小田原陣の事、並に伊達政宗延着の事

秀吉は種々に心を痛めまして、此上は何んといたして素志を貫徹しようかとお考へに成ると、爰に菊亭大納言晴季卿が此事を聞し召して、豫てこの御方は秀吉最眞、今日までも色々秀吉のために、便宜を圖り御自分もまた便宜を計られて、お出でに成るお方 晴「羽柴殿、是れは、貴郎は足利家の養子になつて將軍の職を承繼がんとなさるよりも目下の 所 關白鷹司殿下が、御病氣であらせらる、由つて、鷹司家に一應御相談の上御承諾があつたら、其上で朝廷にお願ひなすつて關白にお成り遊ばしたらお宜しうござらう」成る程道理な譯、關白と征夷大將軍とは差したる相違はない、秀吉公は大きにお喜び遊ばして此段を鷹司公に申入れた、鷹司殿下は目下御重病、萬一幸ひに病氣全快をいたしてからが、退隱を願つて御自分は花鳥風月を友として世を送りたいといふ思召しがあつた所、旁々秀吉は平生御最眞であられるから「關白、イヤ秀吉が其程に思ふならば、麿も病氣であるに由つて當分お役を勤めることは出來ぬから彼に讓つても好い、彼は天下の豪傑なり、英雄なり、人は彼のことを卑賤とか何んとか兎角身元を考へて批判するが、彼の位の人物は先づ滅多には、日本にも出ないから役儀は讓つても差閊へない」と、至つて捌けた御人物、其所で御聞濟みがあつて、共に朝廷にお執奏があつたから、茲に彌々秀吉は關白といふことに極つて、天正十二年七月十一日關白宣下のために參内仰付けられて、宮中に於て、天盃を賜はり、爰に從一位關白太政大臣といふことに成つて姓を豐臣と賜り、此上もなく喜んで退出をいたしましたは實に大したもの、こゝで愈々九州征伐でありますが此方は全く戰爭計りてお慰みか薄う御座いますから中略致し島津父子も降參致しました、扨其次に事の起つたといふのは彼の小田

原北條の一族がどうしても秀吉に降參しないで秀吉も無禮極まる北條氏政最早ゆるし置く譯には相成らぬと天正十八年六月豐臣秀吉公に置きましては三十萬の大軍を起して北條征伐を企てられ相州小田原の城を十重二十重に取圍み必死となつてこれを攻めましたが、何しろ敵の要害は天下無比の嶮岨なり、而も大將北條氏政父祖三代の餘勢を以て巧みに之を防ぎますのでさしもの豐臣勢も一時攻倦んで見えました、秀吉公は此の樣子を御覽ぜられこれは一時に力づくで落さうとすると、假令十分に參つても味方の兵を多く損する、それよりは持久の策を以てヂリ〳〵攻めにするこそよけれと、德川殿を始め淺野石田長束などといふ人々とも協議の上、寛々と之れを攻めることになつた、そこで秀吉公には石垣山に御陣を構へ日々茶道の達人を召して茶を立てたり又は石田三成、增田右衞門などといふ連中を招いて酒宴をしたり、イヤもう暢氣なもの、中々陣中にあると思はれない、後には京地より多くの美人を招き寄せ、各陣所々々に於ては只遊樂を事として居るやうな事で、石垣山の御本陣へは淀君がお出でになり日夜酒宴を催して居られる其樣いふ始末でございますから此の小田原へは諸藝人なども多く入込み毎日太鼓囃子で以て騷いで居りまして中々戰地とは思はれぬ位な繁昌でございます、然るに或る一日秀吉公は御酒を召し上つて居ると淺野彈正長政が御前へ伺候いたしました、秀吉公は醉眼朦朧として　秀『オ、長政か、斯る夜分に何事か起りしか何の用ぢや』長政畏る〳〵兩手を支へ　長『ハツ夜分をも顧みず罷出でしは餘の儀には候はず、彼の奥州の荒夷伊達政宗此度根據黑川へ出で越後路を下り、越後路より信濃路、

信濃路より甲斐へ下りそれより駿河路を經て本日當地へ着至して候、率ゐ參りし人數は僅に百餘名、最も國を出づる時は四百餘名候ひしが途中にて種々の事情に妨げられかく減じたりとの事、重臣としては片倉小十郎同道致してござる』秀『ウム左樣か、して如何なる風體の者ぢや』長『どうも恐ろしい風體の者にて、丈け拔群にして髯藤面を掩ひ聲破鐘の如く、眼は片目にして年未だ二十四歳とやら、若しこれをして味方に遊ばしなば天晴御役にも立つべき者と存ずる』秀『左もあらん政宗と云へば奥羽の豪の者、味方になさば立派に役に立つであらう、滿足、ヤア〳〵淀、良い者が參つたな』仰せに淀殿も『恐れながら彈正殿の御取做良い味方が見えましてございます』秀『さうぢやハツ〳〵〳〵』秀吉公の御機嫌が大分よろしいから淺野長政は　長『ついて

は明日にも御目通りの儀を願ひ度く存じまするが如何な者で……』伺ふと秀吉公は暫らく默然として何の言葉もない、稍あつて　秀『待てよ長政、あれは百有餘萬石の大身にして兵も多くある、小田原北條の後詰も出來べき身でありながら、戰ひをも交へずして俄かに此の相州へ下り秀吉が陣へ參りしとは些と合點が往かぬ、疑へば限りなき事なれども彼れは左る者、迂濶に油斷は相成らぬ、此秀吉少し考へる所あれば暫くの間政宗を底倉へ蟄居させ置け』長『ハッ……』長政も是には弱つた、すると淀殿が傍から　淀『上樣これは一應治部を御招きあつて御相談こそ然るべきかと存じまする』申上げると秀吉公『ウムそれも宜からん、コレ治部を呼べ』仰せに早速石田治部少輔三成の陣へ使者が立つ夜中至急の御召しといふのだから、三成も何事かと直ちに御本陣へ罷り出でますると右の始末、秀吉公より委細の御話しがございました、夫れを聞いて三成奥州から伊達政宗が參つたといふのを暫く考へて居りましたが　三『彼奴は我君の首を覘はんとするの曲者、恐れながら是れは我君御油斷あらせられては相成りませぬ、やア長政寧そ是は其許が政宗に腹切らした方が宜しからう、上樣に御取爲しとして御目通りなどをさするより早く腹切らした方が後の爲でござる』と言ふを聞て長政色を變へ　長『御默なされ三成、政宗は萬夫不當の勇士にして年未だ三十に至らざるに奥羽を平定せし程の豪の者、之を味方となさば天晴れ御役に立つものを腹切らせよとは何事ぞ、而かも彼より君の御德を慕ひ御味方に從はんとて參りしを腹切らすといふ法やある、餘りと申せば無法の一言、察するに御身は此の長政が政宗を推舉致せし故、夫れを嫉

んで斯かる事をばいはるゝならん、治世には少しは役に立つか知らぬが戰國には何の役にも立たぬ石田三成餘計な事を申さず控へて居れ』三『何に是は又聞捨てならぬ一言、今一度いふて見よ手は見せぬぞ』三成は眞赤になつて詰寄る、アワヤ爰に珍事出來と見えたる折秀吉公　秀『これ〳〵騷ぐな、治部も言過ぎる彈正其方も申し過ぐるぞ、宜い此秀吉も考へる事があるから明日又何とか致さう、まあ淀今夜は此儘打伏であらう、彈正萬事は明日にせ』彈『ハッ』鶴の一聲仕方がない、彈正長政も石田三成も此儘退出を致した、淀殿には軈ての事に殿下を奥の寢所へ御伴ひ申上げる、所が其夜も更けて早や三更と

いふ頃ほひ石田三成は唯一人奥殿さして忍び來り庭の此方に立つて暫らく樣子を見て居りましたが、軈て緣先きへ來たつて腰を掛け何やら待ち受けて居る體でございました、すると豫ねて約束のあつたものと見えて、間もなく雪洞片手に靜々と四邊に心を配りながら出て來られたのは例の淀殿、折しも夏のことでありまして薄衣を身に纏ひ寢衣の儘にて草履も穿かず淀『治部々々』御聲を掛けられると、三成は 三『ハッ淀殿にお在しますか』淀『サア妾しは其方に逢ひ度ふ思うて漸々上樣の御目を忍んで是まで參つたが、治部其方は心變りはあるまいな』治『何んの心變り仕つりませう、唯殿下の御前體宜しく御取り做しを……』淀『イヤ夫れは皆其方の心一つぢや、心さへ變らねば御前は妾しが何の樣にも致す故心安く思ふて居や、其れについて此小田原攻めも最う長い事はあるまい』三『勿論程なく落城致しまする』淀『左すれば都へ登つて又何かと深い話もしやうが目の上の瘤といふは政所殿、夫れに三條の局ぢや、此度御味方に附かうといふ伊達政宗は三條の局には由緣ある者とやら、ぢやに依つて政宗も屹度政所附きとなるであらう、あゝいふ者が政所の味方とならば夫れこそ大事、就ては其方の力で殿下へ甘く申し上げ政宗が手も足も出ぬ樣に致して吳れ、腹切らせるなら切らして吳れ取上げるなら取上げる樣にして給はれ宜いか』三『ハッ夫れは三成如何とも致しませう、今日の所にて政宗如き智勇兼備の人物が政所附きと相成らば、吾れ吾れの身の大事、唯今加藤や福島など皆政所附きなれども、彼れは唯武勇一徹のものにして戰場の外には役に立たぬ、唯だ侮り難きは淺野長政なれど併し是とても恐るゝには足らぬ、不肖なれ

ども三成は殿下の御側に居つて御心を能う存じて居ります、外にて三成如何樣にも計らひますれば、內よりは淀殿宜しく御前を取做しあつて彼の政宗を立ち所のない樣に致すが肝要でございまする』淀『大きにさうじや妾も精々努めるであらう』と淀君の言葉を聞いて三成尙ほも聲を秘め、三『今も申上ぐる通り政宗は容易ならぬ人物なれば、之を味方にいたす時は無論小早川と匹敵なし且又前田德川等と肩を並べる位で御座りますが中々味方に引入れることは相叶はず、結局後來吾々の敵と相成るは知れてをること、依つて政宗に今腹切らせること相成りませんならば手足の出ぬ樣にして仕舞うことが肝要でござる、それに付ては三成考へてをることもござれば御安心遊ばす樣』淀『それは其方のことであるから粗漏はあるまいが、只妾の氣に掛るは其方の心ぢや、吳れ吳れも心變りのせぬやうに……』三『何其樣なことの候ふべき、決して其邊は御心配なき樣願奉る』聞いて淀殿莞爾と笑み 淀『それにて妾も安堵いたしたといふもの、併し斯くしてをつて人目に掛らば一大事、今夜此儘別れませうか三成……』三『ハッ』淀『諄い言やうぢやが、近頃は都より美しき男や女が見え、名古屋山三の歌舞、又出雲の音曲、殊に國とやらは聞ゆる美人にして諸侯の陣へも招がれるとのこと、其方も國の色香に迷ふやうな事があると聞かぬぞよ、エ、惡い奴めが……』三『これはとんだ御愍氣恐れ入ります、淀殿は此頃名古屋山三の舞を御覽になりますとやら彼れは中々の美男子、あなた樣こそ彼れにお迷ひ遊ばしますな』淀『コレ何をいふ、冗談も程にしやれ……』言ひつゝ淀殿燈火消して其儘奥殿へと入られた、跡見送つて暫く考へに沈んで

をりましる石田三成、獅子心中の蟲とは此者、やがて何やか思當ることやありけん　三『フム、フム〳〵〳〵』獨り物凄き笑ひを洩らして此處を去りましたが、此邊を見ると淀殿と三成とどうやら怪しい關係もあつた樣に思はれる、左れば後に淀殿には若君捨若樣を御儲けになりましたが賢明なる政所の如きはもう淀殿の身持の宜しからぬを御存じの爲あの捨若は殿下の種でない、石田治部の種ぢやと迄仰せられた位、けれども一說にはさうでない、淀殿には美男子の歌舞伎役者名古屋山三を寵愛せられて其間へ出來たのが捨若樣だといふ說もございました、どうも其れ等は確とは計り難いことでございますけれども、兎に角淀殿も中々浮かれ筋をなすつたに相違ない、捨若君は早く世を去りましたが後に生れた秀賴公あれは全く秀吉公の種だといふ說で、尤も三成の種としても三成も中々の人傑でございまして容易な人物でない、關ケ原の一戰に德川家の爲めに破られ刑場の露とは消えたが、あの德川が天下を取らなければ石田が取つたに違ひないので、これを考へても三成は大した人物でございます、さういふ男でございますから早くより淀殿を手に入れて何かと己の位地を固めることを企てゝをつたのは實に油斷のならぬ男であります、さてそれはさうとして其翌日三成は殿下の御前へ出で、伊達政宗のことを惡樣にいふて腹切らせんと色色骨を折りましたが、どうも殿下の心が決しないこれは淺野彈正長政が傍から又兎や角いふからで、どうも政宗の處置が付かない、依て德川公を御招ぎになつて、是はどうしたものであらうと相談なさると、家康公が『恐れながらこれは少しも御迷ひなさることはございませぬ、政宗如

き豪傑が御味方に加はるとはこれに越したる幸ひはございませぬ、早速御目通り仰せ付けられて宜しい、今までは長曾我部といひ島津といひ、皆本領安堵仰せ付けられたるに而も向ふから進んで御身方に付かんとて參りし伊達政宗に腹切らせるの何のとは餘り懸隔つたる御考へと存じます』と申上げたので秀吉公も成程と思召して其氣になる、彈正長政も漸くそれで安心した處が妙なことが起つて來た。

（第十四席）　秀吉政宗の領地を削る事、並に捨若君出生の事

さて秀吉公は德川公の諫言により、伊達政宗の命を助け本領安堵をさせやうと思し召して居られると、さあ三成は驚いた、どうしても政宗を此儘ゆるしては相成らぬといふので、淀殿へ何やら密かに申入れましたから、淀殿も其心組で殿下の御出でを待つて居つた、さういふ事とは夢にも御存じない秀吉公、其夜淀殿の御部屋へ成らせられると、何時もチヤホヤと御待遇をする淀殿が今夜に限つて餘程不機嫌で袖に顏に當てゝ只シク〳〵と泣いて居りますから秀吉公は『コレ〳〵淀何で泣いて居る、何悲しき事やある』との御尋ね、淀殿は涙を拂つて　淀『ハイ上樣情なうございます、政所の御身方が又殖えました、私は政所樣に憎まれまするが只もう情なうございます』　秀『何と申す』　淀『此度彈正長政の御取做にて御味方に加はる伊達政宗、あれは三條の局の由緣の者、此淀の爲めには敵でございまする、それでなくても德川殿や前田殿まで淀はてかけ妾と賤し

み那のやうなものは君の爲にならぬ者ぢやとて、妾をば惡し樣に申して居られまする、妾は此頃は上樣の御情けを頂きまして、姙娠になりましたやう只上樣の御種を儲けばやと思ふ先矢き情けなや政宗が又妾の敵に加はりましては此後何と致して宜いものか、それを考へますれば只もう悲しくて〳〵……』と言ひつゝワッとばかりに泣き出せば秀吉公は思はず膝を進め 秀『何ぢや、其方は姙娠になつたとな、それは目出度い、五十に至るまで婦人を寵愛致しても子といふものを儲けぬ秀吉、只夫れのみ殘念に思ひ居りし所、其方が姙娠になつたとは何よりぢや、秀吉是に越したる滿足はない大切に致せ、其方の申す事は何なりと叶へ得させん、よい〳〵併し德川殿の言葉もあるのぢやから眞逆政宗に腹切せるといふ譯にも參るまい、ウームさうぢや、斯う致さう命は助ける代り彼れが領する奧羽百萬石を取り上げて三十萬石位になし、漸々に彼れが手足を奪つて自然と自滅するやうに致すであらう、それに付けてもあの蒲生氏郷めも近頃面白からぬ擧動を致す、之もどうか致さねば……』淀『それは仔細はございませぬ氏郷の妹三條の局が始終上樣の御側にあつて上樣を惑はし、只氏郷と何やら巧みを致して居りまする、夫れ故三條の局を御側へ御置き遊ばしては……』秀『コレ〳〵何を其樣に悋氣を申す、三條の局が何を致さうと予が心を傾ける氣遣ひはない』淀『ないと御意遊ばしまするなら氏郷を都へ御置き遊ばさぬやうになさいませ』秀『それは宜い、皆秀吉の胸にある、此度政宗の百萬石を奪ふを幸ひ、其代り氏郷を百萬石に致し奧羽へ山流しに致し、次第によらば氏郷と政宗を兩人一時に潰して呉れん』淀『さういふやうに遊

ばせば妾も安堵、上樣是非さう遊ばせホンに嬉しう存じまする』と莞爾と笑ふて見上げた容色、イヤどうも非常な事を吹掛けたものだ、秀吉公も爰に御心が變り 秀『アヽさう致さう』と仰せあつて、政宗の領地を減ずる事になりましたが、とんだ風が政宗の方へ吹たもので政宗の災難此上もなし、さて其翌日になると前田德善院を以て伊達政宗へ御前へ出仕致すべき旨御達しに相成りました、依て政宗いよ〳〵秀吉公に對面と云ふ事に相成りました、伊達左京太夫政宗は片倉小十郎を從がへて石垣山の御本陣へと出頭に及ぶ、何がさて年未だ若しと雖ども奧州一面を切り從がへ天下に其名を轟かしたる萬夫不當の豪傑、水色無地の麻上下丸に三つ引を白く染出したるを着したる儘髯半面を覆ひ、片眼にて物凄く淺野彈正長政の案内にて御前へ通りました、正面一段高い處には秀吉公泰然

と御着座、左右には德川家康公、前田利家公を始め石田三成、長束大藏、增田右衞門其他の人々威儀を正して並んで居る、其中に政宗少しも臆する色もなく靜かに御前へ進んで頭を垂た、秀吉公は暫しの間其政宗の樣子を疑と見て居られましたが稍やつて　秀『オウ伊達左京太夫能く見えた予は秀吉である面を上げい』と仰せられると政宗は恐る〳〵頭を上げまして　政『畏れながら政宗遲刻仕まつりたる段幾重にも御許し下され度し、實は昨年御招ぎを蒙むりしなれど四面は卽はち敵にして容易に國を離るゝ事難く進退茲に谷まりし拙者、心ならずも今日まで出仕延引仕まつりしが今回幸ひに僅かの隙を見出し奧羽より越路、信濃、甲斐を經て漸やく之れへ參着いたし候、此上は御味方に加はり如何なることなりとも政宗進んで御奉公仕まつり候へば只何事も寬大の御處置願ひ奉まつる』と言ひ終つて又頭を垂た、秀吉公はそれを聞かれて左もこそと合點き給ひ　秀『ヤア其方は天晴の弓取ぢやそうぢやな、併し奧羽にあつて佐竹を始めとして其の外大名と爭ひなし中々惡戲者なりとの噂さを聞く何に致せ今回參着の遲かりしは是又是非に及ばず今更兎や角う申したればとて詮ないことなれば宜い〳〵許す、許すであらうが少し其方に申聞ける事がある』

政『ハツ如何なることで……』秀『餘の儀でない秀吉は今天下を一統して六十餘州を掌中に握るばかりに相成つたが、只意に任せぬは出羽奧州と此の小田原ぢや、併し小田原北條も今日に至つては最早日ならず落城せん、殘るは只奧羽のみ汝早く我味方に來りなば兎に角今に至つて味方につくは事既に遲し依て汝の領する會津百萬石黑川城を此方へ召し上ぐる』政『何と仰せらるゝ……』

秀『それにて不承知とあらば止を得ん秀吉直ちに軍馬を向けて攻め立つるのみぢや、兎にも角にも一時汝は米澤三十萬石にて辛抱せよ、それが承知なれば何事も許し遣はすが何うぢや』との嚴命、遉がの政宗もこれにはハツと驚いた、黑川百萬石は自分の身に取て大切な本領、祖父三代にして今漸やく百三十萬石の身分になつた、それを立ち所に百萬石を奪はれるとは何たることかと只もう憤慨に堪へやらず暫らくは考へて居りましたが今は如何とも仕方がない、幾ら口惜しがつても追付く場合ではないから政宗も覺悟を極め　政『殿下の仰せ政宗謹しんで畏こみ奉つる、手足のもげた拙者何一つ殿下の御心に背き申すべき會津百萬石黑川城は如何にも參らせませう』……と申し上げると秀吉公には莞爾とお笑ひ遊ばして　秀『やあそれで宜い政宗それでこそ余も滿足いたした、付ては其の方は是れより直ちに歸國して國境の處分をいたせ』政『ハツ……』今は據所ない政宗も態々此の小田原まで領地を削られに來た樣な者、本領安堵せられる事にばかり思つて居たのが右の始末力もなく〳〵不承無承に立ち上つたが、どうも考へれば考へる程腹が立つて堪らない、寧そのこと秀吉に飛び蒐つてと思ふ途端、夫と察してか察せずしてか秀吉公　秀『政宗待て』

政『ハーツ』秀『コレ〳〵政宗其方が奧羽にあつて天晴の弓取と聞くなれどまだ十分の弓取といふ譯ではあるまい不肖なれども秀吉が天下の軍馬を見せてやらん石垣の向ひ山、其方を伴なつて戰の樣子を見せて呉れん、イザ來れよかし』と言ひつゝぬつくと立ち上られた秀吉公、遉がの政宗も是にはハツと思つてまだ御受もせぬ中に秀吉公は昆沙門丸と名づけたる御佩刀を小姓に持たせ

御自分に於ては小劍を前半に挾さみ扇面を携へたる儘ッ、〳〵と御本陣を御立ち出になつた、石田三成を始めとして其他の方々は皆御供を申上げる、政宗も今は仕方がないから自分も後へ續いて參ると數町に渉る各陣所々々の前を通つて石垣山の向山一際目立つ高山の麓へやつて來られて夫れへ來ると秀吉公は何思ひけん　秀『コレ〳〵一同の者は是に控へて居れ誰れも參るとはならぬぞ政宗一人供を許す、政宗其方余が刀を持て供致せ』政『ハ、ッ』政宗は驚いた、其内に秀吉公は三成を召して耳に口よせ何やら耳語かれました、是は何をいはれたか三成の外に知る由もない、頓て毘沙門丸の名刀を政宗に持たせ政宗一人のみを供に連れてノソリ〳〵山へ登つて行かれた、政宗も今は止むを得ず秀吉公の跡へ尾いて登つて行きましたが、四邊を見ると全く誰れも付いて來ない自分と秀吉限りだ、而も刀は自分が持つて居るといふのですから政宗心中に考へた、是は妙だぞ他に人がなければ自分の思ひの儘に無禮極まる此秀吉を此場に於て白髮首を打ち落して先程よりの恨みを晴し呉れ、んさうぢや〳〵我に問ひ答へつゝやつて來たが肝腎の秀吉の方では用意も何もして居ない、平氣で居るだけに此方は何となく氣味が惡くて一寸手が出せないと言つた樣な譯、左右する中に早や山の頂上まで參りましたので政宗も今は愈々具合が惡く差向ひになつてはドうも手が出し兼ねると見えて此上は歸りにやつて了はうと考へた、其樣子を秀吉公は知つてか知らずか愈々平氣の體を裝ひ　秀『政宗見よ此下に見ゆる一面の陣所は皆我軍勢ぢや向ふに見ゆるが德川殿の陣ぢや、あの脇にあるのが前田家の陣ぢや眞此下が石田の陣ぢや又貴樣と

中の惡い佐竹も見えて居るぞ、ハッ〳〵ハッ總體の人數三十萬小田原城を七重八重、鐵桶の如く取卷いたるは、其方の目には何と見える』仰せられた時には政宗も意外の思ひ家々の旗差物は中空に飜り各諸侯の陣所々々には隙間もなく立ち並び、目の屆く處秀吉の軍ならぬはなしといふのだからイヤ驚いたの何のつて、如何に秀吉の勢ひ盛なりと雖も縱や此程にてはあるまじと思つて居た伊達政宗、只呆れて暫しは茫然として居たが、其樣子を見て秀吉公カラ〳〵と笑ひ　秀『ドウだ政宗天下を一手に握る秀吉の勢はこんなものだ』政『ヘイ……』秀『併し政宗今此山に居るのは其方と秀吉二人きりぢや、他には誰も居らぬ殊に其方は血氣、秀吉は老年先程の事もあるし定めて此の秀吉の白髮首を欲しからうな』

政『エッ……』秀『ドウだ此秀吉の首が欲しからう』政『中々以ちまして……』秀『イヤ欲しそうな顔ちやハッ〳〵政宗其方には斬れぬぞ秀吉の首は取れぬぞエヘン』一つ咳拂ひをなさると此は如何に今まで誰一人居らじと思ひきや彼方の木蔭よりバラ〳〵〳〵〳〵現れ出でたのは秀吉の御側去らぬ石田長束を始めとして豐公忠義の武士ズラリと並ぶ、一度ならず二度までも秀吉公の爲めに度膽を拔かれた伊達政宗、今は只呆れて茫然として居つた、石田長束等の人々はそれへ來て秀吉公の廻りを警衛いたしましたからもう政宗手も何も出せるものでない其時三成は　三『ヤア政宗殿、御供御苦勞に存ずる』政『ど……どう致しまして』三『殿下には最早御歸陣あつて然るべく存じまする』秀『ウムさういたさう政宗參れ』政『ハッ……』それから再び山を下り石田三成の陣所へ御立ち寄り、此處で政宗に御茶を給はり色々懇ろな御言がありました、而して御暇を賜はりましたから政宗は本國へ引取りましたがもう今は全く秀吉公の勢ひに服し斯る人に及向へば我身の爲になるまいと思ひましたので、それからは秀吉公の臣下同樣になつて居りました、斯る豪傑を味方に附け背むく事の出來ない樣にした秀吉公の膽力もえらいもの、偖其夜殿下は淀殿の所へ御越しに相成り何かと御話しがありましたが、淀殿も政宗が高が減ぜられ手も足も出ぬ樣にせられたといふのを聞いて大層喜ばれたといふことでございます、政宗もとんだ災難にかゝつたといふ者だ、右左する中に北條方では兵糧が無くなり名ある人々は討ち死にするといふ始末、さしも堅固の小田原城も今は落城いたし北條氏政、氏直父子にて降服いたすより外はいたし方がない樣なことに立ち

いたりました、最も此氏直の方は德川の方へ捕へられたのでございますが之は後に高野山へ入つて坊主になつたといふ話しでございます、何に致せ早雲が基を開きし小田原北條の名家も傾く運の是非もなくたうとう爰に滅亡するやうな事、跡は殘らず秀吉公より德川公に賜はり家康關東へ下つて江戸城を開く樣になつた、之は申上ぐる迄もなく皆樣御存じの今の宮城で御座います、そこで秀吉公は北條滅亡の後出羽奥州を一廻りして都へ御歸りになつた、間もなく蒲生氏郷を奥州へ下して是を會津黑川の城主と致したが其實蒲生氏郷は山流し同樣になつたのでございます、此時氏郷は勢州松坂で二十二萬石であつた、夫が一躍百二十萬石になつたのであるから大した出世で本人は大喜びと思ふとさうでない聲を放つて泣いたとある、全體此人の志は百萬や二百萬で滿足するものでない、秀吉には叶はんから從つて居るが一朝秀吉なき後は天子を挾んで諸侯は號令しやうといふ腹がある、伊勢に居れば好都合だが會津では袋の底積でどうもならんから泣いたといふ、扨今は秀吉公の勢ひ高大で日本六十餘州の中で己れに及向ふものとてはなくどうも大したことになりましたが、其處へもつてきて此度淀殿が姙娠遊ばしたといふのですからイヤどうも其御喜びは一と通りならぬ、ア、我れ始めて子を儲くるをえたりとおつしやつて只もう其出産を待つておられる、それを聞いて政所は別に嫉みなどはなさらないが三條の局は非常にそれを嫉みまして我兄の氏郷が山流し同樣の身となりしは全く彼の淀が業と恨み重なる其淀が今上樣の御種を儲けなばいよ〳〵此身は立つ瀨はない、どうか淀の腹の子を生ませ度くない生ませぬ樣にしたいと

色々氣を揉でをつたが中々さうはゆかない、淀殿には十月十日の日が充ちて安々と玉のやうなる男子を御生みなされた、是を捨丸君と申し上げる、さあ秀吉公の喜びは申す迄もない日々若君の側にゐて少しも側を離れない、所が三條の局が此の捨若へ最と恐ろしき企てをいたすお話し。

（第十五席）　秀吉諸國行脚思ひ立の事、並に臣下一同諫言の事

偖讀み續きましたる豐臣家大奥のお話し、淀殿が御姙娠をなすつてお産の紙さへ安々と捨若君をお儲けになりました、それを三條の局が非常に嫉ましく思つて姙娠中から色々と氣を揉んでをつたが遂に若君御誕生となつたので今はゐても立つても口惜しくつて〳〵堪らない、そこで政所の御前へ出で淀殿の惡口やら何や彼や涙ながら訴へると又此政所といふ方が誠に貞操正しく嫉み妬みなどといふ心が更にないお方でありますから言葉柔らかに局をお慰めになつた　政『局決して左樣なことをいふて給うな、殿下には今こそ榮華な御身とならせ給ひたれどもお年若の頃には隨分御苦勞をなされた者である、少しは容貌美はしき婦人にお心を寄せらるゝも是非に及ばぬ、只々淀は不行跡である事は妾も能う知つてゐることで、此度御生み申上げた和子とても全く殿下の種やら何か分らぬ、それを妾も情なく思ふて居る、なれど豐臣の家は秀次が繼ぐことになつてをる故其邊の事は左程心を傷めぬが局に於ても決して嫉み妬みなどいたさぬやう、其方が兎も角申すが加賀の局も又何とかいひつらん、さうなれば事面倒殿下のお怒りも如何故吳々も愼まねば相成りませぬ、只々殿下にはお年寄られた今日迄一人の和子を儲けざるのを殘念に思し召てをられるところ丁度其所へ淀が和子をお生み申上げし故一層御意に叶ひしといふもの、局も左や右申すよりは其方も殿下の胤を儲けて淀に負けぬ樣致して吳りやれ』とのお言葉少しも悋氣がましきことは仰せられぬ、三條の局も只もうその御貞操に恐入つて　局『ハイ政所樣の思し召し恐れ入つてございますが』と話しをしてゐるところへ俄かに『御成り〳〵』といふ聲、それを聞と政所も三條の局もさては殿下のお出なるかと跡へ下つてをる處へ、秀吉公にはお年は召してもお心は若く白の御重ね幾枚か召された上へ紫綸子の縫物をなしたる胴服樣の物を召され悠然とそれへ成らせられた、設けのお褥の上へどつかと坐し賜ひし折政所も局も丁寧に御挨拶を申上げる、秀吉公は最とも御機嫌麗はしく　秀『局何ぞ面白き話しでもあるかハッ〳〵ハッ喜び吳れよ淀の生んだる和子は達者に育つた、局其方も淀に劣らぬ好き子を生み吳れよ、老いて種なしといふが强ちさうでもない、政所も一人子を生み吳れば宜いのにハッ〳〵ハッどうも子なきは秀吉の不運ぢや局もよいが只子なきが傷ぢやハッ〳〵まあ〳〵宜い茶を持て〳〵』其時政所の方は『殿下には局をお責め遊ばすが局の方へ少しも成らせられず淀の方へばかりお出になると局も上樣をお怨み申してをりまする』

秀『ハッ〳〵其樣な事いはぬがよい、局茶を吳れい、其方の手前一服賞翫いたさん早く持て』殿下のお言葉に三條の局は軈てお茶を立てゝ參らせた、御菓子もそれへ差し出したが秀吉公の事故柿と桃ばかり、之は嘘でへゝゝ、扨秀吉公は三條の局の差上げられた御茶を召上りながら政所を

相手にお話しをして居られましたが其内に三條の局も餘り好心持もしないと見えて　三『淀殿の御誕生お目出度ふ存じまする』といふさへ最と心苦しさう頻りに胸を押へて苦しみ始めた　三『ア痛た〳〵〳〵』と頻りに苦しむ秀吉公は驚いて『これ如何致した〳〵』三『ハ……ハイ持病の癪で』秀『これ癪など起つてはいかん早ふ下つて手當をせい』三『ハイ……御免を蒙りまする…』と局は座に居堪らぬ體にて其儘御前を退りました、秀吉公は其後を見送つて居られたが　秀『ウヽム彼は世にも稀なる美婦であるがどうも嫉み妬みがあつて困る、政所に誰も居らぬでは誠に淋しい加賀の局を呼ぶかな何にしても淀は子を生んで秀吉を喜ばせた誠に健氣な者だが加賀の局や三條の局は子がないのが傷ぢや、夫に付けて思ひ出したが彼のもづやの妻あれは寡婦であるといふ、あの女子の側へ參つて呉れる譯にはいくまいか』と仰せられると政所は少しく顔の色を變へて　政『是れはしたり三人四人の婦人を側へ御置き遊ばして夫にも未だ飽き足らず何を仰せられまする、子を儲けたいとの御意なれどもお年は召してゐらつしやる貴郎樣少しはお身體のことも御考へ遊ばしませ、決して左樣な事は仰せられぬが宜しい、今夜は三條の局の方へ成らせられませ、局の今の病氣も元は殿下より起りましたる事さあ〳〵早う局の方へ……』秀『これ〳〵其方は子が來るといつも局の方へ追ひ遣るが、さう邪魔に致すなハッハヽヽヽ』と言つて笑つて居らつしやる所へ侍女一人夫へ參つて兩手を突かへ　女『申上げます、只今石田三成樣がお目通り願ひたいと申して見えられました』秀『何に三成か遠慮に及ばぬ是へと申せ』女『ハイ』と侍女は立つて行く、入違ひ

に五奉行の一人治部少輔三成畏る〳〵夫へ入り來り　三『畏れながら上樣には是に渡らせられましたか、政所樣にも御機嫌宜しう三成恐悦に存じまする』政『オウ三成か淀は好い子を產んで妾も嬉しう思ひまする、年老ひて見れば詮方なく上樣のお胤を一人なりと儲け呉れたる淀は手柄者ぢや三成其方より淀に言ふて給も』三『ハッ淀殿にも政所樣の今の御言葉を御聞き遊ばしたら定めしお喜びなさる事でございませう』申上げると秀吉公は傍から　秀『これ三成其樣なこと淀に言ふてはならぬ、淀は政所の事をいふと直に目尻を上げるぢや、併し政所は淀の事いふても少しも厭がらぬが妙ぢや、して三成汝是へ參りしは何か用か』三『實は若君急に御むづかり遊ばす故上樣のお出でを願はんと存じて罷り出でました』秀『夫は〳〵捨若がむづかる其は容易ならん、政所も偶々五十を越えて儲けたる子がむづかるのぢや往つて見て參る、政所嫉まずに呉れよ妬まずに呉れよ三條にも能く言ふて呉れあゝ忙しない事だ……』斯うなると秀吉公も夢中だ其儘三成を連れて淀殿の部屋へ行れました、此方の三條の局は癪が起りしとは僞り已れの部屋へ退りましたが今に秀吉公が之れに成らせられるだらうと心待ちに待つて居ると秀吉公には急に淀殿の方へ行かれたとの事さあ三條の局それを聞いて愈々嫉妬の火焔を燃やし、是といふのも和子ある故憎くき淀め恨めしきは捨若、今に見よやと恐ろしい事を巧むやうになりましが、夫は扨をき物事は巧く往かぬもので、秀吉公が圖らずもこゝに悲しき目を見るに至つたと云ふは從三位大納言秀長公が御病氣で御亡れとなつた、この時ばかりは遺の秀吉公も悄然として『ア、秀長が亡くなつた情けない……』

と御自分の杖とも柱とも思つて居た秀長公の死を只もう嘆いてをられる所へ搗て加へて五十を越して一人儲けた捨若君御自分の命に換へ難いと思つてをるその御方が御亡れになつた、淀殿は身もあらぬ思ひ日夜涙に暮れて嘆いてをられたが夫よりは秀吉公の落膽は又た甚だしい、もうこの時は朝鮮攻めも何も斯も皆な忘れて仕舞ひ『ア、我はもう世の中は厭ちや、これよりは寧そ頭でも剃りこぼち、最明寺の跡を慕つて諸國行脚をなさん、跡の事は宜いやうにいた

せ榮耀も榮華も何かせん我は淺野彈正長政一人を連れて諸國行脚に出る』と決心したとの御言葉、さあ人々は驚いた加藤福島の面々種々御意見をしたが御用ひがない、一旦言出したら後へは引かぬ秀吉公の氣象、さア誰が何んと御意見をしてもお用ひがない、愈々諸國行脚に出られるばかりになつた、遉が大氣の秀吉公も、杖とも柱とも思召して居た大納言秀長公の御逝去、續いて最愛の若君捨丸殿の御亡れと悲しき事が續きましたので、今はもう此世を昧氣なく

思召し、坊主になつて諸國行脚に出やうとの御決心却々固く、此時は政所樣に於ても一通りならず御心配遊ばして、色々御意見を申上げましたけれども、どうしても御聞入れがない　秀『俺はもう黒髪（此時は黒い毛は一本もないが）を下して諸國行脚に出ると決心した、意見無用』と仰しやるのでどうにも仕方がない、三條の局や加賀の局も色々御意見申上げて見たが矢張り駄目だ、餘り御意見を申上げるので秀吉公も五月蠅といつて淀殿の居らるゝ御殿へ成らせられると此方はまた大變だ、何しろ淀殿は御自分の生みし御子が御亡れになりし事故只もう袖に涙の乾く間とてはなく日夜嘆きに沈んで居られしが今殿下の御姿を見るとワッとばかりに泣倒れる、大藏の局は傍らにあつて　大『上樣、淀樣の此御嘆き御覽遊ばせ御不憫には思召しませぬか……』申上げると秀吉公は御目を連瞬き　秀『淀其方の嘆きも決して無理とは思はぬ、少しは又この秀吉の身になつて呉れ、我れ生れてより悲しいと思ひし事は信長公が京都本能寺に於て明智の爲に御無念の御最期を遂げられしといふことを中國にあつて聞きし時と此の度ばかりぢや、ア、〳〵何たる悲しき事なるか最早此世に望むことはない、此秀吉今日にも髪の毛を剃つて最明寺時頼の二の舞をする決心ぢや、可愛の淀其方にも別れねばならぬ』と悄々して仰せられた、淀殿は流るゝ涙を拭ひも敢へず御膝に縋り　淀『何と御意遊ばします御年召したといへ未だ五十路の上に幾つも越させ給はぬ御身が其樣な御心になり給ふとは何事ぞ、上樣が御出で遊ばさば此淀は何と致しませう、上樣の外頼りなき此淀を不憫とは思召しませぬか、淀が生みたる捨丸が御亡れに成た許りに斯く御心亂れ

給ふとは情なし何卒思直して給はるやう御願ひ申上げまする、斯ういふ時の相談相手は石田治部コレ大藏の局治部を早く治部を是へ……』と淀殿の言葉に大藏の局は心得て直に三成を呼びにやる、三成何事と心得て夫へ來て見ると右の始末、上樣淀殿も唯もう涙に暮れて居られるを三成は心中に怪しみながらそれへ兩手を突へ　三『これは上樣には如何遊ばされましたか淀樣にも何と遊ばされしや』淀『オッ治部聞て給れ上樣には氣の狂はせ給ひしにや是より髪を下して何れへか成らせらるゝといふこと、最明寺時頼にならうとの御言葉妾は何とせん捨若を失ふて又上樣に御別れ申上げたら何とせう情けなき事にこそ察して呉れや三成……』とワッとばかり泣き伏し給ふ、三成もそれを聞いて意外の思ひ元より殿下が世をはかなみて廻國に出られるなどいふ話は聞いては居たが眞逆それ程深く決心をせられたものとは思はぬので別に伺ひもせず御意見もしなかつたが最愛の淀殿をさへ捨て往かうといふ御決心これは容易ならぬ一大事よと心中愕つと致して暫く秀吉公の方を凝視て居ました、秀吉公が行脚に出ると云ふ決心を聞いて三成は暫く默して居りましたが稍あつて膝を進め『こは我君にも似合はぬことを仰せらるゝものかな畏れながら御舍弟秀長公御亡れ遊ばして間もなく捨若君の御早世お心亂れさせ給ふは是非なけれども君には未だ六十路にもならざる御身、それに淀殿は御年も若し又もや若君御誕生遊ばすは必定なり決して左樣にお心をば落させ給ふことやあるべき豫て殿下には朝鮮より大明へ御手入の御計畫さへ遊ばされ日本のものは何時かは大明を征して彼の國を日本の領地になし給ふこともあるべしと皆殿下の兵を起し給

ふ事を待つて居りまする今日、夫をも思召さぬで此世を捨て廻國に出で給ふなどゝは餘りと申せば女々しい御心かと存じまする、常の御心にも似合はしからぬ事、此儀はよく〳〵御賢慮願ひ奉つりまする、又淀殿の嘆かせらるゝ所御道理とは存じ候得ど和子様のことは必らず思ひ諦らめさせ給へ、又もや御子を儲け給ふことも候はん』諫める言葉を聞き給ひて秀吉公 秀『治部それは尤もぢやが、捨若は如何ならん再び淀が若を儲けるといふこともあるべきか、大納言は何とする、秀長は如何いたす、大明を取つたとて餘命少なきこの秀吉これを秀次に與ふる心はないわ、賴みに思ひし弟には別れ、子まで失ひし因果な秀吉、もう此世に樂しみはない、戰は厭ぢや、坊主がよいわ』三『その樣なこと仰せられては……』秀『默れ〳〵〳〵治部うるさいッそこ退れ』恐ろしい御立腹だ、どうにも手が附られない遺の石田も手持無沙汰 三『恐れ入りました、この上は御意に入りの淺野彈正長政を召して』秀『長政は坊主にして連て往く、治部其方も坊主にして連れて參る』三『へイ』と三成も驚いた、長政と自分兩坊主などは餘り感心しない、其時淀樣に於ては 淀『之は治部我々が如何程申上ても御聞入れはない、この上は長政に申して政所樣と大政所樣に申上げ上樣の御心變らせらるゝやう計らひ呉りやれ、迚も妾の手には及ばぬ』と遺がの淀殿も匙を投げた、そこで據所ございませぬから三成も常には仲の惡い淺野長政に話をいたし政所樣に御意見を願つて、政所樣は御承知はなすつたが御自分の力に及ばないから、大政所樣へ申上げた、大政所樣にも大いに驚かせられ直に秀吉公を招いで段々と御意見をなすつたが今度は秀吉公中々言

ふことを聞かないけれども、このお母さんにいはれたときには餘程御心は動いた樣子でございましたが、行脚に出るのは止めませうとは仰しやらない、サア今は諸侯の面々その心痛は一方ならず、どうかして殿下の御心を飜へさせやうと互に相談をいたして見たがどうも巧い考へもない、そこで或る式日闔らずも殿下が聚樂の御表へ成らせられたる折柄、德川内府家康公、前田大納言利家公を始め五奉行は言ふも更なり、在府の大小名殘らず出で御意見を申上げた、最も德川公などは表面だけでございませうが、兎角かういふ場合ですから、人々と共に御意見申上げました、すると秀吉公は 秀『イヤ折角の意見ではあるが、予はどうしても坊主になる心已に決したり、重ねて云ふ事勿れ』と仰しやつて頑として動かない、實に厄介なことを云ひ出したもので、一同の人々も呆れて仕舞ひ、其日は夫れで濟んだ。

（第十六席） 曾呂利新左衞門諷諫の事、並に新左衞門米倉拜領の事

秀吉公が坊主になつて、諸國行脚に出やうと云ふ御決心をなされるについてどうかして其御心を變へさせたいと人々皆心を痛めて居りました、中に加藤清正、福島正則、加藤嘉明などといふ連中はイヤもう一通りならぬ心配だ、どうしたものだらう、これは誰といはうより清正と正則が往つて十分に御意見を申上げやう、幼年の頃より御側にをつたものだから、殿下も餘人の意見よりは耳を傾けられるであらうといふので、茲に主計頭清正と福島正則の兩人が改めて殿下の御前へ

參りました、秀吉公は兩人を御覽なすつて　秀『やア汝等又た予が坊主になるをとめに參つたか』加『恐れ乍ら天下の一大事……』秀『聞かぬ、常なら聞くが汝等のやうな者が參つて何を申したとて聞く譯にはならぬ、母上が御意見下されてさへ肯かぬ秀吉止めるなら其の時に止めてをるわ、今になつて汝等の意見を用ひる譯になるか』加『成程……』妙な話で、意見をしにいつて成程と感心する奴もないが二人の意見は忽ち落第と來た、どうにも仕方がない、兩人驚いて御前を退りこれから又た御譜代一同と色々協議をしたが中々協議が纏まらぬ、すると是は寧そ御氣に入りの曾呂利新左衞門を賴んで御意見をして見たらどうだらう、彼れのことだから屹度我々の思ひも附かぬことをして御意見をするかも知れないと言ひ出した人がある、一同今は思案に餘つてをる處ですからこれも宜からうといふので直に曾呂利新左衞門を呼び出して　加『新左今回殿下の御決心我々がどう御意見を申しても諸國行脚を御止りにならぬ、貴樣どうだ一つ殿下に御意見を申し上げて御心を變させられる樣にしてくれまいか』と云ふと新左衞門莞爾笑つて　新『エ、宜しうございます、そんなことは何でもございませぬ』加『何でもない……』新『ヘイたつた一言で私が御意見を致します』加『さう巧く往かぬ何でも一旦言出たら後へは引かぬ御氣性故』新『それは事によりません、殿下には大明を攻めやうといふ思召しがあるこの大明攻を御止しやうとした所、夫は迚も出來ませぬけれど諸國行脚を止るなどは朝飯前の仕事で、こゝ新左衞門一言で止めて御覽に入れます』加『ウームさうかな、けれども殿下は何でもやらうと仰しやる……』新『そこです私も貴下方よ

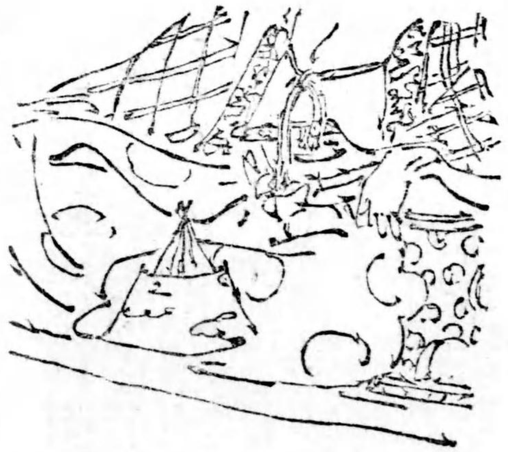
りも御氣性は知つて居ります、之は勸めるに限ります……』加『何をだ』新『行脚をなさいゝと言つて……』加『そんなことを言つては大變だ……』新『ハツ〳〵〳〵貴下方は御勇氣は御有りなさるが、かういふことに掛ては素人で、まア〳〵この新左衞門に御任せなさい、けれども人を只だ使ふといふ法はないことは御承知でせう、加藤樣などは今迄一文だつて呉れたことがないから』加『やアそんなことをいふな何でもやるわ清正が手を突て賴むのぢや』新『賴むとあれば宜しい、福島樣貴下はこの間私しに拳固をくれましたな、どうも不都合千萬な話しで、そこへ行くと石田樣などは豪い者ですせ、何かといふと新左、少々ばかりだがと云つて色々なものを下さる、貴下は何かといふと直に拳固を下さる俺のやるのはこれだ、ポカリは驚いて了ひますせ、今日も拳固ですか、それ次第で私は殿下を無暗に煽りますから』福『やア今日は拳固はやらぬ何でも望みのもの

をやる刀が欲しければ刀金が要るなら金、何でもやるからどうか御意見を賴む』新『よろしい金などは貰つても仕方がない、ちやア加藤樣や福島樣から確かに貰つたといふ證據の品を……福島樣から大小、加藤樣からは御紋附を頂きませう』福『御意見をしないうちはやらぬ』新『イエそれなら御免蒙ります』福『サア遣はす〳〵厄介な男だな』加藤も福島も一言もない茲で望みの品をやつて御意見を賴みました、この曾呂利新左衛門といふは何誰も御存知の通り滑稽の方に掛けては有名な人物でございます、此人については色々面白い御話しがございますが、秀吉公も其の無邪氣にして而も才智溢るゝごとき新左衛門の人となりを大層に御愛し遊ばして何事にも新左々々といつて目をかけられて居られました、すると或日新左衛門は秀吉公の御前へ出で御機嫌を伺ひ急に思出したやうな風で 新『エ、承まはると天下を知ろし召すやうな大豪傑の御方の耳の匂ひといふものは餘程變つて居るとか申すことで、甚だ恐れ入りますが、私に殿下の耳の香を嗅がしては下さいませぬか』と妙な事を言出したから殿下も驚いた 秀『ウーム、俺の耳の匂ひはそんなに變つて居るか』新『變つて居りますとも大變好い匂ひで麝香などは迚も追つ付きませぬ、人には分りますまいが私に氣を付けて居ると能く分ります』秀『左樣か、許す嗅げ〳〵』新『どうぞ 私の望みます時に嗅ぐのを御許し下さるやう』秀『宜しい、何時でも嗅げ』新『有難き仕合』と耳を嗅ぐ御許しを得た、妙な人もあれば有るもの其後間もなく式日が來たので當日は大小名總登城御祝ひを申し上げる、秀吉公には衣冠正しく笏を携へて正面に御着座、一同の人々は皆大紋か何かでそれへ居

並び頭を垂れて居ると、曾呂利新左衛門、何思ひけん秀吉公の居る上段の所へポンと飛び上つて、秀吉公の耳を嗅ぎ始めた 新『ア、好い匂だ……』秀吉公もこれには驚いたが、併し何時でも嗅げと言つて許してあるのだから叱る譯にもならず其儘自由にさして置と新左衛門は頻りに耳を嗅いで小聲で好い香だ〳〵と言て居る樣子は恰度秀吉公に何か耳語いて居るやう其内に新左衛門ポーンと下へ降て自分の席へ歸つたが暫らくすると又上つて往つて秀吉公の耳の香を嗅いで居る、下りたかと思ふと又上がる、居並ぶ大小名はそれを見て『あの野郎何の眞似をしやがる……』と思つて居ると石田三成は新左衛門に向つて 三『コレ何で貴樣は彼處へ上つてペチャ〳〵して居る』と聞くと新左衛門は勿體らしくも 新『實は殿下から仰付りまして、諸大名の樣子を窺ひ、五奉行其他の擧動を窺つて其善惡可否を内々に告げろと云ふのでそれで私が皆さんの事を申し上げた、全體貴下などは何うなるか分りませぬぞ』と言ふと三成は驚いたがどうにも仕方ない、其内に式は濟んで殿下はお立ちになつた跡で三成が人々に話しをすると、一同は呆れた、まあ殿下には何たる事をなさるのだらう、使ふ者に事を缺いて新左衛門を穩密に使ふとは驚いた』と言つたが、少し怪しい連中は氣味が惡い ○『新左、お前に之をやる、どうか御前體宜しく申し上げて呉れ』新『どうも有難うございます』▲『新左衛門之をやるから何分賴む』と言ふので方々から色々なものを貰つた、詰り賄賂ですな、智者の三成も是れには一杯食はされて莫大の金を新左衛門に與へた中に呉れないのは加藤と福島だ、我々は正廉潔白、汝如き者に一錢たりとも與ふべきかと言つ

て少しも動かない、終ひには止せば宜いのに新左衛門此方から催促をした　新『何か頂きたい』と言ふと、福島正則は赫と怒つて　下『己れ無禮者、催促をするとは何事だ、夫れ程欲しくば之をやる』と突然拳を固めて新左衛門の頭をポカリ撲つた、新左衛門驚いたの何のつて頭を抱へて逃げ出した事がある　さう云ふ事があるから新左衛門は今加藤や福島から殿下の御意見を頼まれた時に二人にポン〳〵やつ附けたので、據所ないから二人も閉口をして仕舞ひ、加藤は着物、福島は大小をやる事になつた、早速其品々を取寄せまして新左衛門に與へると新左衛門に於ては直に其着物を着込み大小を差してノッ〳〵秀吉公の御前へ出掛けて往つた、秀吉公は曾呂利新左衛門の姿を御覽なさると秀『オウ新左か』新『へイ』　秀『大層見事な服裝をして參つたな、オウ清正の紋が附いて居る』

新『へイ加藤樣に頂きましたので』秀『清正はなにか申して居つたか』新『へイ殿下に色々御意見を申し上けたが御聞入れがない、どうも此上は仕方がない殿下が諸國行脚に出掛けなさつたら、自分達も坊主になつて御供をすると斯ういふて居られました』秀『ウム清正が』新『加藤樣ばかりではございませぬ福島樣



も今日か明日坊主になつて御供するといふことで』

秀『ウーム』新『淺野樣と加藤樣と福島樣が三人御供でそれから此新左衛門も是非御供を致します、さうして五人坊主で日本國中殘りなく廻りませう、さあ斯うなりました上は誰にも知らせずそッと御出掛けが宜しうございます』秀『ウーム、加藤、福島も出掛けるか』新『へイ、もう事が極りましたのでまア〳〵結構でございます』秀『それは〳〵眞實ぢやの』新『左樣でございます』秀『ウーム然らば用意せエ早速髪を下そう』新『それが御宜しうございます、付きましては伺ひますが此の新左も供に御連れ下さいませうな』秀『それは不可ん貴樣は往かん』新『へイ私は御供が叶ひませぬければ私の弟がございます、是は御連れを願ひたい、是は中々豪い男でございますから』秀『何がえらい』新『一體殿下は天下の内で畏れるものはないと仰しやいましたな』秀『さうじや天下の中に此秀吉の畏るものはない』新『ないとは仰やいますが世の中にて畏べきは天狗でございます』秀『何ぢや』新『天狗といふものは何んなえらい人間でも捕まへてムシャ〳〵食つて仕舞ひます、殿下は幾ら偉い御心算でも大天狗に出遭つたら敵ひませぬ、岩谷天狗は何處

かへなくなりましたが……兎に角天狗は畏ろしいもので』秀『ハッ〳〵』新『御笑ひ遊ばすな、全くさうで其天狗を私の弟が退治をいたしました』秀『ウーム、どんな事をして』新『此の間弟が鞍馬山へ參りましたら二丈ばかりの大天狗が出て來て、曾呂利の弟汝を引裂いて食ふと申したさうで其時弟が食はれるのは據所ございませぬ、貴下はそんなに大きくて私はこんなに小さい、どうしたつて敵ひやしませぬから食はれませう、併し天狗樣は神通自在だと申す事で大きくならふと思へば天までも屆く又小さくならうと思へば罌粟粒程にもなるといふ事ですがさうですか、其の通りだ、そんなら少し小さくなつて見せて下さいませぬか、宜し小さくなつて見せてやると其天狗は急に一丈計りになつた、それは可けませぬもつと小さくなつて下さい、今度は五尺ばかりになつた、それでは珍らしくありませぬ、もつと小さくなつて此の手の掌へ乘つて見せて下さいといふと、忽ち一寸位になつて弟の手の掌へ乘つた、すると弟はやア見事〳〵、成程神通自在恐れ入りましたといひながら、夫れを口の中へ入れてムシャムシャ嚙殺して仕舞つた、大きな奴を小さくして嚙殺すなんて本當に偉いものでございませんか、幾ら天狗が神通自在だんといつても私の弟に遇へば忽まちやられて仕舞ひます、幾ら大きくてえらいと云つたつて、何の役にも立ちやしませぬ』とペラ〳〵喋舌立てた、秀吉公も始めの内は笑つて居らしやつたが、終には段々耳を傾けて來るやうになり、暫らく默然として居られしが思はず膝を打つて 秀『新左俺は諸國行脚は止めたぞ……汝の一言にて止めた、この秀吉を天狗に譬へたな』 新『

御分りになりましたか』秀『分らぬで何とする』新『ヘイ』秀『斷然止める一同の者を呼べ』といふので俄かに諸侯を殘らず御城へ招かれまして秀吉公『予は今日まで諸國行脚を思ひ立つて居つたが曾呂利新左衛門の意見によつて斷然止めに致した、皆の者安心せよ』と仰せられたので一同の方々は皆ホッといふ息を吐き喜びの眉を開いたといふ中にも加藤清正、福島正則は雀躍をして喜んだ、曾呂利新左衛門に厚く禮を述べ莫大の贈り物をしてその勞を報いたといふことでございます、さういふ次第で秀吉公は坊主になるのを思ひ止まりましたが、その實はもう疾うから止めやうといふ氣になつて居たので、それを見て取つて新左衛門が御意見を巧く入れた丈けのこと、是は裏面の御話ですが其の代り行脚は止めるが大明攻めを速かに行ふと來て、詰り大明攻めを早くやらうといふ思召しから、行脚に出るなどいふことを言張つて人心を動かして居たのでございます、それを見て取つたは曾呂利新左衛門といふ人物は容易ならぬ男です、秀吉公は新左衛門を召されて 秀『新左衛門、其方は能う意見をしてくれた褒美を遣はす、何なりと望め』新『ヘイ、それではお願ひ申すがどうか袋に米を一バイ戴きたいもので』秀『どうも其方は妙なことばかり申す奴ぢやな宜い〳〵袋に一バイ米を遣はす』新『少し大きな袋でございますが』秀『宜い〳〵』新『有難う存じます』秀吉公も詰らぬものを望む奴だと笑つて御居で遊ばした、すると十日ばかり經つての事御藏前の役人が青くなつて飛んで來て增田右衛門へ訴へた、右衛門もその訴へを聞くと驚いて秀吉公の御前へ來り 右『ヱ、曾呂利新左衛門が馬鹿氣たことを

致します』秀『どうした』右『袋も袋だ並の袋ならよろしうございますが土藏五十戸前も這入る袋を持つて參りまして土藏を皆な頭から被せてしまひ、この中の米を貰つたと申して居りますさうで』秀『何ぢや……』秀吉公もこれには呆れた　秀『新左を呼べ〳〵』御召しに新左衞門ノソ〳〵御前へやつて來た　秀『新左、貴樣は何といふ馬鹿な眞似をする奴だ、袋に米を一パイ呉れといつて土藏五十戸前も這入るなどゝいふそんな大きな袋を』新『イヤ實は手前も紙を切つて其袋を貼るには骨が折れました』秀『そうだらう』新『私も憚りながら殿下に御意見をして貰ふ米だ、小さな袋で貰つたつて仕方がないどうせ頂く位ならと存じて思ひ切つて大きい袋を拵へました』秀『厄介な男だ』新『これに付て一つ狂歌をやりました、御覽下さいませ』白紙へサラ〳〵と書いて差出したのを秀吉公が取上げて御覽なさると

古しへの神代もきかぬ米袋
からくくらにして米取らうとは

秀『何だこれは』新『これだけ私は頂かうといふのでございます、それでもどうしても不可んと仰しやるなら止むを得ませぬが……』秀『イヤ、不可ぬといふ譯ではないが何なり他の者を望めといふのだ』新『ヘイ、左樣でございますか』新左衞門暫らく考へて居た。

（第十七席）大明攻め評定の事、並に淺野長政家康を罵る事

稍やあつて曾呂利新左衞門　新『畏れながら願ひますが』秀『何ぢや』新『私が相果てましたらどうぞ幇等に何程かの祿を下し賜はりまするやう願ひます、それから私には旅行の免狀を頂きたいもので』秀『旅行とは……』新『イエ私が死にました時冥土へ旅行いたす其免狀を頂きたい、地獄の閻魔大王極樂の地藏菩薩が私に出迎ひをいたすやうな免狀を頂きたい……』と願つた、何處まで滑稽の人だか底が知れない、秀吉公御聞き遊ばして直に筆を取つて

此度娑婆より曾呂利新左衞門冥土へ旅行をなすに付いて秀吉、閻魔大王地藏菩薩に告ぐる、新左衞門其地へ參らば汝等早速出迎ひをなすべきこと、無禮これあるに於ては直ちに秀吉兵馬を向け地獄極樂を微塵にすべし、此事屹度相守るべきものなり

極樂地藏菩薩
地獄閻魔大王

秀吉印

とぶつゝけ書に書いて下すつた、新左衞門喜んだの何のつて、それから此の秀吉の判を捺さつた地獄極樂旅行免狀を振廻して歩いたといふ、實に變つた人物もあればあつたもの、之れは有名の新左衞門の旅行免狀の御話でございますが、さて秀吉公は愈々諸國行脚を止めた以上は速やかに大明を征伐なさんとあつて夫れ〳〵御用意に掛られるやうなこと、加藤福島などの面々は元より其事は望んで居るのでございますから、疾から内々支度を致して居つたので、イヤどうも恐ろし

い意氣組だ、其内に秀吉公に於かせられては此事を評議なさんといふので前田、德川、島津、毛利、浮田を始めとして譜代恩顧の方々はいふも更なり日本六十餘州の大小名を殘らず聚樂の城へ招かれた、其時秀吉公は正面に座を控へて一同の方々を見廻し　秀『如何に方々今や日本は太平にして萬民其堵に安んずるに至りしも、憎むべきは彼の明と稱する國にぞある、未だ我國へ一度の使者をさへ寄越さず、ほのかに聞けば朝鮮をそゝのかして我に敵せんとする樣子ありとか甚だ以て許し難し、棄置きなば他日我が日本に害をなすもの、我れ速かに兵を起して彼の國を攻めんと思ふが汝等は如何に思ふぞ、我は一ケ年の内には大明四百餘州を日本の物となすは難からじと思ふて居る、日本の内部の事は德川前田の兩所に賴み、我は外に向つて事に當らんと決心いたしたが、汝等否やはあるまいな』仰せられると淺野彈正長政夫れへ進み出で　淺『恐れながら大明攻めの儀甚だ以て御宜しからず、既に我日本は國内麻の如く亂れ萬民途端の苦しみを致し居りしを、殿下世に出で給ひて六十餘州の亂を平らげ給ひ、今は天下太平に至りしを、又もや兵を起して大明を攻め給ふなどは甚はだ心得ざる思召し、第一之れは無法の戰にして義士の爲さゞるところ猥りに人の國を侵略するは神々ともに怒る處にて候、殊に後の世に生れしものは秀吉は只利慾にのみ走る大將にして蒙古の忽必烈に均しきものなりと笑ひもせん、何卒此儀は御止まりくだされたく彈正長政伏して願ひ奉つる』と申上げる言葉に續いて前田利家も『之れは彈正の申すところ一理あれば殿下には篤と御賢慮遊ばして然るべく』と御諫め申したが秀吉は少しく意外の思ひ

暫らく何の言葉もなく只利家の方を見てゐられしが、稍々あつて面を正し　秀『ウム前田殿の御言葉なれば我もそれを用ひたくはあれど、此事ばかりは從ふ譯には相成らぬ、其許も知らるゝごとく我天下を一統なせど、大明よりは一度も祝ひの使者もよこさぬ、餘りの無禮、これを此儘に棄置きなば我武威は地に墮るの道理、如何に大國なればとて少しも畏るゝ處なし神州男子の向ふ所何者たりとも之れを遮ぎることの能ふべきや、長政汝が我を止むるは臆病なるぞ、軍馬を海外に出して我皇威を輝かすは今日なるぞ、德川殿御身は何と思はるゝ、其許の意中聞きたく存ずる』仰せに德川家康公靜かに口を開き　德『如何にも之は殿下の仰せのごとく、軍馬を大明に向けるは今日を以て最上の時と致す、大明攻めの儀は家康奮つて御同意仕まつる、速かに御出馬遊ばして然るべし』と申し上げる、秀吉公それを聞いて莞爾と微笑み　秀『オヽ左樣か德川殿が斯く仰せられるゝからは何も此以上申す所はない、一同の者縱も否やはあるまいな』と仰しやつて大層な御喜びだ、何しろ秀吉公の決心が固い所へ德川公が贊成をしたのですから、今は評議も茲に一決いたしましたやうな事、其樣子を見て淺野彈正長政は双眼よりハラ〳〵と涙を流して　長『ア、悲しいかな、眞に國の爲を思ふ者ありとも、他に其言葉を打ち消す者あるとは是非もなし、殊に加藤福島などは賤ケ嶽山崎の昔しの戰は未だ忘れ給はざるか、如何に武勇に逸ればとて斯く迄に血を流すを好むとは情けなし、夫れに此御席には狠のやうな武士、狸のやうな大々名が居つて、人の隙を覗ひ世の中を化して居るから、迚も天下は太平にはならぬ、ア、〳〵狸武士が居るから我

我のいふ事は更に通らぬ、ア、情けない……」と家康公の方を見ながら長政は大きな聲で怒鳴つた、すると家康公が　德「アイヤ長政、狼のごとき者が居つて人を覘ひ、狸の如き大名が居つて世の中を化すと申すが、其狸とは誰ぢや、狼とは誰ぢや名前を指して見い」長「オウ指せとあれば指して見ん、それは誰でもない、德川殿、御手前こそ其の狼なり、狸なり、表に柔和の相を裝ひ蟲も殺さぬ風をして居りながら其實天下を覘ひ豐臣の家を奪はんとする狸爺、狼武士、グズ〳〵致すと許しはせぬぞ……」イヤもう恐ろしい勢ひ、道がに並び居る人々も是れにはアッとばかりに驚ろいた、家康公もアッと思はれると秀吉公大音に「やア無禮者奴、內府に向つて斯る言を發する己れ長政、覺悟を致せッ」と秀吉公は烈火の如き御怒り、もう今は長政も自暴だ、少しもそんな事には驚かない　長「エ、御怨りの段恐れ入りました、なれども全く德川殿は豐臣の家を覘ふ恐ろしき人物でございますから、油斷は出來ませぬので、狸や狼に强增さる……」と尙ほも言葉を續けて德川殿を罵倒なさんと致したから、秀吉公も今は堪り兼ねて　秀「まだ〳〵申すか無禮者奴ッ」大喝一聲、御佩刀へ手を掛けられた、其の時前田利家席を立つて秀吉公を止め　前「アイヤ暫らく、お止まり下さいまするやう、御立腹の段御尤もには候へど、先づ〳〵暫らくお待ち下さるやう……、長政其方が惡い、お詫びを致せ……、德川殿にもお腹も立たんが、彼れも國家のためを思ふて申せし心算ならん、拙者より長政へは能く申し聞かせまする程に、今日の所は御勘辨を下さるやう」溫厚の利家が仲へ這入つたので、秀吉公も佩刀を放して席へ直られる、德川公は笑

ひ乍ら　德「やア淺野彈正の正直な所は家康能く存じて居る、長政は忠義な武士でござるな、先づ先づ殿下に於ても御心安く思召せ、御立腹なさる事はござらぬ」といつて少しも長政の惡口を氣にかけられない樣子、一同の者もホッといふ息を吐きましたがこの騷ぎのために肝心の評定は其の儘になつて其日は退散、然るに德川殿が御屋敷へお歸られると、本多大久保一家の人人は申すに及ばず酒井、榊原などいふ家臣の面面、今日御主君が聚樂の城中において淺野長政のために惡口されたといふのを聞いて何れも切嚙をいたして口惜がり、この上は速やかに淺野の屋敷へ斬込んで長政を討つて了はん、ソレ槍よ刀よと騷ぎ立るから家康公はそれを制して　家「コレ〳〵騷ぐな〳〵、乃公は狸でも何でも良い殿下は戰をしなければどうしても往かぬのぢやもし乃公があの時御止まり遊ばせと言へば大明攻

めは止めて仕舞う、大明攻めが止めになれば今度は目の上の瘤は德川ぢや家康ぢやといふので乾度關東攻めとなる、それも關東の固めが十分に出來て居れば少しも驚かぬが今日の所はとても天下の兵を引受けて戰ふことは覺束ない、今ま殿下が大明攻めをすれば其の内にはこの家康が腕を奮ふべき機會も起る、其時こそ天下は一呑みぢや何にしても淺野は能く見た全く家康は狼ぢや狸なのぢや、化かしたぞ、ハッ〳〵ハッ』暢氣な人もあつたもので、さすがに家康などゝいふ人は違つたもの、家來の人々も其の深謀遠慮に感心をして、長政を討たうといふことを止めたと申すことがございます、さア其の内に秀吉公の方では先づ朝鮮へ兵を出し、朝鮮を手に入れて明へ攻め込まうとの考へ、それに付き總大將を誰にしたものであらうかといふので、先づ第一に德川公へ御相談があつた、けれども家康公はそれを受けない、私は國内にあつて殿下御出陣の跡を御預り致しませうと言つて巧く逃げて仕舞つた、そこで今度蒲生氏郷へ對して御沙汰があつた、すると氏郷においては雀躍りして大に喜び、有難し辱じけなし、今は奥羽へ山流し同樣に相成つて居るこの氏郷、日本では思ふ樣に働くことも出來ない、速かに兵を率ゐて朝鮮より大明へ切り入り、分取功名は思ひの儘、そして我は朝鮮の王にならんといふて恐ろしい勢ひ』氏『恐れながら願ひ上ます、氏郷朝鮮に出向きますに就ては會津百萬石を返納致します、其代りとして、朝鮮の土地は拙者の切取りといふことに願ひたい』秀吉も是に驚いて、是は大變マゴ〳〵すると氏郷奴向うのものと合體して反對にこの乃公へ攻掛つて來るかも分らない、とても氏郷を向ふへやる譯には

往かぬとあつてこゝで氏郷は止めて浮田秀家を總大將にいたすことになつた、先陣の大將は加藤主計頭清正、小西攝津守行長の兩人これを承まはり、總體の同勢十萬餘人、愈々朝鮮へ向ふといふことに極りまするとと、秀吉自身は肥前の名古屋まで出陣を致し機を見て跡より彼の地へ渡らうとの決心それ〳〵支度に怠たりなく、もう明日か日にも出發をしやうといふ有樣に相成つた、

加藤小西福島の人々は申すに及ばず武勇に充ちたる大小名、何れも勇氣勃々として出發の命の下るを相待つてをる、市中ではもう寄ると集ると此の噂ばかり殺氣到る所に充ち〳〵たるの有樣でございます、すると此の事を秀吉の阿母さん即ち大政所が聞かれて大層な御心配、どうか止めたいと思召して直ちに政所と三條の局、加賀の局をお招きになつて色々とお話があつた

大『どうも秀吉においては如何なる考へにや、幸ひに天下を一統なし今に日本國中安らかに治まつてをるものを自ら事を好んで兵を動

かし而も自身朝鮮へ赴くなどゝは以ての外のことである、何とかしてこれを止める工夫はなきものにや」仰せられた時に政所に於かれては其の御心を察し政「お年寄られた母上様、その御心配は御尤もに存じまする、元より此度のことは餘程固く御決心遊ばしての事にございますれば容易なことでは御止りになりますまいが、兎に角これへ上様の御入來を願ひ御意見申上ぐるやういたしませう」大「これ宜からん早く〳〵」政「畏りました」大「これに付ては次も是れへ招きまするやうに」政「ハイ」爰で直に御舍弟三好秀次公をお招きになり、共に殿下の御成りを願ふことに成りました、此方は秀吉公、急に阿母さんのところからお招きになつたといふのを聞かれて、如何なる事にやあらんと不審に思召し御小姓を連れられたる儘、大政所の傍に出ますと加賀の局、三條の局が坐つて居る、三好秀次も居ります樣子に秀吉公はハ、ア判つた、今日己を呼んだのは朝鮮征伐の事にやあらんと思召したが左あらぬ體、大政所の傍に設けてある御席へ來つてピタリと座した、其の内に三條の局が御茶を立てゝまゐらせる、秀吉公は局の顏を御覽になつて 秀「局、今日は如何なることにて我を大政所の御室へ招きしぞ」局「ハイ上樣をこれへお招きいたせしは大政所樣の御意にございまする、上樣へ直々申上たきことありとの大政所樣の仰せにございまする」と申上げたゞ秀吉公は天下を一統し千古未曾有の英雄なれど、母に仕へて至つて孝心、いま阿母さんが用があつてお前さんを呼んだので、用の次第は阿母さんからお聞きなさいと言はんばかりの三條の局の一言に、秀吉はハッと身を謙遜り母の前へ兩手を突へた、秀吉さへ斯の如し實に親

たるものは貴ときものに違ひない、然るに親を粗末にいたす人物が大分世の中に見えると云ふは情けなき事にございまする、秀吉公は母の事と云ふと我身を忘れて之れに仕へたもの、今ま其の母の前へ兩手を突へ母の御顏を見上げて 秀「今日の御招きは此の秀吉へ如何なる仰せあつてのことか、承はりたう存じまする」と恐る〳〵申入れた。

（第十八席） 大政所憂慮の事、並に朝鮮へ出軍の事

そのとき大政所は秀吉公の樣子を暫くみてをられましたが稍々あつて 大「關白殿に斯ることを申すも女子の身として拙なき儀には侍れど、政所を始めとして三條の局加賀の局も一方ならぬ心配御身が此度朝鮮攻めをなし自から出馬に及ぶとの事聞いて皆な心を痛めてをる、淀が生みたる若が此の世を去りしは是非なけれど、それが爲め心狂ひて其の樣なことせしとあらば却つて後の世の笑ひの種ともならん、譬へ兵を出すとも御身自から出馬致すには及ぶまい、秀次もをることなり又諸侯の内には德川殿も在はすこと、夫れらに萬事を任して御身の出馬は思ひ止まつて宜しからう、少しは此母の心も察し餘り出過きたことをせぬやう賴みまする、此年になつて只杖とも柱とも賴みに思ふは御身ばかりぞ」と涙ながらに仰せられたる時には追がの秀吉それを承まはつて身體へヒシ〳〵と應へた、暫らくは何の言葉もなく默然として居られしが軈て政所の方を顧み 秀「ウーム政所それは其方が母上へ願ふてこの秀吉を苦しめるのぢやな」といふ、政所は色を變へ

政『何で妾が其の樣なことを願ひませう此度の儀に附ては私共さへ一方ならず心を痛め居りますれば御年寄られた母上の御心の中は如何ばかりかお察し申し上げまする、母上樣の御心を斯く迄に苦しめ給ふても御自分の我意を御通しなさる思召しか少と御賢慮遊ばせや』といふ語に續いて加賀の局も加『恐れながら御年とても六十路に近き殿下樣もし荒き風に當てられて御身體を損じさせ給ふやうなことありなば大政所樣は元より妾共の嘆きは幾干か、どうぞ御出馬の儀は御止まり遊ばして……』と秀吉公の膝に縋つてヨヽと泣く、秀吉はそれを聞いて秀『ウム御身等は皆婦人の身なればその心使ひは左もあらん、なれど秀次汝は男子の身と致して何故斯る席へ來りしぞや、臆病にも程がある少と嗜なめやッ』と恐ろしい御叱り、秀次は只もう恐れ入つて秀次『恐れながら申し上げまする、此度のことを大政所樣には聞し召されて御心痛一方ならず、この日本といふ尊き國を跡にして海山越えし他國へ往きなば、水變りと土地變りで殿下の御身に如何なる災ひあるやも圖り難しとの御心支ひ、この秀次にも宜しなに御意見申し上げよとの仰せを受け、これに列なり居りまする』といふ言葉の終らぬ内秀吉公は大音に秀『白痴奴何を申す、高の知れたる朝鮮大明四百餘州を一握りにするはこの秀吉の方寸にあり、夫に蒙古以來彼の國は我日本を機あれば手を入れんと致して居る、今秀吉が大兵を以て彼を討たば彼れ愈々我勇氣に恐れて日本を窺ふことは縱もあるまじ、今此儘に棄置いて後年に彼の國より玄海の波を荒し、九州へ向ひ來るやうのことありなば、何を以てこれを防ぐか』秀次『畏れながら若し敵寄せ來りなば忽ち打つ

てこれを落さん……』秀『默れッ、攻勢を取る者と守勢を取る者と何れが利なりと思ふか、事は攻勢を取るに如くことなし、母上にも御安心あれ、秀吉はまだ中々若うございます、老いたりと思召すのは餘程の違ひでございます、秀吉今年まだ六十には四年も間がございます、七十迄には十四五年も候へば、それまでは大明を我領土となし勃海灣を池として御座船を浮べ御機嫌を伺ふやうにいたしますれば御安心遊ばせ』と大氣焰を吐き出すと大政所は苦い顏をして聞いて居られたが大『秀吉何を言ひなさる、それが惡うございます』ピタリと押へられて秀『ハッ……』流石の秀吉默つてしまつた、大政所においてはどうしても今回秀吉の出陣を止めやうとの思召し政『秀吉御身は心のみ大きくして身の治まりを知り給はぬが御身が出馬いたして後ち身體には別條なしとするも、跡に如何なるものが潛みて叛逆を起すやも知れぬ、其の邊のことも篤と考へて呉々も出發の儀は思ひ止まり呉れまするやう少しは此母の身にもなつて給はれよ』と言ひつゝ兩袖を顏に當てワッとばかりに泣き伏し、秀吉も母の歎きを見ては胸も張裂く思ひ共に涙に暮れて秀『恐れ入りました申譯はございませぬ……』と言つてその儘悄然として母の前を辭した、流石の秀吉も今はどうすることも出來ず、殆んど弱つて據所なく出陣は一時見合せとなつた、加藤や福島や小西などは非常な意氣組で今にも出陣の仰せが下るならんと待受けてをる所が案に相違、阿母さまが泣いたから出陣は暫らく見合せと來た、加藤小西の連中も是にはアッと驚いた、中にも福島などは大不平福『どうも殿下は母親に遇つては御仕舞だ、餘程この節はヤキが廻つたよ、昔しの殿

下とは丸で違ふ』小『さうだ〳〵妾にベチャ〳〵やられお婆さんにまでゴチャ〳〵言はれて氣が變つたのだ、など丶何れもブツ〳〵言つてをる、けれども其中で一人清正だけは決して不平を言はない、只涙をハラ〳〵と流して考へてをるから福島正則が 福『オイ〳〵清正何で泣くのだ』清『ウーム忠臣は孝子の門より出づとは實に宜なるかな、君は母上に大の孝行、從つて君にも忠なり不肖清正の如きは、母と云つても今はなく、親といふものこの世になければ孝を盡さんと欲するも意に任せぬ、我君は御年六十路に近うならせられて、まだ大政所は御健在、今や天下を掌中に握り給ひ、榮華を盡し給ふ御身にて、孝道を忘れ給はぬとは實に人の龜鑑ぞや、さればこそ天子へ對しても忠勤を勵み給ふ、北條や足利は如何に豪しと雖どもとても我君には及ぶべからず、斯る御方なればこの度の大明攻めのことも必らず此方の勝利となることは疑ひなし親に孝なる我君の御心中御察し申し上れば、どうしてこれが泣かずに居られようか、之を泣かずに笑らふがごとき奴は不忠なり不義なり、福島貴樣などは不忠不義の奸賊だ』福『やい清正餘りと言へば亂暴なことをいふ……』清『愚圖々々言ふな、不忠不義でないと言ふなら汝も泣け』福『オヤ泣くとも泣かないで置かうか、ソラ泣くぞワアッーワアッ』泣出した、小西行長も加藤嘉明も負けずに『己も泣く拙者も泣く』と言つてワアッワアッと手放して泣出したが、何だかこの人達の泣くのは高調子で餘程妙だ、宛で犬の遠吠か何かのやう、實に滑稽であつたさうでございます、然るに大政所においてはまだ〳〵安心をせられぬと見えて、今度は淀殿を招んで秀吉公の出陣を止めさせやうとした、淀殿は今殿下が出陣をなさるといふと跡で政所が何をするか分らぬ、三條の局が如何なる事をやるかも知れぬ、どうしたら宜からんと思つてをつた所ですから、早速それを承知致し恰度、殿下が成らせられた時にワッとばかりに泣伏して又もや例の侫辯を揮つた、如何なる英雄豪傑も巧みに企みし美人の舌頭に掛つては時々其の本色を暗まさるゝものか、开も秀吉の愛妾淀の方はどうかして秀吉の出陣を止めたいと樣々に苦心を致して居つたが、夫も大政所や政所の如く秀吉が出陣しなば跡には己れが思ふやうな事が出來ぬと云ふ、言はゞ勝手な心から之れを止めやうの考へ、或る時秀吉公が自分の所へ成らせられた其の折にワッとばかり泣き出した、秀吉公は夫れを見て大に驚き 秀『コレ淀、何で泣く、何か氣に叶はぬ事でもあるか遠慮はない、申せ〳〵』と背を擦つて最と柔かく之れを慰められた時に淀殿は 淀『上樣は此度朝鮮國へ御出馬遊ばされるとの事何卒之れを德川殿へ御賴み遊ばして御自身御出馬の儀は御止まり下さるやう、和子樣は此世を去り給ひしとは言ひながら、第二の和子樣を儲けまする此淀、今上樣が御出馬遊ばしなば跡に殘りて如何ばかり心細くや候はん、どうぞ不憫と思召し御出馬思ひ止まられ側に居て下さるやう』と又もやヨ丶とばかりに泣き伏す樣子、秀吉公もこれが爲め『ウーム、さうだらう〳〵、宜し〳〵暫らく見合せやう……』全く鼻下長になつて、垂涎三千丈で鼻の下を延して、これで愈々征伐延期と成る、前には大政所に泣かれ、今度は淀殿に泣かれた秀吉は其の泣かれ工合は大變違つて居るが、兎に角心動いて征伐見合せとはなりましたが併しこれで止め切りとなつたのではない、其

の後間もなく朝鮮征伐の評議再興する樣なことになつたは是非もないそれは後の御話でございますが、兎も角にも一時は御出馬見合せといふことになつたので、奥向の人々は何れも手を打つて喜んだ、其の當座は聚樂の城中相も變らず春めき渡つて天下泰平を歌ふて居ると、どうした事かこの頃は秀吉公少しも淀殿の方へ御成りがない、當時淀殿は北の政所と言はれて飛ぶ鳥を落すの勢ひ、秀吉公御寵愛は日に加はるばかりでございましたが、この頃御足はピタリと止まつたので淀殿は元より御付の女中達も皆な心を痛めてをると、或日大藏の局が淀殿の前へ參りました大『エヱ申し上げます、どうも容易ならざることが出來ました』淀『何事ぢや』淀『實は只今人を以て三條の樣子を探らせました所三條の局は姙娠致し居るとの事でございまする、上樣にはそれを御聞き遊ばして御喜び一方ならずこの頃では始終三條の局の方へのみ御成りになるとのこと、此方へ少しも御成りのなきは右のためでございまする、何に致せ貴下樣の和子を呪ひ殺してそして己れ姙娠に及ぶなどゝは何たる憎い女子でございませう、これは何とか處置を附けねば相成りますまい、もし御男子御出生にでもなりなばそれこそ貴下は生涯埋れ木、芽の出る時はございませぬ』と言はれて淀殿ブル〳〵と身を慄はせ、三條の局の居る御殿の方を睨んでをりましたが淀『ウーム、左樣な事にてありつるか、愈々夫が眞實ならば此儘に棄置く譯には相成らぬ、憎くき三條の局、己れ何うするか見ろッ』と恐ろしい怒り、是から暫らくの間大藏の局と何やら相談をして居りましたが軈て淀『大野修理之介を呼べ』といふので修理之介を招いで尙ほも三條の局を苦しめる事に就て密談に時を移して居りました、これより淀殿如何なる巧みをいたしまするか又もや秀吉公家庭の波瀾今度は少し激烈なる騒動になりますが、

さて秀吉公は大政所や淀殿の諫めにより一時朝鮮攻めの儀を延ばすといふことに相成りましたが、併しもう十分

に支度も整ひ、大小名も皆出陣をする氣になつて居る所どうしても此の儘止め切りにすることは出來ない、遂にはどうあつても自分出馬をしなければならぬやうな事情に立至りましたからもう仕方がない、無理にも大政所を宥めて出陣をしやうの決心、さア市中では大變な評判だ、愈々關白樣は御出陣になさるさうだ、今日にも御渡海になる、イヤ明日は御渡海になるといふ騒ぎ、すると或夜聚樂の城門へ貼札をした奴がある、番人が見付けてその紙を取つて見ると、

太閤が一石米を買兼ねて
今日もごとかい明日もごとかい

御渡海々々といふ評判ばかり高くて更にその模樣が見えない所からさういふ惡口を言つたものと見える、それが秀吉公の耳へ入ると、イヤもうその憤り一方ならず『ウーム無禮な奴もあるものかな、今は猶豫は相成らぬ、此の上は速かに出馬に及ぶべし』といふので、今度といふ今度は非常の決心にて大政所へも無理に申し上げて、愈々文祿の元年三月の二十六日朝鮮大明征伐のために御出發といふことに極つた、何がさて世に時めく秀吉公の御出陣、その派手やかなることは實に譬へやうもない、落中落外の人々は此の先き如何なることになるべきかと只もう驚いて居るばかり、此の邊の所は詳しく申し上げませぬ、元より朝鮮征伐を表面から辯ずる必算ではございませぬからこの邊の詳しい御話は省略をして置きますが、此時先鋒隊としては加藤、小西の兩將續いて宗、松倉、鍋島の面々第一軍として夫れへ進み、黑田、毛利、島津、大友等の人々は第二

軍として出發に及ぶ、次には高橋、秋月、伊東の面々第三軍として進まれる、福島、戸田の第四軍、細川は第五軍、長曾我部は第六軍、小早川、立花は第七軍、毛利輝元は第八軍としてこれを總押へとなし總勢茲に十三萬人、又水軍の方は藤堂加藤の面々にて同勢九千二百といふのだ、して見ると其の頃水軍といふのは至つて少なかつた、陸軍は多かつたが海軍はその割には往かなかつたのでございます、尤も秀吉もこのときには船を盛んに造りは造つたけれども、急造りだからどうも思ふやうに往かなかつた、この水軍の方が十分でなかつたばかりに我が日本は非常な不利であつたのでございます、どうしてもこの外國と戰をするには海軍が十分でなければ思ふやうなことは出來ない、秀吉早くも夫れへ目を付けたのだがどうも十分に往かなかつた、兎に角文祿の昔しこの海軍へ目を附けた秀吉は凡人ではない、今日秀吉をしてこの世に在らしめたら何うでございませう、大いに海軍へ目を附けたでございませう、イヤ當時は秀吉にも彌增さる家康より豪い方々が澤山居られますから、何も秀吉が此世へ來たとて何の役に立たぬかも知れませぬ、まアそれは其れと致しましてこの朝鮮征伐のとき秀吉の勢ひといふものは前代未聞、イヤもう恐ろしいものであつたといふ、秀吉公の周圍に從ふは德川、前田、伊達、蒲生、最上などゝいふ大々名、何れも手兵を率ひて乘出す、この人々の同勢ばかりでも七萬三千といふのだ、出發のときには大政所も政所も皆これを見送つて出發を祝し市中の人々も皆聲を擧げてこれを送る、今日の言葉で申せば萬歲々々の聲天に轟くといふのでございませうか、實に盛なる出發であつた。

（第十九席）三條の局加茂御代參狼藉に遭ふ事、並に淀君謹慎を申付けらるゝ事

さて秀吉公には朝鮮征伐として文祿の元年三月に京地を出發に及ばれ、千成瓢の馬章を空に飜へし、勇氣凜々として四月には安藝國へと乘込んできた、嚴島明神へ參詣を遂げ、それより長門の國へ渡つて赤間ヶ關は阿彌陀寺にて安德天皇の廟所を拜し奉まつり、それよりいたして筑前の國へと押渡り有名の千代の松原において釜を掛け、茶を立てられたなどゝいふ風雅なこともあつたが、遂に何の障りもなく肥前の名護屋へと乘込んでこゝに本陣を構へられました、しかして日日軍事に心を碎き少しの暇とてもなく努めてをられた時に御話變つて此方は京地においては大政所も政所も一方ならぬ御心配、殿下の御身に何事もなかれよかしと諸事諸山へ祈誓をかけ秀吉公の無事を祈つて居られた、すると玆に珍事の起つたといふは例の淀殿が前回にも申上げました如く三條の局が妊娠をしたといふのを聞いてその驚きは又別段、口惜しさと嫉ましさで身を切るゝ思ひ、何とかして三條の局が全く妊娠して居るのかを確め、妊娠致して居つたら一つ思ひ切つたことをして彼を苦しめてやらねばならぬと、大藏の局や大野修理之介と相談の上尚も三條の局の樣子を探つて居ると、此頃三條の局は大政所の代參として下加茂上加茂へ折々參詣すると云ふ事を聞出した、そこで淀殿は早速此下加茂の傍らに織田内大臣殿の御別宅があり、而も内大臣殿は

當時秀吉公に從ひ出征中にて不在なるを幸ひ此別宅を借られた、時は折柄五月雨の降りみ降らずみ定めなく杜鵑の聲も最と哀れ、加茂の流れも水增して砂利を洗うて流れ往く有樣は又一入、圖らずも淀殿の其の身を養ふとて此の流れの岸に立つたる織田殿の屋敷へ移られたが是へは始終石田、增田等の連中か出入を致して居りました、深き巧みあつて是へ淀殿が移られたとは夢にも知らぬ三條の局、或る一日大政所の御名代として加茂の神社へ參詣を致して元より微行のことなれば供の者とて極く僅か、今參詣を終つて社内を出でしときは五月雨も晴れて雲は千切れ〳〵、絹被ぎて揚輿に乘移つたる三條の局、小者等に擔がれて社内を出で一町ばかり參りましたる折しも何れより現はれたるかバラ〳〵とそれへ駈來つた十人ばかりの武士、物をも言はず小者等を脅やかし供の者を取つて投げ輿の内より三條の局を引出したるは言はいでも知れたこれ大野修理之介の一味の者、アレッといふ間もあらばこそ、忽まち局を引抱へ織田殿の屋敷へと駈込んで仕舞つた、供の者は驚いて只アレヨ〳〵と騒いて居る所へ、丁度玆を通り掛りましたのが秀次公の小姓にて美男の聞へ高き不破伴作といふ人物だ、當時京地にあつて誰知らぬものはない評判の美男でこれがまた中々の人物で三條の局の供の者より委細のことを聞いて大いに怒り「ウーム、人もあらうに大政所樣の御代參たる其人に無禮を加へるとは奇怪なり、猶豫はならぬ、御身等は早く此事を政所の方へ知らせよ、五奉行の方へ訴へよ、不肖なれども不破伴作是より屋敷へ乘込んで局を御助け申さん」と矢庭に大小確乎と握り躍込んだる織田公の屋敷、折柄日はトップリ暮れて仕

舞ひ麗なれども月は雲間を洩れて下界を照す物寂しさ、伴作首尾よく局を助け得るや否や、伴作の大難美人の懸想種々なる波瀾是より演じます、扨て大野修理之介の一味十人ばかりの者は追つ取刀で纖弱き三條の局を引出し、織田殿の屋敷へ連れ込んで奥庭へと引据ゑた、局も今日は下げ髪に朱の袴といふ扮裝ではなく、微行の事でございますから絹衣を身に纏うて絹打被ぎて輿に乘つて居る所を押へられたので何に致せ秀吉公の愛妾、其の美しさは又別段、今ま庭前へ引据ゑられて口惜しさ無念さ言ふばかりもなく、只ヂリ〳〵致して居る所へ、淀殿は靜々と先へ立出られました、跡に續いて大藏の局に饗庭の局を始め其他大くの女中達も皆夫れへ出で來り『茲な下司奴、其方は何で當屋敷を窺ひしか淀樣に怨みでもあるのか、無禮者め』と口々に呼はり其の憎々しさ、三條の局は餘りの事に呆れ果て凝と椽先の方を見上ぐれば淀殿に於ては錦綾なす織絹の掛けを羽織りて其の下へ桃色の衣類に掛帶して短刀を帶へ挾み、女の身にあるまじき弓の折を右の手に持つて褥の上で三條の局をハッタと睨み 淀『茲な下司女何故あつて妾を窺ひしか』と言ふの を聞いて局は眼背キリ〳〵と逆立つて 局『やあ其方は淀にてあるか、何かに付けて妾を苦しめんとする憎くき奴、コレ斯く申す妾は今日は己れの身體にては候はず、大政所樣の御名代にてあり つるものを、無禮致さば後の祟りぞ恐ろしからん、加茂の社へ上樣安全の御祈禱掛けての戻りぢや』淀『默りや〳〵、夫は僞り事ぢや、三條の局は蒲生殿の妹ぢや、僅かばかりの供を連れて出歩く筈はない、己れは局に顔の似たる儘其樣な事申すならん、茲な僞り者奴がッ』局『何僞りを申さ

うぞ妾は三條に相違ない……』と言ふ處へズカ ズカ近寄つて來た修理之介、局の襟髪掴んで 修『若し御覽じろ、三條の局に生寫し之れを幸ひとして局の名前を騙る憎くき女斯樣な者は以後の見せしめ何とかせずば相成りますまい』と云ふと局は愈々怒つて大野の手を拂ひ 局『己れ何を致す無禮者ッ退れ〳〵我が身體へは尊くも上樣の御胤を宿し居るぞ……』と局は怒りに餘つて思はず一言饒舌た、夫を聞くと淀殿はムラ〳〵としてぬッくと立上り三條の局の傍はらへズカ〳〵〳〵 淀『エ、茲な僞り者上樣の御胤を宿し、などゝは何事ぞ、胤を宿したとあらば夫は密夫の胤ならん、其方は全く局ならば尙更許す事は出來ぬなれど局が妊娠なせしと云ふ事は誰れ知らざる所之れを以てか其方が局でない事は明かなり、局の名を騙る不屆な女奴かな」

と淀殿は怒りに任して手に持ちし弓を折れを振上げて三條の局をビシャリと打つた、局は大いに驚いて 局『アレ何をする、情けない汝の振舞かな、前の怨みを根に持つて此の局を打ち叩くとは何事ぞ、夫れも只の身體なら厭ひはせぬが今は上様の御胤を宿して居る此の三條、餘りと云へば……』淀『エヽ聞かぬ〳〵左様な事は妾は知らぬ』と云ふて尚ほも打擲、此の三條の局が姙娠したと云ふ事は政所より外に知るものはない、秀吉公は内々夫れを御聞き遊ばして雀躍をして喜ばれたけれども、之れを披露なせば淀が悋氣を起して何んな事をするかも分らぬと仰しやつて何事も云はずに御出陣となつて仕舞つた、夫れが爲めに三條の局は淀殿の手に掛つて苛責の責を見るも氣の毒の始末でございます、實に婦人の悋氣位ゐ恐ろしいものはありませぬ、淀殿においては三條の局が秀吉公の御胤を宿したといふのを聞いて、無法にも局を屋敷へ引入れて打ち打擲、局は口惜しさ遣る方なく 三『ウーム、殺さば殺せ、淀この身はいかにならうとも汝を怨ずにおくべきか』と齒を喰しばつて苦痛を堪ゆるその樣子、淀殿は笑ひながら 淀『なにを申す下卑女怨まば怨め怨まれやう』といひつゝ尚も弓の折をば振上てビシリ〳〵打擲する、その内に饗庭の局に大藏の局の兩人はそれへ來つて左右より局の手を取り『姙娠をしたなどゝ僞り申す憎くき女……』と局をそれへ打倒す、局は今は一生懸命『コレ何をする』と起上らうとするところを今度は黑髪を引掴み脊後へと引倒した、アレッといふところへ淀殿は弓の折れで局の腹の邊りをビシリ〳〵と續け打ち、イヤもう亂暴狼藉女にあるまじき致方、流石氣丈の三條の局も身重の身體であるしそ

の責苦には堪兼て今はヒー〳〵ッと悲鳴を擧げて苦しむ有樣、淀殿始め一同はそれを少しも哀れとおもはず、益々苛責を加へるので局も今は蟲の息この先如何相成るかとおもふ折柄、バラ〳〵とそれへ駈來つた不破伴作、年まだ若く而も透通るやうな美男子だ、それを見ると居合したる大野の家來が『おのれ無禮者奴ッ、なにをする』と左右より打掛つて來たるを 伴『やア猪口才至極な、秀次公の御近侍に其の人ありといはれたる不破伴作とは我事なり、妨げ致して怪我などすなそこ退けやッ』といふより早く、拳を固めて向ふ奴を打倒すその勢ひの高大さ、修理之介大いに怒り『己れ覺悟をしろッ』と一刀ギラリ引拔いて斬つてかゝるを伴作ヒラリと體を轉し大野の襟髪掴んでズデンドウと彼處に投れば、修理之介アッと驚いて起上らうとするところを伴作片足上げて丁と蹴る、そのまゝ大野はウームと目を暈した、實に意氣地のない男、これだから戰も何も出來るものぢやない、伴作においては大野の方へは眼も掛けず早くも飛込み來つて淀殿の持つた る弓の折をもぎ取りて淀殿をばそれへ突倒し、饗庭の局と大藏の局を右と左へ蹴倒すと、流石は京都の女だ『なにをしやはるか、何しやはるか……』といつて呆れて居るその時伴作は大活眼を見開き『やあ無禮なり、蒲生殿の御妹三條の局へ對してこの苛責は何事ぞ、いかに淀殿御嫉の餘りとは申せ棄置く譯には相成らぬ、それに局の御腹に宿りしは未だ御披露なしとはいへ正しく殿下の御胤なり、殊に殿下の御安全を祈るため大政所の御名代として加茂の社へ御參詣の途中ならずや、それへ對して斯る無禮をなすは取りも直さず大政所を蔑しろにいたせし振舞、後の祟りも